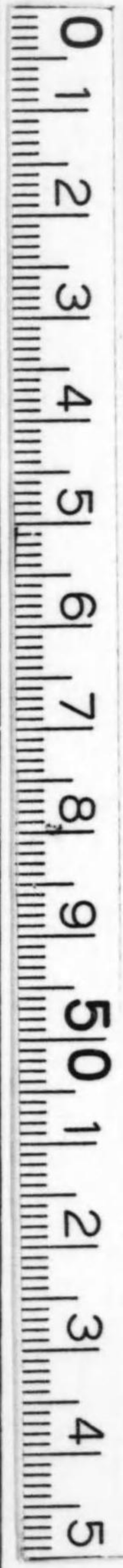


910. 4-Sa99-3ㄣ



1200500754761

9104
99
3



始



495

910.4

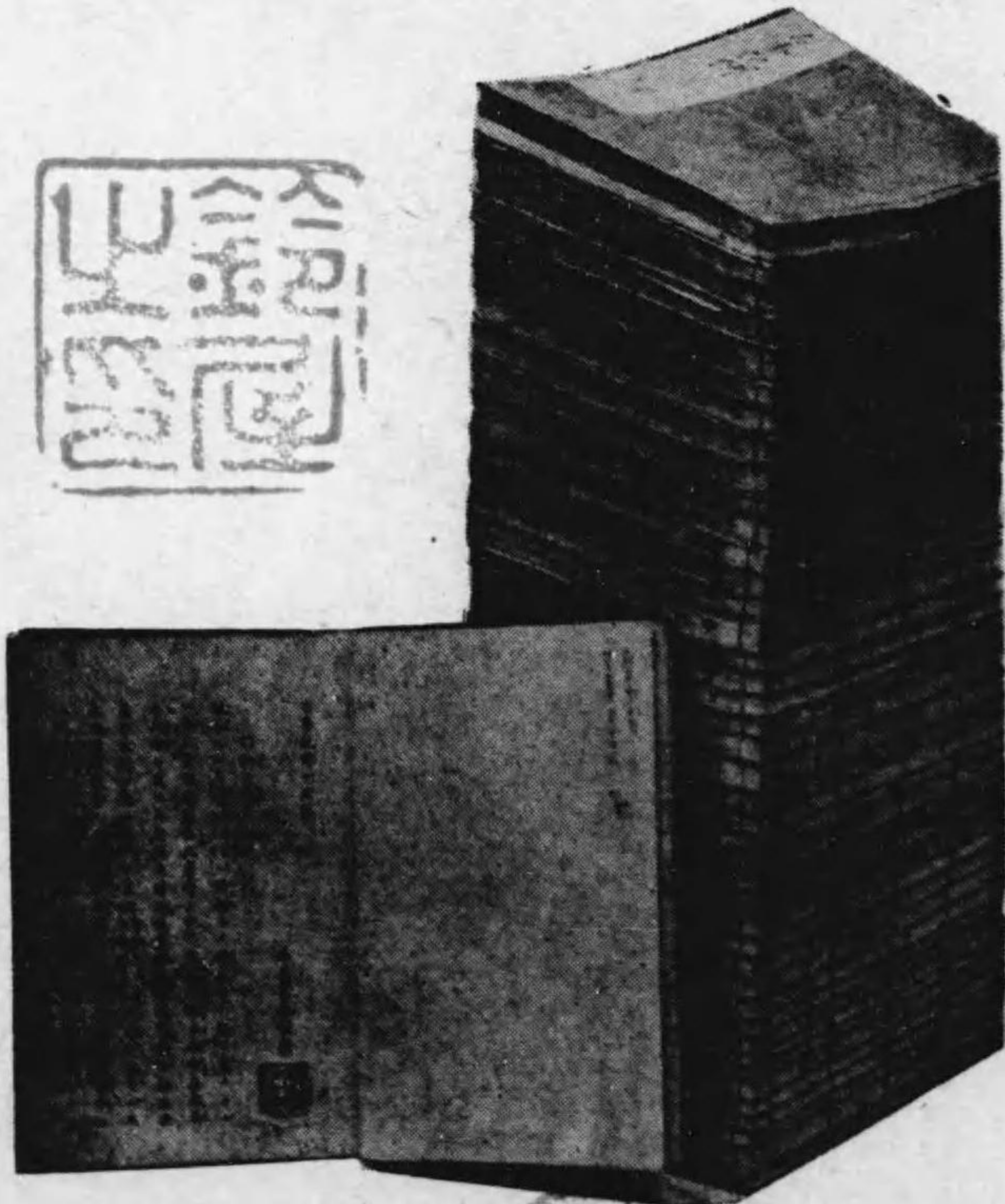
SA99

3

しな 古典

著 濟 山 佐

刊 社 談 建



昭和十九年
古事記傳
本居宣長大



目次

序

I

古典についての一課題……………九

古典と現代精神……………三〇

望郷の精神……………四六

古典とわれら……………五九

東山文學の古典繼承……………六六

近代と古典……………八一

貫き立つもの……………九五

目次

Ⅱ

神話と共 に…………… 一三
 萬葉集について…………… 一六
 源氏物語について…………… 一六
 平家物語について…………… 一八
 谷崎源氏寸感…………… 二〇

Ⅲ

古典文學隨感…………… 二七
 日本古典との疎隔…………… 二八
 古典と音樂…………… 三六
 浪曲小感…………… 三一

序

古典が、日本的なるものや傳統の問題とからんで論ぜられるやうになつてから、もう幾年かたつた。そのことをふりかへつて考へてみると、だんだん思惟や論議だけにとどまらず、深く生きるこゝとのつながりを持つていくやうで、これは何よりよろこばしい。

だが、かうした論議から深まつて生きのいのちのことへかかはりゆくことは、實は單純ならぬ容易ならぬものがひそんでゐる。昨今のわれわれの生き方のことは、いつも念頭をはなれぬことからであるが、古典のこともそれと終始、形と影のやうに相伴つていくとおもふ。

従つて古典の問題も、少しも淀むことなく、考へられ、感じられ、行爲のうへにうつされていくであらう。これはほんとにたいせつなことである。

できるだけ多くのひとたちが、もつとこのことを心にかけてはならない。さういふ思念があつて、このまづしい書をおほやけにすることにしたい。

このなかには、日本神話のことや、萬葉や源氏のやうな作品を、全く不案内なひとに説いていく

つもりでかいたやうなものもあるが、それとても、ただ古昔への追慕といふものでなく、「今」とのかかはりにおいて述べしるしたつもりで、自分の眞意は多少ともこんなものにもにじんでおよう。本書の題名は、特にかうした一般的な言ひ方をしたが、これはやはり多くのひとたちが、古典の問題をほんとに自分たちのこととして考へてくれるやうに、そしてやがては私の親しい同行となつていただけるやうにとの念願からであつて、本書の内容や精神までが低く俗なものだと思はれることではない。

昭和十八年七月五日

佐 山 濟

古典のはなし

I

古典についての一課題

古典といふものが私たちにとつて、たいせつなものと見られるやうになつてきたことは、正しいことで、誰にも異論など無い筈である。だから近頃では、誰も彼も、日本の古典に就いていろいろと意見を述べてゐる。

むかしは、日本の古典など見向きもしなかつたひとまで、古典なしには夜も日も明けないうなことを言つてゐるので、多少とも、この方面のことにたづきはつてきてゐる私たちは、むしろ驚かされるやうなことがしばしばある。これは驚かされるといふのであつて、以前に古典を見向きもしなかつたのに、今になつて古典の價値をしきりに説くことを非難するといふのではない。

そのやうに多くのひとびとが、こぞつて古典を注意し價値を認め出したといふことは、とにかくそこに十分の意味が、また意味以上に何かがあることだと思ふ。どうも誰もが、近頃では古典を言



1

ふから、言はないと時代から取り残されるとか、もつと劣つたところでは、處世上、具合ひがわるいからだ、といふやうな考へのひとが假にあつたとしても、さういふ心得のひとにかまつてゐなくてもいいであらう。

さういふひとといふのは、いつの時代でもあつたのだし、またさういふひとがほんとに意義のある生き方をしたり、立派な仕事をしたといふことは無いのだ。

それよりひとびとのこの時代に日本民族として生き抜かうとする、高い純粋な意志を認めなくてはならぬ。善意を以て明かるく認めなくてはならぬ。

2

人間とか人類といふ問題を、ただ世界的な國際的な立場から考へてゐた思潮が、やはり歴史の進み方の必然性に依つて引き汐になり、それより「民族」といふことが、私たちの時代にさし當つて生き、考へるためには、どうしても避けがたい重要なこととなり始めてから、もう數年の歲月が流れた。

かういふ「民族」を、生きたり考へたりするうへの重大な標準にしはじめた頃から、「日本的なも

の」や「傳統」や「古典」といふことは、新しくひとの心を領してきたのである。

西洋でも實はおのおのの民族が、この問題を考へはじめたので、従つて、われわれはまた、われわれの立場から、世界的動向と關聯しつつ、日本的なものとは何か、傳統とは何か、古典とは何か、等々をたいせつな課題としてとりあげはじめたのであつた。

この課題のうちで、いま「古典」に就いて考へてみると、はじめのうちは何としても、漸くそれが思想のうへの問題になつたばかりであつたためか、いろいろな立場から、いろいろな角度から觀ていく多くの觀方があつたし、従つて、ずるぶんといろんな論議がさかんに起つたと思ふ。

或るひとは、われわれの古典のむしろ貧しさを指摘したりした。或るひとは、その長短を説いたりした。或るひとは、昔ながらにそれに全部的に魅せられてゐたので、さうした喧しい論議などから超然として、うつくしい夢見ごろを持ちつづけた。この夢見ごろに耽るといふのは、どちらかといへば古典への幼い對し方をしてゐるひとで、古典をめぐる論議に無關心なばかりでなく、或ひはいつも歴史や時代に對しても同じなのであらう。

それだから、かういふ緊迫した時代の問題としては、別にして考へておいた方がよいであらう。

とにかく、古典がかくもひとびとの口の端に乗りはじめて暫くの間といふものは、いろいろな觀

方や議論が、そこにありそこに湧き起つたのであるが、この頃ではそれではどうであらうか。

日本的なものといふことを考へるにしても、傳統や古典を考へるにしても、つまりは、自己の民族や、それが生んだ文化の尊さや値打ちを考へはじめたことであつたから、何としてもその赴くところは、それらをあがめ讃へるといふことに傾くといふことは自然のことであつた。それらをつまらぬものと考へるのが底意であるならば、第一、あれほどのさかんな議論も觀方も生じる筈はないのであつた。永いこと近代の日本の文化の擔ひ手たちが、どつちかといへば古典を忘れてゐた後のことであつたし、自己への自覺を持ち合せなかつた今迄のことであるので、なかにはわれわれの古典の貧しさなど言ふひとがあつても、さうした意見が優勢になるなどは、到底、考へられないことであらう。

併し、これはもちろん、下手な味氣ないまづい言ひ方である。はじめから、かうなるのはわかつてゐたなどといふ言ひ方は、おそらくひとに生き生きしたものや、力などを附與してくれるものではない。さういふ理窟は一應あつても、そんな理窟をくどくど言つてゐても始まらない。實はかうした理窟を超えて、その日その日の私たちの生きていく道々に、かうなる事情が抜きさしならぬものとしてあつたからである。

その點を考へねば、われわれは浮ばれないのである。われわれ自身を自分で手で殺してしまふことになる。

古典への情熱が、自覺のここから燃えさかつてきたのである。古典がおのづからはつきりした姿を持つて、われわれの眼前に現はれてきたのであつた。ただ限られた有志のひとたちだけに依つて、古典が扱はれてゐた時代とはすつかり違つてきたのである。

それは時代が渦巻き、そこに革新の氣運が強まつてくるときには、今までもあつたことと言へるであらうが、この今の時代が、全く未曾有の時代と言はれてゐるだけに、古典への情熱の烈しさ、その古典の姿のあきらかさといふものも亦、未曾有のことであるかと思ふ。

そこでひとびとは古典へこころを湧き立たせる。古典を讃へて止まぬといふことになる。これは正しいことであり、必然のことである。この大勢の赴くところを否定することはできない。

だが、かういふ近頃の古典へ向ふこころを眺め、考へ、反省したことであるが、古典禮讚がぐんぐんと高く翔りすぎてしまふのではないかと思ふことがある。高く翔りすぎてもいいではないかと

いふのだらうか。

その古典への情熱をよしとすることはできても、それが無際限に翔り行くことは、いささかその結果を思ふとき、いささか不安なきをえない。

われわれにさういふ不安な危惧の念を抱かせる古典観といふのは、それではどういふものか。それは古典を全く神聖なものとし、絶対なものとして、その前に無条件でひざまづかねばならぬとする考へのことである。過去といふものは尊厳なものである。その過去から生まれたものであるから、古典はやはり尊厳で、少しも批判などすることはできないのだ。私たちが、なまじつかさういふ古典を批判したりなどすれば、忽ち古典はそれをきびしく拒んでしまつて、古典から壓し倒され滅びてしまふのだ、といふやうな考へである。古典はひとを沈黙させてしまふところに古典の偉大さがあるともいふ。

だから、かうした考へでは、われわれは、われわれの生きてゐる現在の立場から、さういふ過去の偉大な古典を、とやかく考へて、ここがいい、あそこがわるい、などと言ふことは許されないのだといふ。だからかうしてわれわれが今日生きて行くその生活の中に持つべき原理ともいふべきものは、過ぎ去つたところのものが、言はば祖宗としての權威を持つて要求してくるものなのだ、と

考へる。

なるほど古典は尊く、またそれだけ高い価値を持つてゐるからこそ、實に古典と呼ぶことのできるのは自明のことである。それだから、しばしば古典はひとを沈黙させるだけの力を持つてわれわれに迫り來るのであらう。

併し、ここで考へてみると、古典を尊いものとして手に把り、またそれに依つて沈黙させられたとしても、いつもいつも、またいつまでもわれわれは沈黙しひざまづいてのみゐるであらうか。

それが偉大であり高く大きい精神に貫かれてゐるために、しばしば深い感動をしびれるやうに身を感じられればこそ、そこから新しい創造の源泉ともなるものが湧くことであらう。

われわれは沈黙させられる。時として、その沈黙は久しくうちつづくことであらう。

けれどやがてその感動の響きのうちから、そこにわれわれの叡知と感性とが、實に力強く働き出してき、あれを取りこれを捨てるといふ思慮が起るのではなからうか。——といふと安易で俗な言ひ方になるやうだが、或る時は、いちばん一定の資性や個性にとつて必須なものが烈しく注ぎ込まれ、必須ならざるものはそのままに放ち置かれることにならう。このやうな場合を、次の時代の新たなものを創造する主體に於て著しくみられるだらうと思ふ。

また、批評や研究といふ場合には、透徹した知性が一般人や創造家の氣づかない點にまで、眼光が射映して、そこから整理されたかたちで、その本質・成り立ち・現在にとつて必要なもの、ならざるものが、明るみへ取り出されて、多くの寄與をなすものと思ふ。

大體、古典といつても、その中味はかなり複雑で多岐である。また決して合理的なものばかりでなく、甚だ不合理なものも含んでゐる。また時には不純と思はれるものも介在してゐることがあるだらう。これらのものは、しばしば、所謂、傳統といふものと絡んでゐる場合が多い。

さうした雑多なものうちを擽んで、人間性といふか倫理性といふか、さうした理念が具體化されて、われわれの文化を動かし、はたらきかけて行くのだ。けれども、かうした高貴なみごとな精神を輝かすにしても、歴史や現實といふものは、より以上に複雑で混亂してゐる場合が多い。さういふ歴史や現實を突き抜けて、或る時は現實に順應し、また反撥し、また格闘して、どうかして建設のこのころを見失ふまいとしてゐるかの如くである。これが古典を買き通してゐるものではないか。

それだのにただ過去の權威だけを無條件に認め、その前に拜跪してしまふといふことはどういふことだらうか。

われわれは、いつもいつも黙つて前の時代からの精神的具象物を受け取つていいのであらうか。ただ盲目的に何の思量もなしに、これを受け繼いでいいものであるならば、また、ただただそれに愛情のやはらかさや、あこがれごころを消極的にのみ示して安心できるものであるならば、むしろ害ありとはいへないまでも、古典に含まれてゐるところのものは、プラスの意味を持たないものではあるまいか。事實、かうした接受の仕方では、眞にわれわれは、今日以後の文化に新しい創造性を持つことができるであらうか。古典の持つ、文化性、乃至は文藝性といふものは、その内的な力がやはり生きてゐて、われわれのたつた今の理念とガッチリ結び合ふものではなからうか。

私どもには、古典的なるものへ立ち向ふ個性が、研究や批評といふ場合はもちろんのこと、創作などの場合でも、必ずしも自我のただ恣きな働きとのみ考へにくいのである。

古典とは、確かにそこに在り一つの秩序を持つたものであらう。が、そこに新らしい「今」の精神や眼が加へられてゆくと、多少とも既存の秩序は改變され調整されるのではあるまいか。そこに新しきものと古きものととの順應や融合や統一がなされるのではあるまいか。即ち、過ぎ去つたも

のといへども、既存のものといへども、現在に依つて修正され、發展するのではあるまいか。かうしたところを考へることが可能であるために、どのやうな文化的個性といへども、全く傳統から絶縁して立ち、働くといふことは不可能なのであらう。全く新しいものを創造したと稱するあらゆる文化作品の如きものがあつたとしても、それは單に言葉だけの意味でしかないと思ふ。

また、かやうな事情があるために、古典はおのおのの時代の眼が角度を變へたり、取りあげる面を違へたりして、同一の作品が異なつた解釋や觀方を附與されるのではあるまいか。つまり「今」と「昔」とが、その「今」の在り方や意味とで、結び付き方が違つてくるのであらう。

5

だから、古典はわれわれの眼前に大きく輝いて君臨するといつても、そしてそのままにいちどは、なるほど頭を垂れ沈黙するとしても、それだけでつひに終つてしまふものではあるまいといふことである。さうあつてはならぬだらうし、またそれは望んでも事實は不可能なことではなからうか。

「今」に立つて、哲學者のいふ「永遠の今」に在つて、歴史や過去を觀ることは、決して「さかし

らざころ」とは片附けられないので、それこそ人間の具有する尊貴なものであると思ふ。それあるがために、人間はいろいろのことをしてきたし、いろいろな價值あるものを生んできたのである。

このやうに古典に愛情を燃やす善意を含んだ思惟が迸つて、古典を絶對とする考へは、決して嗤ひ去ることはできないにしても、そこに行き過ぎ、思ひ違ひといふものがあることを認めざるをえない。

既に、今の時代の艱難と榮譽のさ中に置かれたあまり、かうした飛翔しすぎた思考や提唱を示し叙べることすら、古典への一種の批判精神であると言へないことはない。

だからそこに與へられたすぐれた永い審判に堪へた古典のまへに永く沈黙し、その沈黙のうちに一つの覺醒がきて、そこから人間の尊貴な叡智がはたらき出し、次の創造活動へと移つて行くといふのが、ほかならぬ精神の實情であり、それは古典を決して冒瀆するものでなく、むしろほんとうに生かすものだといふことを、言つていいのであらう。

われわれ末輩もさうありたいし、またこの國の先達たちもみなさうした營みをしつつ、めいめいの光輝ある時代に、光輝ある古典復活の事業を爲しとげていつたのであらう。

古典と現代精神

1

古代にかかれたものから始まつて、一體いつまでの頃ののものまでを古典とするか——といふ考へは、おそろしく古典とはたまた古い典籍のことを意味するといふ考へ方であらう。單にそれを時間性のうちに取り入れて考へた、まことにしらせ切つた平俗な思惟から來たるものであらう。何といつても甚だ古い時代にかかれたものは、やはり何らかの重要な價值を持つてをり、それは古典に外ならぬとする考へ方が生じ易いのも、やはりどこまでも典籍主義の周邊に浮ぶ亡靈のやうである。どのやうに古い時代の述作に係はるからといつても、それが直ちに古典とは言ひえないのである。同時にまた、それが比較的われわれに近い時代に作られたものであるからといつて、古典ではないと言ひ切れないのである。つまりそこには、時間性を超えた述作そのものの内實の問題が考へられてくる筈である。しかも、單に客觀的なものとして内實なるものがそこに存するといふのではなく、その

内實が主體的なるものとなつて働き生きることが、古典性を決定させるものと所詮はなるのではない。それはつまり言つてみれば、ラフカディオ・ヘルンが言つたやうに、古典たるためには、單に或る特定の批評家などが認定したやうなものでなく、一定の時を背景にしながら、多くの人々の心の嚴正な審判に堪へてきたものでなければならぬであらう。多くの人々の審判に堪へるためにはやはり、昨日や一昨日といふ短い時間のうちに於ては、不可能なのである。

多くの人々の審判に堪へる、といふ場合には、それが全く連綿として續いて絶対に絶えるときが無かつたと、必ずしも言ふこともない。時としてそれは絶ち切れるときがある。あつてもそれはかまはない。再びそれは新らしく蘇ることがあるだらう。

少しく西歐近代の頽廢的なイロニーの匂ひがする言ひ方ではあるが、ヴァレリーはこのことをやや逆説的に言つてゐる。

「作品の存續期間はその効用の存續期間である。だから、それは不連続的である。ヴィルジルがまるで役に立たない幾世紀もあるのである。然しまた、かつて存在したすべてのものに、そして埋れつくさなかつたすべてのものに、また蘇生するチャンスはあるのである。例が、論據が、先例が、口實が入用なことがあるから、こんな次第で一度死んだ書物が、また動き出したり、ものを云つた

りする」。

われわれの萬葉集がひととき空しく日光をみないで櫃の中に埋もれてゐた時代があつた。あの中世短歌の傳統のうへにいつも王座の如くみえた古今集が、ひどく叩きつけられた時代がつひ近くにあつたことであつた。そのやうに絶ち切れてしまはなくても、不當に高い評價を受けたり、また不當に誹謗の對象になつたりすることもあつた。源氏物語の如きはさうであつた。

そのやうに古典とは、ただ古い典籍といふことでなく、生きた働きに於てあるものの如くである。人間の精神に入り込み、人間をいつも無限に生かせる能力を持つてゐる。然も古典そのものは一面的でなく、むしろ甚だ多面的であるので、ふしぎと別の面から捉へ観るといふ無限なものが、次ぎ次ぎと出てくる。或る時代の如きは、もうその一面からでなくては、どうしてもその物を観ることは絶對に考へられないといふやうな、それほど抜きさしならぬやうな意義を以て、人間の精神とその物とが觸れ合ひ生動するのである。併し、さうした輝やいたその一面もいつか曇りを帯びてきたかと思ふと、こんどは別の面が徐々に輝やき始めてくる。そしてその光澤はまた強く輝やくやうになつてきたりする。

かうした面のみではない。人間の眼がその古典を捉へるといふか、捉へられるといふか、さうし

た相對的な關聯交渉の裡にある働き方も常に一定してゐたり一律ではない。あらゆる人間の内に湧する主體性に即應するところのものが無限に古典そのもののうちに包藏されてゐる。従つてその主體性の本質や形態が變じても、それにさうたやすくは即應できないといふやうな貧困さは、古典と考へられるやうな物のうちには無いといつてもさしつかへないであらう。或る一定の古典の生命が絶ち切れたといつても、それは必ずしも休止を意味するとは限らないで、主體性の轉換が、次の新たな主體性を呼び迎へるために一定の時を招待する準備期と考へられないこともない。

2

古典といつても自國のそれと異邦のそれとがあるであらう。今迄言つてきたことは主として自國のそれを考へて言つたことであるが、異邦のそれに就いて少しく考へてみる。

異邦の古典を接受する主體の態度にもさまざまあるであらう。けれども、接受する主體が自己の立場を確認し、自己の民族の文化的自覺のうへに立つてこれを接受する場合には、そこにおのづから自他の區劃は薄れてくるのではあるまいか。またそれは、その主體を立たしてゐる地盤や條件といふものが考へられねばならないので、卒然として孤立のままの主體が異邦の古典を掴むといふこ

とは、既に考へることも不可能であらう。主體を支へる力や地盤がこちら側に形造られる一定の時があり、そしてそれらの力の均衡が保たれ地盤や條件が整備されて、そこに主體の活動が始まり、歴史の要請がさうした或る個體の働きに任務を課してくる。つまり歴史的要請が、たまたま異邦の古典の包蔵するものをも攝取しようとする烈しい意慾に燃えたつのである。そのときの歴史的要請、そしてそれを課された主體は自國か異邦かの如き問題にかかづらつたり、また、自國のもののみ限定しようといふ固陋な精神を持ち合せないのである。主體を支へる民族の精神、文化の意慾は、なみなみならぬ旺んな烈しさに大きく輝き燃え立つからである。異邦の文化、異邦の古典を攝取してきたがために、自國の文化や精神を荼毒したと考へたりするのは、むしろ當時に於ては歴史的發展の流れを逸脱した固陋で貧困な意識か、乃至は、後の或る變革期、轉換期の新らしい意識から反措定的性質を以て考へられたときのことであらう。歴史の進行が旺んな音響をとどろかせてなされるときは、甚だしく雄大な構想を持つてゐる。そのやうに狷介に、またしかく單純ではありえない。

たとへば、佛教も異邦の文化である。儒教もまた然りである。併し、それらの異邦のものを捌くところの主體のうちには、そのときの歴史的要請を力強く身に體し、彼を棄て此れを取り、その中から醇乎とした統一に於て成り立たせてしまふ働きが生きてゐる。

われわれは近世初頭の藤原惺窩の動き方に於てそれをみる事ができるであらう。青年期の大半を佛教的教養のうちに過した彼が、程朱の學の精神に觸れたとき、強硬な排佛論者となつてしまつた。彼が四書五經を加點したところといふのは、眞に新しい目覚めであり、自由にして熾烈な意氣に燃え立つてゐたものであつた。「もろこしにては儒道と云ひ、日本にては神道といふ、名はかはり心は一なり」(假名性理)といふ、所謂、神儒一致説は、排佛論から宋學への非常な尊信へと轉じ、然も單にかうした轉移といふことのみでなく、そこには確乎とした自國の歴史、自國の文化の本流に即したものを持つてゐての思惟であり信念であつたことは「日本にては神道といふ」といつた片言のうちすら閃めいてゐるのである。「名はかはり心は一なり」といつても、それは何れでも可なりといふ御都合主義ではないことは言を要しない。この際の「神道」とは、民族的な自覺、歴史の本流の方向の體感したところから湧き起つたものを、單一化したときの精神の具象性である。かうした傾向は必ずしも惺窩に於てのみ、みられるところではなく、所謂、闇齋學派や江西學派のひとたちにも、神道との融化を意圖したものは夥しかつたが、必ずしも時代への阿諛と誹り去ることはできないであらう。惺窩がさうした御都合主義、事大主義でなかつたことは、儒學に對する態度に

於ても、その形骸化した訓詁主義を捨てて、その内に在るところの精神、その倫理が感じられ、生命的に全體的に把握することに情熱を傾けた點からでも窺ふことができると思ふ。

自分は惶窩のことに就いて贅言を弄しすぎたであらうか。それは必ずしも贅言ではなく、まだまだ自分の意を盡したとは考へない。自分は更に別箇の儒者を捉へて述べてもいい。

近頃になつて一部の人が研究された富永仲基、そしておそらくその學統を繼いでゐる筈の三浦梅園は、惶窩より一世紀も後の人間であるが、その頃はもはや、われわれ近世の歴史的意志がもつと強く昂揚し、凡ゆる混沌と喧騒とを押し包んで時代の黎明の光りがもう戸口にほんのり決つてゐるといつてもよかつた。

梅園の思想は、それでは自國の古典や、自國の文化の系譜のうちからのみ生み出されたものであらうか。有名な大著といはれる三語——玄語・贅語・敢語。就中、彼の日本的な倫理性を最も強く示した「敢語」と雖、それはこの國の文化傳統のみの子であらうか。彼の倫理主義といつてもやはり彼の世界觀の根本をなしてゐるかに思はれる、謂ふところの「一元氣説」のうへに組織されたものであつた。「氣」の無限性が時として陰となり陽となつて生成發展するといふ考へ方は、われわれ神道にみられるところの思惟方法と近似してゐることは論を俟たないが、その背後には支那の「易

經」の考へ方が有方な役割をつとめてゐたと言つてさしつかへないと思ふ。即ち、梅園の自國の古典の光被のうちにその教養を形造つてをり、それと時代との濺刺とした關聯を保ち乍ら、その本質のうちにはやはり異邦の古典たる「易」なるものを、單に典籍としてではなく、それが有する無限の或る角面の光澤を攝取してゐたところがあつたことを見逃しえないであらう。

彼と此れとが融合され統一され、その統合するところの精神の主體性が、不動の生きた自覺のうへに毅然と逞しく立つてゐたことは、梅園も、惶窩も同じである。

ひるがへつて詩の世界はどうであつたか。芭蕉のことを考へてみよう。芭蕉の古典への接受は、はたしてどれどれであつたかは、確定できないが、おそらく彼の作品を通してみれば決して一、二に止まらないであらうと思ふ。けれども彼みづからも言ひ、しばしばひとも言ふところの、李白や杜甫や西行や宗祇といったひとの作品から汲み取らうとするものがひたすらであつたことをさし當つて考へてもいい。俊成や定家、それから白樂天なども同じく彼が、魂を籠めて入り込んで行つた詩の原郷であらう。

「志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これより實之道にも入るべき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、

わづかに都鄙かぞへて十ヲの指をふさず。君も則此十ヲの指たるべし。能々御つつしみ御修行御尤に奉_レ存候」(曲水宛書簡)

「ただ釋阿・西行のことばのみ、かりそめにいひ散らされし仇なるたはぶれごとも、哀なる處おほし。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも(筆者註・後鳥羽院御口傳のこと)これらは歌に實ありて而もかなしびを添ふるとの給ひ侍りしとかや。されば此の御言葉を力として、其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ。猶古人の跡を求めず古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり」(許六離別の詞)

これらの文章に見えるそれぞれの個人の名とか典籍の名とかいふものより、むしろ「歌に實ありて而もかなしびを添ふる」といふこと「其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ」とか、空海の性靈集の「古人の跡を求めず古人の求めたる所を求めよ」などといふ雙句のうちに、所謂、芭蕉の藝術の根本的な精神や、さういふクラシックへの態度といふものがキラリと閃めいてゐる。後鳥羽院御口傳の御精神は實に芭蕉に於ては、蕉風の「まこと」や「さび」となつて新らしい俳諧の精神となつてゐたのだし、空海の言葉を慕つたことは、芭蕉が固定した古典主義のエピゴーネンではなく、常に凝滞を許さない「流行」を主張して止まない發展的な詩人であつたこと、藝術的實踐と並行し

て抽象的にも抱懷されてゐたものであることを、告知してゐるものと思はれる。

芭蕉はあのひとつの詩人的決意のもとに、しばしば旅にのぼつたが、そのとき唐の詩人の作品をそして西行の家集を伴ふことを忘れなかつた——つまりその異邦の作品といふのは李杜や樂天のものであるが、旅の間にも手離さなかつたことは、彼自身の内部を見つめることと同じやうに、異邦の古典の内部をみつめてゐることを止めなかつたことである。そしてこの際——といふのは、さういふ彼の國と此の國との古典をうちまぜて身に附けるといふ場合には、もうその時こそは——それは彼の國と此の國といふ差別や撰擇を喪ふのだといふことである。主體性の確かさは、この國の物に當るときもかの國のものに當るときも、もはや迷路などはその前に存しなかつた。この國の攝るべきもの、またそこへ潜み入るところの不動のこころは、何の疑惑なしに、かの國の物へ同じやうに入り込みうるのであつた。従つて芭蕉の如きも西行や宗祇のものからはどれだけ、李杜からはどれだけ攝る、などといふ數量的な目算が働いたわけではない。そこには確實にして靈妙な芭蕉の眼と心がちかかに、或る時は西行に宗祇に、或る時は李白に杜甫にと自由濶達に浸透し觸發したのであつた。

そしてこのことは、芭蕉といふ詩魂の不撓さが直接には爲したことであつたが、前にも言つた

やうに、芭蕉といふ詩人がそれを何の懷疑や混迷を感じないでなし能ふまでに、詩的文化のその時の段階が、さうした自由にしてゆるぎなき翔りをなすだけの體制や整備が既に大きく遂げられてゐたことであつた。そのことは、前の惺窩の場合にしても、梅園の場合にしても同じことであつた。

そのやうな、かうした撰ばれた文化の擔ひ手たちが持つた念願や決意や行動が、嘗てなしたところとは誤りではなく、むしろ正當でありみごとであつたと言へるのである。

3

さう考へてくれば、自己の大本が確立せず、従つてそこに自覺なく、ゆるぎない足場がなく、徒に背伸びをして、あちこちと異邦の文化乃至は古典に仇しごころを寄せ、涉獵することの貧しい頽廢が、いかにあはれに危険なものであるかは識ることができらう。それはひとつの文化の熱病の如きものである。さうした熱病を病んだときが、われわれの國の文化の歴史に皆無であつたとはいへないであらう。殊に或る特定の個人の心懷に、さうした熱病が憑いたといふことは確かにあつた筈である。さうした個人やその時代の思潮を襲つた病患の虜となつた者ほど、悲惨なものがまたあるか。どこに彼等は生を見出すか。また栖すまを定めるのか。あはれな心猿に驅られて、或る文

化の國土へ越境したとしても、その後のことを思ひみれば明らかであらう。

熱病が次第に怠つてくれば、おのづからそこに住み着くべき場所が見えてくる筈である。われわれの近代（明治大正時代）といふ時代のことを考へてみると、そこにはかうした熱病の姿がかなり著しく見えてゐるのではなからうか。自己の足場を喪ひ、心の祖國を捨てて、ただ無承に海彼のきつ文化の香氣に酔ひ痴れた姿であつた。ただわけもなく一圖にそれを掴まうとした。それは制度から、思考から、風俗から、そして肉體の組織までも彼に倣はうとあせりにあせつた。世界の體制の水準から立ち遅れたことを一舉に取り戻さうとするための狂奔であつたのだが、それは一般の民衆の心情や意識は止むをえぬとしても、福澤諭吉の如き、中村敬宇や加藤弘之の如き文明開化主義の指導者に於てすら、今日の眼を以て看れば、多少行き過ぎの感がないでもない。英米主義、フランス主義、そしてドイツ主義と次々に歡待したのであるが、とにかくそれらの文化を攝るものは宙に浮いてゐたことで、さうした近代主義の醸した殘滓は、大正時代を経て未だ今日でも不消化のまま、大衆の胸奥に凝結してゐる。大衆は永い傳統を持つた家族主義的精神と、英米流の個人主義的精神とが雜然とこびり附いてゐる。擇ばれたる文化的指導者は刻々に發展する時を認識し感受し、それに即應するであらう。併し、一般の被指導者たる大衆は、嘗て一定の時期に注入され薫染

したところの思潮や意識が凝固したまゝいつまでも沈澱してゐる。そしてそれが低劣な态ままなる利己の満足を遂行しようとする際、氣儘氣隨に、そして横暴に、取り出され利用され、自己を誤らしめ世を毒してゐる。彼らは何の自覺なく批判なく、與へられるものを嬉々として受け取つてきたのであつた。受け取つたばかりでなく、やがては進んで貪り摺む衝動に驅られたのであつた。おそらく彼らは、それが青春の日の熱病であつたことにも氣づかないでゐるであらう。そしてそれが自己の精神を腐蝕してゐる固疾となつてゐることも心づかないでゐるであらう。このやうな狀況に置かれてゐる老衰の彼らは甚だしく不幸である。

そのやうな不幸は、かういふ一般大衆のうへにのみ浸蝕したのではない。全く、明治大正を通じて、われわれ知識人といはれる者も、何ほどの文化的不幸に襲はれたといへると思ふ。このことは、既に一般に考へられてきたことであるが、今日の知識人といはれる者の教養の源泉ともいふべきものが、主として西歐文化だといふことである。近代の日本の知識人たちは、記紀を讀まなくても、バルフィンチの「傳説の時代」や「ドイッチェミトロギー」を讀み、「撰擇集」や「正法眼藏」をみなくても「聖書」や「アウグスチヌス」をみてきたのであつた。受験苦の中に「徒然草」は、努力しつつ繙いたが、パスカルの「パンセ」は自ら進んで取りついたのであつた。だが併し、彼ら

知識人たちは、その間におのづから矛盾を感じ苦惱と焦燥とを持つてゐた。それは文藝などの場合に、自然主義文學が知性的には西歐的であつても、肉體的にはこの國の傳統や、執拗に蟠つてゐる封建性を脱却できなかつたといふやうな局部的なものではなく、實にわれわれの近代文藝全體が、初めの氣負ひ立つた、そして華やかな行進とはうらはらに、冷厳かなしい壁に突き當つてしまつたのであつた。さうしたことは、島崎藤村の初期の作品や、透谷の評論——といふより彼の生涯のうへにもはつきり讀みとれるところである。さうした苦悶の傳統を擔ひつづけ乍らも、現在までやはり、日本には小説らしい小説はない、戯曲らしい戯曲はないと、嗟歎したり自嘲したりして、自然と手に把るものはトルストイであつたり、ドストイェフスキーやバルザックであつたり、またイブセンやハウプトマンであつたりした。漸くさうした足元のあぶなかしいことに氣が付き、一般知識人の教養の問題が一種の思想的混迷期に入つて論議された數年前あたりの頃、かうした文化の不均衡性を考へて、均衡性を保たせねばならぬといふ聲が喧しかつたことを想ひ起すのである。

さういふこの近代の日本文化のうちに醗酵した苦惱憂悶といふものも、今にして考へれば當然すぎるほど當然なことであつた。わが國の傳統が如何にあつたか、またわが國の地盤がどういふ構造であり性格であつたか、といふ問題や反省を無視して一圖に海彼のものに飛び附いていつたのであ

るから。前に言つた芭蕉が李杜や樂天のものから血肉になるものを攝つたときのやうな個人を超えた文化的な地ならし、が明治大正時代にはできてゐたかどうかを考へてみるべきであつた。どんなに新らしいものを創造するといつても、必ずそこには傳統の問題が入り込むのである。今までと全く切り離されて眞に新たなものは創められないであらう。デカルトが眞に新しいフランス哲學を造り打ち樹てたと稱しても、その新しく造りあげられたデカルト哲學のうちには、やはりフランス哲學の傳統なり、もつとそれ以前の古代ギリシヤ哲學の傳統から抜け出られなかつたといふことは、哲學史家などが近頃、認めてゐるところではなからうか。

ところで、かうしたわれわれ近代の文化の發展の様相が性急に西歐主義であつたことには、その對應の仕方に誤りがあつたけれども、西歐文化を攝取してきたといふこと、そのことは歴史的必然性に貫かれたものであつて、そのことは明治元年に明治天皇が國民に示し給うた五箇條の御誓文の「知識ヲ世界ニ求め、大ニ皇基ヲ振基スヘシ」の御言葉に現はれた御方針から考へ奉つても、是非を論ずる餘地は無いであらう。わが國の文化の傳統を忘却し、わが國の古典に冷淡であつて、西歐文化に熱中し、西歐古典を所謂、唯一の古典と見做したといふ、その點を特に斜視して、それはわが國の文化が全く、近代西歐文化——特に英米の貨幣主義文化の植民地化に、益々拍車をかけるや

うなことをわれわれ自らがなしてきたのだといふ風に説くものもあるが、それはわれわれ民族の主體性の優秀を忘れて、ただ西歐文化の側からのみ考へた妥當ならぬ意見で、また、わが國が世界歴史の發展段階に秀抜な役割を果さんがためにいちどは通らねばならなかつた歴史的な關門であつたといふことを見落した考へといふべきであらう。たださういふ歴史的關門をわれわれが通過することに依つて、何ほどの過誤を犯したといふことを反省し、再びその轍を踏まないところの、所謂、將來への良き教訓となしえたと考へるべきである。

西歐文化への早急な鷓呑みはいろいろなものを忘却の淵へ投げ込んできた。就中、われわれの古典がそれであつた。併し、それは次第に大正の終り頃から、ひとびとの間に氣づかれはじめたのであつた。ただひとつの趣味である場合もあれば、また多少、批判的である意識もあつたが、とにかく忘れたものを何ほどのひとびとが自らの心情や知性のうちに呼び戻してきたのである。その後、學界でも眞面目に日本古典の検討が取りあげられてきたのであるが、一般の文化活動の重大な一翼としてほんとに活潑な關心を持たれるやうになつたのは、切迫し動搖し始めた世界情勢との

深い關聯に於て、日本の自覺の當面した課題として思ひを致さねばならなくなつたつひ近年の事に屬する。

かくして今は、結局、西歐の文化に對する批判と祖國文化に對する新らしい價値の發見といふ、この二つの關係のうへに立つたところに、われわれは今日の眞の文化的意義を持つて進み動いてゐる。祖國文化に對する新らしい價値の發見のうちには勿論、復古主義的精神が強いのであるが、これは決して今日ではわが國だけのことでなく、前にも言つたやうに、實はかうした自國の民族や自國の文化に對する自覺はヨーロッパ全體が既に活潑にやつてゐることである。ヨーロッパは、ヨーロッパのみならず、アリアンの文化を反省し批判しなければならなくなつてきてゐる。ヨーロッパの文化、西洋の文化を批判し、その黄昏の意識に肌寒い思ひを感じ始めたのは既にスピングラーなどの「西洋の没落」にもみられるのだが、われわれは既に遠くニイチエやキエルケゴールやまた或る意味で西歐と東洋との中間的民族であるかの如きロシアのドストイェフスキーなどが、西歐の文化の運命を考へ批判してゐたことを、いまにして新たに考へ出すことができる。アリアンの文化といふとひとつであつても、英米文化と樞軸國家文化とは二つの違つた陣營であることもたしかである。特にドイツは最も西歐文化——就中、英米文化に對して鋭く批判し自國の民族のうへに立

つた純粹な傳統的精神の自覺と強調とに非常な努力を拂つてゐる。歴史研究、特に考古學の研究が近年頗る隆昌になつて、そこに古代ゲルマンの文化との深い聯繫を見出すことに意を注ぎ、所謂、新らしい「二十世紀の神話」を力強く説き出したのである。

併し、われわれの見るところでは、彼らのさうした叫喚の烈しさやその精神は認めることはできても、どうもそこにはただ神話への切なる望郷の思ひのみが強く、現實的な眞の血のつながりが薄いかと思はれる。皇祖と民族と神話と國家と傳統とが少しも絶ち切れることなくひとすぢの清冽な流れの如く續いてゐるものは、われわれの場合にのみ言へることである。だから、われわれの生きてゐる、この日の照らす現實のただ中にこそ、ただひとつの曇らない光輝ある神話が尙も健やかに生きてゐるのだ、と確信を以ていひ切ることができるのだ。われわれは幸福の輝やきにいまかえして照らされてゐる。彼らゲルマンやアングロサクソンのそれとの對比のうちに於て考へるならば、何とそこに鮮明な違ひがみいだされることであらう。

彼らには祖國が眞にあつたか。彼らの文化的なふるさととは何處にあるのか。それは古代ギリシヤであつたのか。そしてそのギリシヤはもう既に既に遠く滅び去つてしまつた。何故にギリシヤは滅び去つたのであらう。ギリシヤ人たちはもともとゲルマン族やインドアリア族よりもその環境

が文化的形成のうへに甚だしく幸福ではあつたために、彼らの具有した文化的能力に依つて非常な迅速な成長をみたのであるけれども、悲しいことにギリシヤには傳統といふものがなかつた。ただ彼らの能力と精神とだけが物を言つて、文化的地盤や傳統の根のないところに貪婪にただ他の諸民族の絢爛な文化の花のみを摘み取つたからであつた。摘み取られた花はやがて忽ちに枯れはてることは怪しむに足りない。ギリシヤ神話はあまりにも世界的である。ギリシヤ彫刻の美しさはあまりにも普遍的である。併し、その神話はただ或る空間のうちに抽象され人間生活を律する觀念の原理として造られ、どこまでも現實的であつた。かうした平面的なものうへに空間化するといふ意識がなまた美的な具象化として示されると、どうしても個體の靜止的な追求となつて、造型的形態を持ち易い。美的な對象を不滅の客體性に於て捉へ示すために、風土的に恵まれてゐた眼に痛きまでに白い大理石を素材として彫刻藝術を創造したことは自然なことであつた。われわれの古代文化も亦、このギリシヤ文化に近いものを持つてゐたと考へるものもあるかも知れないが、そこには實はかなりの異同がある。われわれの文化は空間的な抽象の世界から始められたのではない。われわれには時間と具體があり既に傳統が存してゐた。だからわれらの神話は直接に民族の歴史とつながつてゐる。

それではさういふ時間と具體と傳統とが存し——つまり皇祖や民族や神話や歴史などのもろもろのものが互ひに深く結び合ひ、それらを強力にうつ、しく統一してゐるところの日本的なるもの——そこからのみづみづしい生命から花開いたところの日本の獨自な文化。それは一體、さし當つて何に結晶され具體性を示してゐるのか。それこそほかならぬわれわれの古典なのである。

5

今までわれわれが造りあげ花を開かせたところの既成のものだけが古典にはあるといふのであらうか。勿論、さうしたものが包藏されてをり、またそれゆゑに尊いといふことができる。だが併しさうした既成なるものが客觀としてそこにあるといふことではなく、實はさうしたものの裡に、主體的なわれわれの永遠なる、かくあきべき理想が表現されてゐるといふことを忘れることはできぬ。われわれがほんたうに根本的なるものとして考へるあらゆるものが、この古典のうちに、即ちそれ以外には無いのだといふことを深く考へ至らねばならぬ。徒に國體の美と無缺とを空言する前に更に深く古典を心讀すべきである。國の精神、國の理想、國の運命はすべてこれら古典のうちに息つき輝やいてゐる。日本の國體が優秀であるといふ。その民族の生命が純一無雜であるといふ。否、

全く比類なき國であるといふ。それならばやはり日本の古典も亦優秀な純一無雜な比類なきものでなければならぬ。われわれが血を流しても命をいけにえにしても護るべきものが、この民族の國土であるならばやはりどこまでも護り通さねばならぬのは、この古典である筈だ。それはどこかの國の博物館やギャラリーのうちに保存されておればいいといふやうな、そのやうな骨董品ではないのである。異國趣味的對象ではないのである。即ち、それはわれわれにとつて少くとも絶對的なものであり生命である。われらの過去、われらの現在、われらの將來が生きた結晶體として存するところのものである。

假にもつと平俗な日常的なわれわれの生命や生活のことを考へてみてもいい。われわれは古典のもたぬやうな世界や場所や故郷を何處に持つてゐるといふであらうか。トルストイやドストイェフスキーといふ。ゲーテといふ。なるほど彼らは偉大であるかも知れない。併し、われわれはヴォロンスキーとかラスコリニコフやエルテルの如き人間と血と血と分け合つて生きられるであらうか。それらの人間はなつかしい仲間であると思つてきたのは、われわれ近代的教養の白晝夢であつた筈である。ドストイェフスキーの矛盾を考へることより、むしろ兼好法師の矛盾を切實なものとして考へねばならぬと思ふ。エルテルの自決より透谷の自決の意味を深く受け取らねばならなくなつて

きたのは、論議を超えたわれわれの今日明日の切實な心情であるし、課題である。

われわれは今日、靴を穿いてゐる。靴を穿いて旅にも出る。が、われわれの父祖は草鞋を穿き、それを穿いて旅にも出た。草鞋を造らせた技術と、その技術を規定してゐる精神や生活の在り方を考へ、それと今日の靴との聯繫を求めねばならない。

これらは或はあまりに卑近な平談として嗤ひ去られるかも知れない。併し、それが卑近なことであればあるだけに、實はさうした細部にまでこのことは係はり合つてゐる。特に文藝的なもの意味に於ける古典であるなら、さうした卑近なるもの具體的なものが隅々にまで形象化されて息づいてゐる。

細部にはこのやうな事柄から、そしてもつと雄大な精神の構想を持つ根源的な力や理想が照り映えてゐるところに、あらゆる古典が聳え立つてゐる。併し、これらはともすればわれわれの現在の如き立場に於ては見失はれ易いといふことがある。それは軍艦や飛行機の如く、何人にも理解の届き易いものを持たないところからも來るであらう。古典の如きはさし當り不用であるといふ考へが今日のやうな光輝ある國歩艱難の秋にはともすれば生じることも首肯できないことはない。だがそれは、少くとも實に性急なそして大本を忘却した思考である。空氣や大氣が可視的でないから不用

であると結論するが如き暴論に近い。物質に對しての「ココニ無駄アリ」といふやうな節約主義をただちに精神の世界に持ち込むことは一大事である。九人の軍神を讃仰することは誰でも識つてゐる。だが、さうした讃仰に値する内的なるものを造りあげてゐるものは何であらうか。昨日今日の卑淺な思惟や努力では到底、求めえられぬさうしたものを生んだところのものは何か。そしてこの際、ただ、勇武の精神のみを考へることはできない。もつと豊饒なる含蓄ある深遠にして然も單一素樸なるものである。複雑多岐なるもろもろの精神が渾一となつてゐるところのものである。それは文藝的にいへば、「まこと」「物のあはれ」「幽玄」「侘び」「さび」「しをり」等々の一切が含まれてゐるものである。更に言葉を換へていへば「文」と「武」とが融合統一されたところのものである。激怒と悲傷と喜悅とが熱く宿されたところのものである。

悲傷や涙を見忘れた世界にのみ日本の精神美を感じようとするのは、未だ眞に日本の精神を味出しえぬものである。未だ眞に一般人間のなるものの深奥に觸れえぬ心である。

昂揚壯行のときのみを言つて傷心流涕のときを言はないのであらうか。ひとは萬葉集の「防人の歌」のさかんなるを言ふ。けれどもその人間的にして肉體的なる悲傷のころをあまり言はない。併し、その昂揚と悲傷とは別箇無縁のものではなく實に表裏一體のものである。昨日、悲しんだ眼

は、今日は死にゆくことの歡喜に輝やいてゐるのである。ひとを愛撫した掌は、今は銃劍を把つて立つのであつた。そのぎりぎりの生命の極限まで脈打つところの複雑豊饒にして美々しい人間的なるものなればこそ、わが民族の精神は尊いのである。われわれの精神が貧寒ではなく、むしろそれを觀るところが興奮に墮して貧寒に陥ることをわれわれは戒心しなければならぬ。

たとへば、俳諧に心を傾けるものをこの非常存亡の秋に當つてと冷眼視するであらうか。

自分の相識るひとりの青年が應召して某國境方面で戦闘に参加した。そのときいま數十分の後に猛烈な激戦の火蓋が切られることを承知しながら、雜囊の裡に秘めてゐた岩波文庫本の一茶の「おらが春」を月明の下に貪るやうに讀んだといふ。讀むものも無心であらう。讀まれる書物も無心であらう。だがそこに讀むものと讀まれるものとの間に生々と交流するところのものは何であらうか。これは有閑事であらうか。「おらが春」は一俳人の眞率なる心の記録であり抒情詩である。そしてまた、これはやはりわれわれの古典であるといつてさしつかへない。「おらが春」を戦闘に従事する者が所持してゐるといふことは、その者が俳文學に關心を持つてゐたといふこともいへるだらうし、またそこには偶然性があつたともいへるだらう。だが、結局、それはとにかく一古典であつてその古典を月明りの下でも貪り讀むといふ烈しさが心奥に湧き返つてゐたといふことは否定でき

ぬ事實である。「おらが春」の内容がすぐその直後に行はれる戦闘とそのまま結び附くといふのではないが、それを耽讀する主體は、次の瞬間に劍を揮ふ主體と同一の主體である。特殊潜航艇に生還を期さない乗組みをするその前夜に、漢字のくすし方を平常通り泰然と行つた軍神の場合とどこかに通ふものを持つてゐるかも知れない。とにかくかういふ場合の心情を心の慰め娛しみといふ風に消極的なものと見做すことは當らないであらう。

古典はただ古き時代の典籍であるから、何か床しい趣味に訴へ、また好事的な興味を満たさせ、生活の高雅な裝飾であつたり、博識のひとつであつたりするといふやうな、さういふ對處の仕方はもはや今日の如き場合に於ては問題になりえないのである。さうした傾向がたまたま從來あつたといふ點からのみ考へて、これを不念な不用の有閑事と斷定してしまふことは十分に反省されねばならない。そして反省の曉には、もつと重大な價値を古典のうちに見出し、古典をして眞に今日の根本的な生命の源泉と結びついてゐるものだといふ、正當な認識に立ち返らねばならぬ。

ひとは國家と國民の一切の總力を舉げて、今日の榮光ある時艱を乗り切らうとしてゐる。それは科學的な最高水準を動員して行はれてゐる。そのやうに、精神的な高度な力がそれと共に、否その本質的な土臺となつて動員されねばならぬ。全文化の總動員とはさういふ物的なるものも心的なる

ものも全く生ける一體としてはたらくことである。従つて絶対に勝たねばならぬこの今の場合、國家民族の大理想を、大精神を、あらゆる面にわたつて結晶させた、この古典を眞に心に抱きしめてこれを味讀し、われわれの凡てを懸けてゐるこの戦ひの、その力と意味とをここに求めねばならぬのである。これを措いて他に、さういふものを求める道は無いのだといふことを考へねばならぬのである。そしてまた、今のわれわれは、單に力を以て戦ひ抜くばかりでなく、甚だ抱擁力を有した正しい神意的精神を、無比なる文化の慈光に依つてここにアジアの黎明を期して、その生存圏、文化圏の擴大的再編成を創業しなければならぬ。アジアの永いまどろみを今こそ揺り覺まさねばならぬのである。嘗て「アジアは一體である」と強く主張したのは、岡倉天心であつたが、その精神實現のときが、いまわれらの民族の肉體と精神の周圍に、朝霧の罩めたこの天地の中に目前の事として來つたのである。その指導的原理を無限に藏してゐるところのものも、亦このわれわれの古典であつて、それを除いて他には原理も意慾も汲むものは無いのだといふことを識らねばならぬ。

いつもいつもわれらの歴史が偉大な飛躍をなし遂げたときには、古典をさし招き、古典と共に民族の精神は怒濤の如く湧湧したのであつた。

望郷の精神

1

生きて行くうへに於て、必然のことがあるために、ひとびとは何等かのかたちで、今、古典をふりかへりつつある。ほかならぬわれわれの古典をふりかへりつつある。それは、おそらく文献以前の場合も存するだらう。敢へて文献として謂ふところの古典をぢかに手に把らなくても、その精神は古典の精神をふりかへらうとしてゐるかの如くである。

もちろん、古典をただ眺めてゐるだけで、自己の生活や運命と切實に結び合はないひと、いくらでもあるだらうけれど、さうした消極的なものであつても、ふりかへらうともしなかつた心が、少くとも眺めることをはじめただけでも、昔にはみられぬことであると思ふ。

世界の轉換が凄しい物音をたてて旋回しはじめた頃から、西歐文化への戀情の精神では、もうどうにもその日が暮らせなくなつてきてゐることを、一部の文化批評家たちが注意を喚び起こしたこ

とは、おそらくまだひとびとの記憶にはつきりと残つてゐる筈である。さうした呼びこゑと共に、たとへ雑多な立場や意識であつたにせよ、ともかくにも、日本の文化や文藝の問題が矢繼早に日程にのぼつたものであつた。飽きつばいジャーナリズムや、その鼻息をうかがつて生きることを最も生甲斐のあることのやうに考へてゐるひとたちは、もうすつかり鼻についてきて、生欠伸でもつて、さうした問題に對しては、そろそろ、そつばを向きはじめてきたこともあつたやうだ。だが實はさうした現象が一部の飽きつばい層にみえはじめた頃から、かうした古典への注目が何らかのかたちで——凝念といふか反省といふか思慕といふか、——さうした地べたに足の着いたものが根を卸しはじめたのではあるまいか。

二、三年まへの文藝雑誌を開いてみれば、はつきり解る筈であるが、そここの座談會などで作家たちも言つてゐるのである。

——單に日本的なものや日本の古典を、ただぼんやりと眺めふりかへるといふのではなしに、さうした日本的な文藝精神から、どうあつても因縁を絶ちきれぬわれわれは、それを積極的に創造の精神のうちに生かしていくよりほかに手はない、といふやうな、その頃までにはみられなかつた、積極的なもの創造的なものを、次第に提唱しはじめてきてゐる姿がそちこちに目立つてきてゐるの

である。

ひとも言ひ、自分とてもたびたびいろいろな箇所ですつてきたと思ふが、世界的な近代文化の水準にいち早く達しなければならぬ、追ひ附かねばならぬといふ、あはたしいこの國の躍進は、今までの日本の地盤がどうであつたか、などといふことは、おかまひなしに、英米やドイツのそれをいち早くせき込んで移植して、早咲きのやうに一度にパッと咲かせたわれわれの近代の文化であつた。

さういふ時期や、その時期の延長のうへに、この國の近代人は教養を身につけて育つてきたのであつた。このことは、もう誰でも承知してゐることである。

ひと口に外國的教養といつても、われわれの父祖の時代には、ひとに依つて必ずしも西歐のそれでない、むしろ東洋の——特に支那古代文化の——それにはぐくまれてきたひともあり、そしてこの力といふのはなかなか等閑にはできぬのであるが、少くともわれわれ以後の世代の教養といへば西歐の匂ひがきつく立ち昇り漂つてゐるものであつた。

近頃は、それを身を以て全部的に否定し、傳統の精神一本槍で強く主張し言挙げするひとの考へでも、仔細にみれば、その辭句にも感覺にも、なかなか以て、西歐的なそれが匂ひを放つてゐるといふことも實際は感じられるのである。

即ち、われわれの心の成長を遂げた時期を、かりに文藝の思潮のうへで言へば、ゲーテやハイネやトルストイやドストイェフスキーやシェイクスピアの精神を糧として、人間の在り方や運命を考へ、世界を觀てきたひとたちであつた。

早い話が、われわれは年少の時代に、どんなに父母たちから、太平記や八犬傳や經國美談を読むことを慫慂されても、さうしたものでよりやはり、西歐の近代の構想のうちに、人間の問題を差し當つての問題として取りあげた如上の西歐の諸作品をひそかに思ひつづけてきたものであつた。太平記や八犬傳には、たつた今、自分たちが求めてゐる人間の課題が見當らないやうに思へてならなかつたからだ。机のうへには強制的に「三國志」が、置かれてあつても、机の下には名狀し難い魅力をも以て、ゲーテの聰明な大きな眼や、ドストイェフスキーの廣い額が輝いてゐて、少年の心臓にちかに觸れてゐたのであつた。犬塚信乃などより、むしろわれわれには、エルテルの方が今日の友であつた。尾崎紅葉の句に、

泣いて行くエルテルに逢ふ臃かな

といふのがあつたと思ふが、さうした實感を持つて、エルテルがほんとにそこいらに居さうな心

持がしたほど、われわれは自分たちの風土や精神には落ちついた心も見失つて、ただ遠い異郷の人間と心のうちの手を把り合つたりしてゐたわけであつた。

2

かうしたわれわれの心狀を先づ「夢」といふか「病」といふか——とにかくかうした言葉で言ひ現はさねばならぬものが、いつかその日の生々しい現實内部の力に依つて形造られてきた。ラスコルニコフやソーニヤの生き方や在り方が、どうしてもわれわれの精神の土壤のうへには伸びきれないものであることを——といふより場違ひであるといふことを、うすうす感じ出してきたわれわれである。渺くともさうした人間の生き方や在り方は、かうした土壤のうへでは、どんなふうな現實との對應に依つて、近代の人間としての形態と性格とを持つことができるだらうか、といふことを、夢や病といつたやうなものでなく、もつと霧消し覺めはてゆくところから、しんみりと考へなほすやうになつてきた。かうは言つてもまだ、自分だけは近代の人間だと考へ、結果として、近代的人間は自分だけでありさへすればそれでいいのだといふ、齒の浮くやうな文化主義者があちこちに無いことはないのだが、さうした痴呆なまどろみにあるものは、結局、本人の考へてゐるところとはさうはらな、進み行く正常な歴史の車輪から跳ね飛ばされてしまふといふ運命が待ちかまへてゐるだけである。それは近頃のアメリカあたりの國家的表看板と、その内實との間に、非常な矛盾撞着が生じ、暗影がアメリカの表情にどんなに漂つてゐるかをみることは、何よりの證據で、このことをさうした文化主義者はもういちど眼を開いて正視する必要があるだらう。

だが、いまは何もひとのことばかりを言ひ立ててばかりはゐられない。一體、われわれは、もはやさうした西歐文化主義をすつかり乗り越え清算しつくしたであらうか。西歐の近代の文人よりも、西行や兼好や芭蕉や秋成に、その據り所を確認し、ほんとに心からなる親近性や情熱を持ち變へてしまつたであらうか。

われわれが正直に言つて、そこまですつかり行き着いてゐるとはおそらく確信できないのではないか。何としてもつひ昨日まで、ともすれば手に把りあげたものは、バルザックであつたりジイドであつたりしたのではないか。古典への回歸が漸くさかんなものとなつてきた今日この頃、バルザックやジイドから離れようとしてゐるのではないか。パスカルを讀んだり、リルケを讀んだりすることは、決して西歐思慕であるとは言へない、別の意味が新たに出てきたのであると思ふが、とにかくすつかり西歐から解き放たれてしまつたとは言へないであらう。殊に、どちらかといへば、若

い女性たちの間には、まだ西歐への愛着は相當に根強く残つてゐて、一つのさういふ方面の讀者層を形成してゐるとも言はれてゐる。

併し一般の知識人たちが、たまたま西歐のものに自然と手が伸びても、どこかにしらじらした隙間風みたいなものが、すうすうと吹き込んでくるといつた感じである。昔のやうに實感を持つて、さうした作品の人物までがそこいらに居るなどは考へられなくなつてしまつた。さうした風土の違つた地盤のうへに生きて、われわれと違つた思想と感性の動きに浮き身をやつしてゐた人間たちのことを、ただ思ひ暮らしてゐたつて始まらない。今になつてわが國の風土がどうの、制度がどうのと、言つたところで、どこにわれわれの身の置き場所があるか。いやでも應でもわれわれは、さうした環境と傳統の中でしか生きられないではないか。——と、ただ諦めや絶望感でなしに考へてきてゐる。

さう考へてくれば、われわれの父祖や、その時代の人たちの生き方は何か涙さへ誘ふものがある。それを身を以て感じよう。われわれの肉親への言ひ難いところもちが、直ちにわれわれの生活感情となつてくる。

エルテルの身に附けてゐたといふ黄色いチョッキより、どれだけ西行の富士見笠や、芭蕉の着た

角通しの方が、私たちに身近かなものか分つたものではない。

このことは單に妙な趣味的なダンディズムから、中世や江戸時代の人間の習俗を思慕するといった仇めいたものでなしに、もつと切實な深い感情として、われわれの實感にこたへてくるものである。

そのことをもつと本気で考へよう。それをもつとずつと古く遡つたところからじつくり考へてみよう。さうしなければ、よさもわるさも、われわれの生活や文化を推し進めるにしても、どうにもなるものではない。——さういつたものが抑へ難い力となつて、各自の胸奥に今日この頃、強くこみあげてきてゐるのではないか。

(だがかうしたことを既に學的な態度で、コッコツと考へ調べてゐる先達がある。たとへば柳田國男さんの如き人はさういふ方面の第一人者である。何で世間はああいふ人から、このやうな生活改新の必須なときに教へを乞はうとしないのであらう。)

けれども一方において、かういつた切實な差し當つたところもちではなく、ただわれわれの過去に開花し、そして次ぎ次ぎと受け繼いできたものは盡く是認し、高い評價を與へ、何もかも惚れ込

んでしまふむきがないでもない。われわれだつて、自分らの背負つてゐる傳統の文化や文藝について烈しい宣揚の精神から聲高く謳つて止まないときがある。われわれの榮譽を言ふとき、何でみすばらしい照れくささでくちごもる必要があるか。けれども或る時、われわれは自省のところに身を責めることがある。所詮は、愛情ゆゑである。誇りに言へると思ふことと、省みねばならないこととは、とかく裏おもてになつてゐることがある。また、高揚した精神は、創造の精神と繋がつてゐる。併し、否定自省の精神はそのまま終らず、そこに熱い愛情が籠められてゐるとき、さうしたものは實に推進創造の精神となる。井の中の蛙とは、成長飛躍のための否定自省の精神を喪失し果てた蛙のことである。

3

ところが、近頃の若い世代の中でも、案外、古典愛護といふやうな、然もそれはひとつの流行として取りあげる傾向があるとのことであるが、それがもしも無自覺な單純な安易なファッションであるなら、あまり頼りになるものとは思はれない。かかる精神や態度は、西洋崇拜の季節であるなら、結局は、日本語を英語と取りかへることぐらゐりかねないものなのである。まことにあぶなかし

いものなのである。

自覺された、傳統をまつたうに積極的に見出すところの精神ならば、それが高揚的なものを持つてゐても、やがては次の新しいものを創るモメントであるからみだりに擯斥することはできない。

由來、傳統とひとくちに言つても、非常に廣い意味と狭い意味とがある。廣い意味で言ふときは、何といふか、ひとつの民族の習俗といつたものまで含まれてゐるので、その場合は、もう生きた感覺など持つてゐず、徒らにその形骸だけを誇示して終始してゐるやうな要素さへある。けれども狭いきつい意味でいふときは、ほんとに自覺された積極的な意欲がすぐうしろに控へてゐて加はつてゐるのだ。だから、これをこそ傳統といふのだ、といふ強力なものが撥ねてゐなければならぬ。つまり傳統はおとなしく受取るものでなくして、見出すものだといつても差支へないと思ふ。併し、實際には、さういふ因襲ともいふべき習俗的なものと、習俗的なものを離れて積極的につかみ取らねばならぬものとが混融してゐることの方が多い。

文藝のおほかたの思潮に動かされて、といへば極く普通の話になつてしまふが、近年、歴史小説が文壇で有力な座席を占めてきてゐることは、或る切實な傳統への發見の意欲があつてのことと考へることができるだらう。だが、たとへ發見の意欲から出てゐるといつても、いつかそこに習俗の

力が因縁ごととなつて絡んでゐることを否むことはできない。

近年以來、歴史小説家と目されてゐる高木卓氏の「小野小町」の一篇をとつて考へてみる。

ここでも氏の安易な望郷のそこはかとなきものが、ただ王朝の數奇な運命の波に沈んだひとりの才媛にはたらいとは考へられぬ。この國のわれわれの謂ふところの傳統が、勢ひ込んで形成された重大な中世といふ時期。その時期の具體的な精神でなく、むしろそれ以前のかうした王朝といふ時代のひとつの女性の生き方や、文藝的な現はれ方にも、素通りできないといふものが、どこかに働かないで、「小野小町」などといふものは、今あたらしい脚光を浴びて現はれはしないであらう。小町を形成するミリウを包括する歴史性の力と、逆に小町からの精神の燃えの廣がり、ミリウや歴史性へ返照するものへの何らかの關心なしに、かうした作品がかやうな姿態で生み出されるといふことは考へられない。作者の主體性となつてゐるものが、小町を引き寄せすにはゐられなかつた或る物が在つたことを、當然考へていいのである。作者は従つて、小町といふ人間にこと新らしく呼びかける形式に於て、くりひろげられた作品の世界をみせた。そこにはむしろ西歐的なかをりさへひとびとは感じ取つたかも知れない。にも拘らず、かうした古代の文藝の形式や理念に、作者は知らず知らず手を執られてゐた。小町の作つたといはれる幾つかの短歌を手がかりとして、くりひ

ろげたのであつたが、短歌を基準として支柱として、その周邊に何ごとかの文藝の「事」「情感」を展開させ棚引かせるといふ方法は、ほかならぬこの國の、思へば永い文藝の傳統であつた。

さうした形式のみでなく、實にその精神の内面をもつかんで離さぬリリズムは、やはり短歌の精神が文藝の本質へ浸透してゐるものであつた。高木氏のさうした、知らず知らずうしろ髪を引かれたところは、形式を離れての、むしろ理念において、かの一九の「膝栗毛」以上に、傳統になじんでゐることになる。「膝栗毛」の形式は、むしろ歪んだ泣き笑ひの表情で傳統の生氣や油氣の抜けた形骸にせめてしがみついたといふ感じがする。

われわれは、この高木氏を制約せざるをえなかつたものの根元的なものを、否應なしに考へなければならぬ當面の事態にブチ當つてゐる。つひにその日が、よろこばしいその日が來てしまつたのであつた。

考へなければならぬといふことのみではない。考へに際しての方法の問題も當然、さし迫つてきてゐるわけだ。ここにも亦、永い西方を夢みる名残を拭ひ去つて、獨り立ちにならねばならぬ日がきてゐるのであつた。

テトヌやヴァレリーやアランやチポードの方法の手に入つた方法の古色をのみ説いてはならぬ

い。ハインツ、キンデルマンが文藝批評や文學史の方法論の機軸に「民族」を掲げたことの是非を考へる前に、先づ以てその粗硬さにわれわれは満足できない。ナチの文藝研究は何といつてもまだ草創のときである。

われわれは今、その完成の日を拱手して待ちあぐねてゐるやうな愚を學ぼうとはしないであらう。實にそのやうなことは、異郷の學藝の香を慕ふ破り棄てねばならぬ未練である。事實、かういふ未練を破り棄てた後の意慾の現はれが、既に行動となつてそここに見えはじめたことは、われわれの杞憂を吹き消して、世紀の黎明のかぎりひの中にいよいよ決意を新たにさせることであると思ふ。

古典とわれら

1

アンデルセンの童話に「幸運のオーヴァシューズ」といふ、かなり有名な作品がある。話はコペンハーゲンの夜の、とある邸宅の饗宴をきっかけとして始められてゐる。そこに列つた一人の辯護士がゐた。これはその他の人たちと談話のトピックとして、中世期を追慕する心情をしきりに傾けたいらしい。宴はててその邸宅を立ち去るとき、玄關にあつた仙女が置いて行つた「幸運のオーヴァシューズ」をつひ穿いてしまつた。

だから辯護士の生きてゐたコペンハーゲンはただちに中世期の幽暗な（それはほかならぬ辯護士が追慕して止まない過去の時代であつた）時代と一變してしまつた。辯護士は喜んだことであらうか。

ところが、先づ街が急に暗いのに彼は驚いてしまつた。路が泥濘でひどいのに閉口してしまつた。

ひとに逢つても話がちぐはぐなのに狐につままれた思ひがしたのであつた。何といふ迅速さか、彼の主観や心持はそのときいきなり幸運どころか不幸と混迷のうちに置かれてしまつたのだ。

かういふアンデルセンの作品は、たまたまわれわれに面白い暗示を與えてくれる。ただ單純な――併しそれは相應にパッショネットな、古代や中世思慕の精神などといふものは、およそ根底の弱いものだといふことである。この童話の中に出てくる辯護士のそれは、ただ過去への極めてあさはかな審美的な誘惑にうち負けてゐたのである。

さういつた過去の或る時代の文化財に對して、たまたま愛好のころをひたむきに寄せてゐたからとて、その時代へ逆行的にわれわれが飛び込んだならば、閉口してしまふのは、當り前のはなしである。言つてみればひとつの精神のマニアである。それはたとへば「孤獨」などといふ觀念に對しても働くことであると思ふ。「孤獨」を求めるとは、倫理的なものが強烈であるときが多いことは周知の如くである。だから、それは生死を賭けてこの俗世間の實生活とも訣別してまで、追求しようとする意慾の純粹さ苛烈さを示すことがあるのだ。だが、一方に於て「孤獨」といつたものには、甘い少女の夢見ごころのやうな審美的な誘惑に足をとられるといふことがある。

詩人のそれにも美的なものが加はつてゐるが、それは一義的な問題として、自己の存在のうへに

立ちはだかつてくるとき、そこには多分に倫理的な要素を持つてくる筈である。だから特に、かうした場合の審美的なものに於ては、かなりそこにさまざまな段階があることを考へていいのである。

一個の精神的主體が、或る過去の文化財のうつくしさに心を拯はれて、その文化財を創造した魂や、その魂をはぐくんだ時代に熱烈な全幅的な心情を傾けつくしたからとてそれは案外に淺膚なものでしかない場合がある。

われわれの古典に關した事象についていへば、更級日記の作者が、源氏物語に對して示した心情は（この心情については勿論、いろいろな角度から考へられることが可能であるが）いつも讀むものに、たとへ善意を以てしてもどこかで危険性が豫告する警鐘のやうなものがひびいてゐるやうに思ふのは、このひとりの作者の心持の姿勢に現はれてくる、教養の段階がともすれば感じられてならないからではないのか。

2

まだ青年の頃、近代のヒューマニズムや藝術至上主義に自己の生甲斐を見出して、それをおのれの心の支へとしてゐるとき、或る閑雅な茶室で俗臭のきつい宗匠とその家の主人とが古陶器を玩ん

でゐる風景に、ちつとしてゐられぬほど反逆心を燃やしたことがあつた。

客觀的にそこに在るところのものに、ただ無感動に支配され拜跪してゐる態度はただそれだけでつひに終熄してしまつて、何物も創造しえぬ形骸である。特に古典が、このやうな在り方と性格としか持つてをらぬと観ずるとするならば、それは寂寞とした亡靈の羽搏く世界——しかも貧しい隙間風のやうなものがすうすうと吹き抜けてゐる精神の空虚な前庭の夕闇である。

私はさうしたあはれな貧しい風景畫を假にどうしたことか、ふと心の底に描いて慄然としたことであつた。

それはもう數年前のこと、上野で朝日新聞社が主催した「日本文化史展」の陳列棚の前を歩いてゐた晝日中のことであつた。そこには「榮花物語」の一帖や、九條家の「定家の申文」や、覺一本の「平家物語」が並んでゐたか「粉河寺縁起一卷」か、とにかくさうした絢爛な遠い時代の文化の遺産が確かにそこに置かれてあつたところを一應の烈しい純粹な悦びに浸り乍ら歩を移してゐた。その間のほんの短い時間の私の心の中の出来事だつた。

かうした文化的遺産に魂を喪失してしまつた哀れな奴隸になつてはならない。これらの生んだ時代の中から、たまたま高貴な精神の昇華した具象物があつたからとて、この時代へ誰が時代的逆行

の過路を妄にしようとするか。

更に付け足すなら、この文章の始めにかいたアンデルセンのメルヘンに出てくる辯護士のやうな精神のマニアには陥りたくはないといふことである。

「幽玄」や「有心」の美的理念を高く評價しても、それこそコペンハーゲンの夜以上に路は暗くて悪いし、盜賊はおろか鬼畜の類さへ横行するメインストリートだといふ日本の中世期である。自分などはどんなに頼まれてもそんな時代へ再び歸ることは御免である。

どんなにヨーロッパの國際關係が猫の眼のやうに絶えず變つても、化物屋敷のやうに怪奇でも、ビール一杯飲むのに行列を作らなくてはならなくても、やはり、この千九百四十三年の烈しい現實の只中にやはり生き抜きたいと考へるのである。

これはわれわれに不可避的に課せられた時代の運命である。われわれはかうした時代に、かうした歴史的、現實的人間として、われわれの積極的な主體と生き生きと關聯する古典と對應しなければならぬ。むしろ、今日あつての、現代あつての古典である。古典あつての今日や現代ではない。

わが近世のルネッサンスに藤原惺窩や山崎闇齋や山鹿素行がただ外國の古典を讀んでゐたから、

高く文化人として買ふべきではない。神風の伊勢の國の西日の射す二階の書齋で、梯子まではづして「古事記」の研究に没頭してゐたがゆゑに宣長は偉大ではない。彼らが、その時代の生きた現實人として、古典と取り組んだその精神のビチビチした新しさが、古典を觀る角度を規定し、古典の内部から最も今日的な問題を強引にたぐり寄せてしまつた、その創造性が高く買はれてゐるのである。彼が鈴の形態や幽かなそのひびきに心のなぐさめを見出し新古今風の歌作にその疲れや愁ひを拂つたといふやうな點だけを取りあげるのは、人間宣長の一面ではあつても、それは「初山ぶみ」などに現はされた彼の政治性とむしろ關聯してゐるものであつて、文化人として高く評價される彼の意識とはやや對蹠的になつてゐるものである。

人間の發展とかいふことを主題として考へるなら、中世精神を先づ以て廢棄するところを出發點としたわれわれの近世の夜明けの文化もさうであつたが、特に今日自國の古典と交渉し合ふ性格は著しく倫理性を帯びてきてゐるのは世界的な現象のやうである。政治的段階や民族的性格に依つて事情を違へるところがあつても、ドイツもフランスもソヴィエットもさうのやうである。殊にドイ

ツは民族性を最も強く前面に押し出してきてゐるので、現在の文相ローゼンベルグの「二十世紀の神話」にみられる精神を始めとし、それぞれの文藝學者たちは文藝評價の基準の修正や文學史の書きかへを主張して大童になつてゐる有様は、われわれの場合の、或る現象と軌を一にしてゐるといふべきである。ドイツあたりで自國の古典のみでなく、他國のそれにまで觸手を伸ばしていくのは結局は、自國の喫緊な文化情勢の必要から主觀的に起つたことである。「西洋の没落」が唱へられてもう既に久しいが、先年日本に來てゐたオズカー・ベルンといふ日本文學研究家の如きも、さういふ考へを洩らし述べたことであつた。單に平和裡に自由主義文化がその緩徐調を奏でてゐた頃の、過剰な教養の頹廢と彷彿と、かうした今日の事態とを同日に論斷し去ることはできない。

古典は自國のものでも、或はまた他國のものでも、常に新しく、汲んで盡きるときのない創造的價値に溢れた豊饒なものを持つてゐる。それはただ漫然と人間の精神から精神へ授受されたものではない。われわれが、古代の作品の諸本のうちでも、原則として「流布本」に古典の生體を見出すことは、それが永い時代を新しく生き通して、それぞれの時代の人間の心の呼吸がはつきりと懸つてゐるからである。いつも作品の原初形態へ廻行することばかりだが、學究の一義的な仕事だといふ風にのみ考へるのは、ただ透明な學の合理性に捉はれて、文化の流れの複雑さや肉體性を忘却し、

切り棄ててしまつた思考であらう。

とにかくに、古典なるものは、それに掴みかかり挑む主体が、謙虚で正直で純粹でフレキシビリティを持つてゐるればゐるほど、無限の豊穡さと光澤とをみせてくれるものだ。パスカルやモンテスキューの書いたものは、人間が今まですつかり噛み砕いて消化しきつた滓ではなく、まだまだ永く盡きることのない滋味を奥深くひそませてゐるであらう。

東洋的方法に於ての一應の地盤ができ、そこへ移入された西歐近代文化の思潮は、餘程性急で強烈であつたのか、近代のわれわれの教養人たちはとかく自らの古典にソッポを向けて、むしろ海に向ふからくる初汐のやうな文化の波にのみ眼や心を熱くかきかしてしまつた。われわれはもはや既に、そこにひびいた勝利の雄叫びや、或は犠牲の悲劇のかすかすを、見聞きしてきた筈である。

さうしたことが、いつの日までつづくのか。それはつづけようにも、もうつづけられぬぎりぎりのところまで来てしまつたではないか。

中世の「一言芳談抄」といふ本を、ひと夏のこと、私はとある海邊の家でしばしば手に把つたけれども、そこに示されてゐる「死」の問題に對する、われわれの中世人の對應の仕方の純粹さと眞剣でしかも事も無げな精神的風景は、現代のわれわれにとつてはむしろエトランゼである。モンテ

スキューなどのそれとはまた違つた風采である。かうした課題も、夏の午睡の後の閑談として氣儘に語り去られてしまつていいものではない。

東山文學の古典繼承

1

東山時代の文化を考へるとき、われわれはすぐその指導的地位にあつた人間として、義政や義尙のことを思ふ。そして彼らが政治家としてわれわれに印象づけてゐるものは、時代や國民の生活などに無關心で冷酷であつて、自分のことばかり考へてゐる甚だしく利己的な悪政治家としての映像である。このやうな映像がわれわれの前に示されることは、決して誤まりでなく、おそらくは彼らの姿のひとつの眞實を寫してゐると思ふ。彼らは、このやうな悪政治家ではあつたが、それだけで彼らを抹殺し盡すことはできない他のたいせつな一面がある。

それは文化人としての彼らの大切な一面である。非常にみごとな、そして歴史的に深い意味を持つてゐる東山文化を創造するうへの藝術家であつたといふ一面である。政治家としては策もなく、文化創造者としては策と業績を示したといふことを、彼らに於いてみられる。政治と文化とは、い

つものやうに乖離しなければならないのか。政治とは甚だ現實的な行動的なことである。わけてそこには實踐的な倫理的なものが附帶されてこなければ良き政治とはなりえないであらう。

併し、義政や義尙に於ては、さうした附帶すべきものが附帶しないのである。政治と文化とはおよそ、その本質に於て、はたらくはたらき方や方向がおのづから異なつてゐるとはいひ條、いつも乖離しなければならないといふ必然性があるとは限らない。よき政治とよき文化との一致が存すること、また存しなければならぬといふことはいへるであらう。ただ、文化なるものの本來的な本質のうへから少しく、その在り方やはたらき方が異なつてゐるところはある。假に、政治の支配力が文化のうへに加へられても、單に強權を以てこれを拘束したり指導したりしたとて、優秀な文化の開花はみられること難いであらう。文化創造の精神に何ほどの自由を許し與へなくては、文化は一應、形を整へたとしても内實の貧困をみせるか、立ち枯れとなつてしまつて、眞に充實した稔りを齎すことはない。

かやうな意味あひで、政治と文化との關係の一面が在るといふことを考へねばならない。従つて政治と文化とが協力し一致しむつび合ふといふことは最善な人間の幸福の満ちたときであるが、その二つが、たまたま背を向け合つたときは、どのやうに一方が、乃至は兩方が單に切り離された意

味で、みごとであつたにしろ、不幸な場合だといふことができる。

そして義政や義尚の東山文化の場合を考へてみると、彼らの政治と文化とは二つが疎隔し背反した形で現はれてゐる。どんなに東山文化が、うつくしく花開いたものであつても、特に人間義尚があしき政治家でありよき文化人であつたといふことは、人間世界のこととしてわれわれは不幸な場合だと言はねばならないであらう。

應仁の大亂の如き、民衆に塗炭の苦痛を與へた戰亂を惹き起したうへに、義政の如きはひとつの責任あるものであるが、その大亂勃發の初めに於ては、むしろ不關焉の態度を執つてゐた。彼が細川勝元の東軍支持の姿勢を執るやうになつたのは、將軍と雖、かうした二つの陣營に分たれた天下の動亂に於て、到底、超然としてゐられないせつば詰つた事情からであつて、むしろ正直のところは、かかる戰亂に自己の責任があつたとはいへ、實に有難迷惑のことであつたに違ひない。彼の關心は、そのやうなことより、東山山莊造營の仕事の方が深かつたくらるであらう。いちど大亂のために斷念してゐたのに、亂が終局を告げると共に、その造營の願望が湧き始め、文明十四年の春から造營事始を行つてゐる。亂のために疲憊してゐた諸國の民衆たちは、またこのためにどんなに痛めつけられたか知れない。諸國に段錢を課してゐるし、室町幕府の勢力がいちばん加へられてゐた

山城國は、特に直接の造營に經濟的に勞力的に痛めつけられたことであつた。東求堂や西指庵や觀音殿（銀閣）の如きものは大體、できても未完成のうちには彼みづからはこの地上から去つてしまつた。併し、彼はその佗びしい晩年をとにかくここに過し、謂ふところの東山時代文化をつくりあげたといふことができる。

ただ彼は稅政を行つたけれども、皇室尊崇の念はかなり篤かつたといふべきである。後花園上皇や後土御門天皇にお仕へしたことは普く知られてゐることである。特に大亂といふ未曾有の事件は皇室と幕府との親近を添へるうへに非常な契機となつてゐる。即ち上皇、天皇は幕府の室町第に行幸あらせられて永くかりそめの御所とされたほどであつた。このやうな大亂は、さうした尊貴な方々の御心をどんなに惱まし奉つたことであらう。それを御慰めしようとして義政はいろいろと心を勞したやうである。後土御門天皇が崩御あらせられたのも實に、この室町第に於てであつた。

義尚とてもさうである。父、義政の稅政の後であるし、また大亂の後であるし、彼の聰明さを以て幕府の地に墜ちた威信を取り戻さうとして、「天下無双の才人」といはれた一條兼良に「治要權談」をかいて貰つて、政策上の意見をきいても、それは殆んど實際には効果を擧げえなかつた。そしてやはり絶望と自棄とに落ち込んで行つたらしい。彼は母、富子が何かと政治に喙を容れるの

もやりきれなかつたらしい。彼がたとへどのやうに、政治的手腕に長け、聰明でなうとも、もう足利幕府といふものの末期のかうした歴史的地位に置かれてゐる場合は、どうにもならなかつたのではなからうか。

併し、彼義尚とても、また東山文化のうへに力を盡したのであつた。觀世座の猿樂彦次郎を溺愛したが、何といつてもそれはパトロンとして、斯道のためにはなつたのである。また、陣中にあつても讀書に耽つたり、宗祇から古典の講義を聽いてゐた。そして延徳元年二十五歳の青年將軍として陣中に薨じたのである。

(自分はいま洛中洛外の秋を慕つて、京の三條の宿にきてゐるが、昨日、大阪高校の宮田和一郎教授の御案内で、等持院、龍安寺に詣でたが、秋深い夕闇の忍ぶ等持院本堂に安置された義尚の像をかすかに窺ひみて、人間義尚といふものをいろいろ考へ思んで、一種の感傷に耽つたことであつた。東求堂にある義政の像を拜したときより、もつと切實な思ひであつた。こんなところに来て、この草稿を執筆してゐるのもふしぎな因縁である。)

われわれは、東山時代文化の獨自な性格といふものを考へることができると、それは非常な復古主義的なものと、同時に近世主義的なものとがそこにもつれてゐることであると思ふ。そしてこの前者はおそらく、公家なるものが自己の永き傳統をもつそのふるさとへの懐郷のこころにあるのであつて、自己のその日の生活が終焉的な色合ひにあるとき、さうしたノスタルジアとして慕はれてきたと考へる事もできるであらう。彼ら貴族にとつては、ノスタルジアであつても、他の者にはむしろ、ノスタルジアとはならない。ひとりのノスタルジアは、他のものにはひとつの新しきもの、好奇なるもの、おのれに無きもの、異國的なるものとしての新鮮な價值を持つて輝く事であらう。われわれがこの時代に貴族ならぬ他の者といふのは、もちろん武家のことであつて、武家はこれより遙かに遠く鎌倉期の當初から支配權を持つてはゐるが、深く文化面に於て自己を打ち建てるためにはいろいろな事情から、武家本來の獨自なものを眞に創造しえないやうな状態にあつたといふことが存するのであつた。それがこの東山時代といふ時がくると、そこでかなり武家的性格の濃いものを現はしえたと思へるのである。同時にさうした公家傳統のものとは別に、異邦からの禪宗文化宋學文化の輸入攝取といふこともあつて、これが横から武家文化を肥やしてゐるといふこともある。そしてこの場合、われわれは武家といつても、その武家自體の性格や、また武家なるもの

の蔭には、もつと階層的に低位にあつた一般市民といふものが立派に控へてゐたといふことも考へねばならない。

それで他の言葉でいへば、傳統的公家文化を武家を主體として新たに再建し創造し、そればかりでなく異邦文化をも攝り入れたところに、東山文化の特質は存したが、それは特質であり獨自性であつたと共に、中世から近世への文化の橋であつたとも考へられる。中世的堂上の文化が武家といふ桿杆に依つて、それが一般化されてきたといふことは、假にわれわれが、自分たちの教養の在り方、形成されたるもの、その他、衣食住の如き今日のわれわれの生活のうへに具體化されたものを考へれば、最も手取り早く理解されることができらるであらう。

そこでいま、東山文化のうち、特に古典に對する態度といふ點を考へてみると、元來、古典尊重の心は東山時代に始まつたことでなく、既に鎌倉時代に夙く、定家などの頃からさういふ考へ方はかなり強いものがあつた。そして、それはすべて和歌が中心であり、古典を尊重するといふ心的根據も、所詮は、和歌をいかにしてより高きものへ引揚げて行くか、いかに和歌を傳統詩歌として完全につくしきものとするか、といふ意識からなされたとみるべきである。だが、それがこの東山時代に至つて、もつと力強く明らかさを以て目立つてきてゐるのは、公家が一層、傳統文化を追慕

するといふ心情から生じたためであらう。そしてその追慕が、そのノスタルジアが別の新しい意味を客觀的に持つてゐるのである。

それでこの時代の古典復興が、具體的にどういふ作品に實際の仕事として働いたかといへば、萬葉集・古今集・伊勢物語・源氏物語などである。これのみでなく、他に日本書紀の如く、文藝以外の方面から非常に重視され研究されたものもあるが、純文藝ともいふべきもので、然もいちばん旺んに考へられ取扱はれたものは、上にあげた四つの古典作品は最もその主なるものといへるであらう。

萬葉研究の中世に於ける大きな業績は何といつても仙覺と、それを更に敷衍した吉野朝の由阿のなしたところがいちばん光つてゐるが、併し、これをほんとに京都の東山文化の中核にまで引き入れて行つたものは、將軍義尙、そして一條兼良・猪苗代兼載・宗祇などの功績と考へなければならぬ。

だがこの萬葉集の研究などもどんなに普及したとはいへ、それは到底、中世以來の歌の聖典として君臨してきた古今集などに較べれば、まだかすかなものであつた。時の政治家であり文化の指導者でもあつた三條西實隆や、例の後花園天皇の御親任をえた歌人で歌學者の飛鳥井雅親や一條兼良

の如きひとびとは、定家のした仕事の線のうへで朱點を加へたり校合したり、また實際の講義をしたりしてゐて、實に活潑なものであつた。殊に兼良の「古今集童蒙抄」や、いまは散佚してしまつた「古今集愚見抄」などの著作といふアルバイトは、定家のうへに有るべき正しさを求めながら、同時に自己の見解の新しさを加へてなしてゐる點など、非常に、古典を彼兼良の在つた現在に引きつけてゐることゝ於て注目しなければならぬことと思ふ。

この兼良の仕事は、また伊勢物語のうへにも獨自のものをみせてゐる。彼は應仁の大亂の中にあつても、奈良にその難を避け乍らも學者として逞しく仕事をしつづけた。「伊勢物語愚見抄」の大成は全くそのときに行はれたものであつた。そればかりでなく、定家以來、伊勢物語にしても源氏物語にしても、それが單に獨立した物語文學として扱はれないで、ただ和歌のために手段として榮養素として見られたものがあつたが、さういふ根本的な思考が定家以來の註釋のうちに根強く信條として存したのであつたが、その習俗を破つてそれが本來あるべき純粹の文學作品として考へるべきであるといふ見解をみせたのは、全く兼良の創見だとすべきである。また、伊勢物語の研究は、宗祇と實際とに依つて強く光つてゐる。宗祇が實際を始めとして、多くのひとびとに伊勢を講じ、その述作はたとへ舊來の和歌重點主義の弊を背負つてゐるとはいへ、併し兼良以上に新しい見解をみ

せて一步を進めてゐる點など買はねばならないところである。近世に入つての伊勢の研究が益々十全なものへと進んだのは、この東山時代に於けるひとびとの仕事なくしては、不可能であつたと思ふ。

源氏物語の研究はやはり今迄ふれた古典のうちでも特に王座の如く、中世文學傳統のうへで最も大きな座席を占めてゐたが、それもやはり和歌重點主義であつた。併し、それが東山時代にはあまり廣くは讀まれず、むしろ讀みたくても讀み解くことができなくなつてゐたとみえて、さうした一般の傾向を歎いた言葉は兼良に依つても吐かれた。

足利時代には源氏の考證的な註釋書として著名な「河海抄」が四辻善成に依つてかかれたが、それより後、正徹の「源氏物語抄」と、特にエポックをなす兼良の「花鳥餘情」が東山時代にかかれてゐる。これとても兼良が奈良に在つた全く晩年の頃の仕事である。この兼良の仕事の新しきは、「河海抄」のやうに考證的で煩瑣な個々のことに捉はれたものでなく、作品としての文章のうちにあるものを掴まうとしてゐる點である。それでこれは、この後、宗祇でも宵柏でも紹巴でも幽齋でも通勝でも、みなこのうへに立つて源氏を見、源氏を研究してゐるので、兼良以後の源氏研究には、いちどはここに還つてここから出なければならぬものとなつてゐる點、そしてかうした兼良の仕事

に依つて、専門家を出て源氏の作品が一般化への道を出て行き、近世文化の上に廣く源氏が日の目をみたのであつた。

殊に、ここでいちど考へねばならぬことは、この頃どんなに連歌といふ中世独自の、否、日本独自の文學ジャンルが前後に未曾有に行はれたかといふことである。そして今迄述べた古典研究の仕事を実際にしたひとびとは、連歌師であつたり、或は少くとも連歌に熱意を示したひとびとであつた。連歌といふものの文藝のうへの地位がどんなに高いものになつてきたかは、勅選二十一代集が「新續古今」を以て全くその平安朝以來のしきたりを絶つてしまつたあとに、吉野朝の良基の連歌の「筑波集」や宗祇の「新撰筑波集」が共に勅撰に準ぜられたり、二條・京極・冷泉の三家の歌家の抗争の後で、二條家がひとり正統派として存続し、そこに所謂「古今傳授」といふやかましいことが行はれてきたが、それが嘗ては低いものとされた連歌師に東常縁あたりから宗祇、宵柏などに傳授されたといふ事實を考へても、連歌文學と連歌師の東山時代の在り方をはつきり見て取れるであらう。

さういふ公家傳統の文藝文化が、かうした宗祇たちのやうな連歌師の手に移り、(連歌師といつても既にこの頃は立派な學者であつたことは私の今迄の叙べたところでも明らかであらう)それが地域的にも精神的にも普遍的になつたといふことは、いろいろな事情がそこに考へられることはむろんであるが、とにかくこの時代の文化の特質と考へてよいことである。

殊に、宗祇などはひとしく人の知る通り、諸國を旅して歩いた旅の詩人であつた。自然の風物は彼を強く魅したであらうし、その自然から彼は詩囊を肥やしたであらうが、たださういふ詩情だけの問題でなしに、政治的にも經濟的にも文化的にも諸國の武家との關係が、宗祇との間に在つたことも確かである。

とにかく宗祇の遠く廣く印せられた足跡は、中央の文藝文化を、そして日本の正統的な文藝文化を邊土にまで、庶民の間にまで行きわたらせた力といふものを考へさせ、それはわれわれの想像以上に大きいものがあつたに違ひない。宗祇の生きた時代は何といつても近世のその前夜であつたのだ。

この東山時代の文藝文化に關しては、まだ考へるべきこと、また私の言ひたいことはあまりに多すぎる。私は全く骨組に關するやうなことを思ひつくまゝに記してきた。そして東山文化のそれ自

體の特質や、その發展的なものとしての性格といふことにも寸言した。そのことを考へることに依つて、この時代の文化の歴史性はつきりして来るであらうし、その價値が浮き出て来るであらうし、今日の文化との深い關聯が生まれるであらうと思ふ。特に王朝以前の古典との對し方に於て、われわれには無限の意味が潜んでゐることを考へさせられるのであるが、尙終りに、附け足しておきたいことはこの東山時代には古事記よりもむしろ日本書紀の研究が活潑であつたこと、そして神道の方で唯一神道が新たに主張されたり、有職故實がやかましく振りかへられたことも、この時代の文化の新しい動向として考へるべきことである。そして義政の如き秕政家であつても、皇室を尊崇するといふ念を厚く抱いてゐたもので、武家なるものが、もはやその餘命を従來のままでは保ちえなくなりつつあつたのに、主觀的には皇室尊崇のころを保ち、傳統文化へ傾倒してゐたといふことは、非常に注意されていいことと思はれる。武家はややその本來の性格を變貌させ乍ら、これから後も存續するが、併し、皇室を尊び奉り、古典を再び認識して新たに自己のものとして、更にそれをひろく市民へ傳へて行くのであつた。

近代と古典

—透谷をめぐりて—

1

時代も若かつた。たとへ年寄りじみた形相が、ともすれば見えることがあつても、やはり若い影がその時代の表情に、立居にみられたことは、何としても覆へないことであつた。

特に北村透谷は若かつた。二十七年の若い生涯を、あの芝公園のほとりの住居でみづから斷つた透谷のころといふものは若かつた。生理のうへで、さうしたふるまひをなさしめたものが理由づけられることも知れぬが、自分はさうしたことは知るすべもない。ただ、いつも思ふことであるが、彼がこの世と訣別して行つたときの執つた所置といふものと、彼のかき残したものは、よく結び着いてゐると思ふ。

彼のかいたものには、深い誠實さがにじんでゐる。若さからくる衝動や色気が割に薄く、じつくりと腰を据ゑて考へ追求してゐる。自分に酔はず、時代の若さにも酔つてゐない。生き方がいつもさうであつたやうだ。だから仕事も亦さうなつてゐた。いつも時代といふことを考へてゐた。とりわけ、この國の文化のありやう、この國の文學のありやう、——それをずるぶんと若いのに拘らずよく考へてゐた。この國のありやうにつくづく業を煮やすといふやうなことも、かいたものうへには出てゐない。何とそれを言ひ現したらよいだらうか。——若い短慮や、思ひあがりから、あらぬ理想の國を妄想して、そこへ越境するなどといふ氣が起つてゐない。越境するなどといふことが思ひ浮ばぬのであつた。もつと自分のうちの問題としてそこに深くかかづらつたのであつた。

「我は生れながらにして此獄室にありしにあらず。もしこの獄室を我生涯の第二期とするを得ば我は慥かに其一期を持ちしなり。その第一期に於ては我も有りと有らゆる自由を持ち、行かんと欲するところに行き、住まらんと欲する所に住まりしなり。われはこの第一期と第二期との甚だ相懸絶する者なる事を知る。即ち一は自由の世にして、他は牢囚の世なればなり。然れども斯くも懸絶したるうつりゆきを我は識らざりしなり。我を囚へたるものの誰なりしやを知らざりしなり」(我牢獄)

といふ。この第一期といふのはおもしろくなく、そこは自分の想思を注ぐところで、希望の湧くところで、最後をかけるところで、やはり「故郷」といふべきだといつてゐる。大體、この「我牢獄」といふのは、おそらく透谷の個體的な愛情の問題が含まれたものであらうが、併し、われわれは、そこから一步離れて、彼の生きた時代のことに戻してみてもいい筈だと思ふ。ここにも亦、人間透谷、若き透谷の暗く重苦しい憂悶が示されたのであつた。

2

或る春の夜のこと、透谷は松島に遊んだ。

枕頭の燈火を消した中に、小鬼大鬼が夥しく彼の半睡の間にその室に群がりたはむれた。彼はそれを袖を擧げて拂ひのけた。だが鬼たちは、喧笑し放語してやりきれぬので、到頭彼は枕を蹴つて立ち上り、だまつて柱に凭りがかつたところ、やつと鬼たちはもう姿を現はさなくなつたが、靜かに考へてみると、それは鬼の形をした自分自身に纏ひついてゐた百八煩惱のすがただつた。と透谷はいつてゐる。

この鬼たちは、その鬼といふ形に於て、透谷と世俗との通路となつてゐたものとみえる。自己の

内部にあると共に、外部からもきた。透谷はかへりみて他をいふことばかりかしたのではない。世俗的なものが「美」をも眩まし、みづから悩むところに、「美」を求めるものの苦惱が深められる。大鬼小鬼とは、畢竟は、「美」の透谷的なもの、たまたまの問題となつてくる。だから「美は遂に説明し盡す能はざる者なり。……」と彼は、そこに「美」を検討せざるをえなかつた。その「美」は、そして「自然美」の問題に一應、限定されて語られてゐる。ところは、松島なので、そのむかし芭蕉がここに遊んで、芭蕉の詩情と詩才とを以てしても、否、その詩情ゆゑに、詩才ゆゑに一句も作らずして立ち去つたことの詩的據點を追求していくのである。

「試に思へ當年芭蕉の俳句を作らざる可らざるは、今日の文人が文章を捏造せざる可らざるよりも甚しかりしを。況や扶桑第一の好風に遊て一句を作さずして歸りし事如何許の恥辱にてやありけむ。然るも凡庸の作調家が爲すこと能はざる所を芭蕉は爲せり。」(松島に於て芭蕉を読む)と透谷はいふ。そして芭蕉の松島に於ける詩的心境の在りどころといふのは、

「冥交契合の長き時は自ら山川草木の中に己れと同様の生命を認め來つて一條の萬有的精神を遠暢し、唯一の裡に圓成せる眞美を認め、われ彼れが一部分か、彼れわが一部分かと疑ふ迄に風光の中に己れを拮入し得るなり。この時に當つて句を求むるも得べからず。作調家は遠く離れたり。

詩人は斯る境界にあつて句なきを甘んずべし。」(同上)

これはひとつの透谷の解釋であることは、彼もそれをはつきりといつてゐる。が、彼は芭蕉のうち、その本來の詩人のところを読んだのであつた。

透谷は、その頃の文學のありやう、精神——さうしたものを誠實に考へてゐた。その頃のものばかりではなく、透谷の身に、そしてその周邊にのしかかり、絡みついてゐるところの、この國の文學の水脈について、いつも深く考へ、そして苦惱してゐたのであつた。

芭蕉の詩が、或る點で、やはり透谷を苦しめるものを持つてゐたであらう。けれども、その芭蕉を全部的に抹殺し否定する暴舉のごときはなさなかつた。若い彼にして、それをかるがるとはなさなかつた。山路愛山の文學論に挑戦して、愛山をして、一夜、眠らせなかつた、といはれる篤銳な理の手榴彈を投げかける彼にして、そこにはみごとな判断の明るさを示してゐるのである。

彼は、芭蕉をも含む我が近世の町人の文化に對して決して無智ではない。むしろ、彼がいちばん読み考へたところの町人文化といふものは、おそらく、近世のそれであつたと思ふ。といふのは、彼はその「徳川時代平民的理想」や、「徳川時代平民的虚無思想」に於て、そのことを鮮明に告げてゐる。

透谷は、その中に、端的に、日本の近世文化の性格を捉へてゐる。元祿文學非難の聲のうちにあつて、その市民的特質と基礎づけとを認めて止まない。そしてそれと關聯させつつ、われわれの平民の歴史の傳統をさぐつてゐる。歪まれ壓された平民の文化の様相や色どりが、一體、どんなものになり終つたかを擱んでゐて、そのウェーゼントリヒなものとして、「粹」と「俠」とを抽出したのであつた。彼はその際、歐洲文化の「シバルリイ」との較量すらもしてみたのであつた。

自分には彼の徳川文化の探求の簡素な思考のうちに、透谷のすぐれた史眼の輝きさへみとめられるのである。それはかなり正確である。併し、狹量な合理主義の奴とはなつてゐない。どんなに正確さのうちに彼の愛情があたたかく湛へられてゐることか。正確な素描のうへに塗られ漂ふ愛情の彩光は、どんなに説得の力を蓄へてゐるか知れない。

そして言つてゐる。

「若し夫れ俠なるものを愛好するやと問はるる人あらば我は是を愛好するなりと答ふるに躊躇せざるべし。然れども我に俠を重んずるやと問ふ者あらば我は答ふるところを知らず、われは實に徳川時代に平民の理想となりて異色の光彩を放ちしこの「俠」を其時代の平民の爲に憐れむなり。かつて幡隨院長兵衛の劇を見たる時にわれ實に長兵衛の衷情を悲しめり。然れども我は長兵

衛の爲に悲しむより寧ろ當時の平民の爲に悲しみしなり。……」(徳川時代平民的理想)

ほんとに彼がここで言つてゐるやうに、長兵衛の芝居を観て、その心情をかなしんだ透谷のころといふものは、近世の文化の或る性格や稟性をかなしんだことなのであつた。

彼の眼と感性とは、長兵衛を手がかりとして、それを限定する「全」のころを自己の胸に押し當ててしまつたのであつた。

彼が徳川期の「平民的虚無思想」といつたものも、近世文化に注いだ愛情と、そこから湧いてくる憂愁であつた。三馬や源内や一九の戯墨の形成されていくところに、平民文化の必然的なやりきれなさを見たのであつた。島崎藤村の言葉でいへば、「時代の成長を促すためにあるやうな人」である青年透谷が、いたづらに、「まこと」に人間は自由を享有すべき者なるよ。今日までの歴史を細閱すれば自由を買はんとて流せし血の價と煩悶せし苦痛の量とはいかばかりぞや。」(徳川時代平民的虚無思想)とだけ、ただ放言してしまはないで、——つまり、平民文化の持たうとした自由への意欲だけを大映しにしないで、そこにその卑小感を指摘してゐる。平民文化を總體として少しも肯定す

る甘さを持たない。われわれの平民文化が決して無条件では認すべきものではないことを、立派にみてとつてのうへの言葉である。それは單に、平民であるから、平民が形成し創つた文化であるがら陋すべきだ、といふ思考とは、非常な隔たりを持つてゐることは勿論である。さうした人間、乃至は民族の意識の考量をくぐらない固定したポイントからの言葉ではないのである。固定性、非人間性を新たに乗り超えて、そこから愛情のまなざしを向けた正常な考案であつた。透谷と同じやうな出身層のひとたちが落ち込んだ思考の窪みを認めず、高く遠く見てゐたのである。ただ、西鶴・其磧のたぐひを、をりをり「風儀を紊亂したもの」と考へてゐるところもあるが、それとも、所謂、彼の「艶美」とか「粹」とかいふ、彼が憐んだ平民文化のひとつの精神として見ようとする安當な眼を曇らし切つてはゐないのである。

紅葉が「伽羅枕」をかいたときも、それを見る彼の眼には歴史性が閃めいてゐた。文學の成長を熱く希求するところが示された。「歌念佛」を讀んでも、そこに彼の精一杯の眞摯なフェミニズムがみえた。それは「厭世詩家と女性」や「處女の純潔を論ず」をかいた彼の意識と結びつくところのものであつた。

青年の藤村がこの透谷といふ青年と文學的に交流した焦點といふものは、時代の若さの燃える熱

氣をたちのぼらせてゐる。「若菜集」の情感や形式が、「雙蝶のわかれ」や「眠れる蝶」から繼承されたばかりではなく、今日の問題と彼ら悩める青年の時代の遠くから、ひたひたとひびく傳統の漣波のうちから掬ひとつてゐる心魂のはたきまでも繼承されてゐるといへると思ふ。「若菜集」のうち、「思ひ亂れてみちのくの宮城野にまで」流浪した青春の悵辭の障壁の破れる音のほかに、さういふ傳統の漣波のうちに今日の問題を掬つて、今こそとばかり新しい情感をこめてうたひあげた藤村も、それは透谷の女性のための若く新しい戦士の理念が詩的形象を経て噴出したものにほかならぬであらう。お夏清十郎をうたつた「四つの袖」、梅川忠兵衛の二重死を歎じた「傘のうち」、そして「おきく」にみえる思想と韻律とを考へてみればわかる。

藤村はその「春」のうちにこの透谷の人間像をかなりくつきりと描いてゐる。おそらく藤村をとりまいた誰よりも、この透谷を鮮明な線條で描いてゐると思ふ。それを見ると、透谷が、青年にもあるまじき、といへさうなほどあまりにも熟した落ちつきを以て、古典的なものとの接受や繼承に分別をみせてゐるその調子が、いつもいつも平靜に鳴りひびいてのみるたではないことが判然するだらう。その烈しさが鋭く時代の在りやうに突きささつて行くのでも知られるであらう。

「今の時代は物質的革命でその精神を奪はれつつある。外部の刺戟に動かされた文明である。革

命でなくて移動である」(春)

「今の祖國は唯青年の墓である。何等の新しい生命を認めることが出来ない。何等の創意もない。唯淺薄な泰平の歌を聴くのみである。破壊！ 破壊！ 破壊して見たら、あるひは新しいものが生れるかも知れない。今日までの自分が苦戦は、すべてその精神から出た努力に過ぎなかつた」(同上)

などと、透谷の言葉としてかかれてゐる。

この言葉は、明治二十年代の目覺め苦惱した青年インテリゲンチヤの痛切な聲であつた筈だ。芭蕉が松島で句作しなかつたことについて、かなりの探求慾をみせた透谷は、ただ文學の局部のみに潛入して物を言つてゐた職業的評論家ではなく、その彼の存在のうしろにはかなり幅と奥行きとが控へてゐたのだつた。彼は政治に對しても無關心どころか、既に自由黨に關係したこともあつたので、社會、政治、そして文化の問題は、文學を包み、文學と相關するものとして絶えず動的にみられたのであらう。いまここに「春」から引用した言葉にも、どんなに明治の維新以後の動きに身を以て惱んでゐたかは、明瞭である。

4

「文學は男子一生の仕事とするに足らぬ」といつて、文學と訣別し實踐の世界に飛躍したのは二葉亭であつたが、このひとのうへに斯様な決意を齎したのも、時代に規定され、傳統に制約されたその當時の文學を考へることに依つてうべなはれることであらう。併し、透谷には、到底、二葉亭の如き飛躍などはできなかつた筈である。藤村もこの二人を較べてその違ひを言ひ「意味の深い未完成のままに斯の世を去つたことだけは似て居る」(岩波文庫版、北村透谷集、島崎藤村序)といひ、また、「二葉亭の生涯には、藝術と實行の分裂ともいふべき悲しみが味はれる。そこに空虚がある。その空虚は近代に勃興した科學的文明が藝術の世界に齎した悲みと言ふことも出来ると思ふ。透谷には二葉亭に無い力があつた。彼は二葉亭が藝術と實行との間に感じたやうな空虚を感じなかつた」(同上)とかいてゐるけれど、「二葉亭に無い力」といふのは、透谷の自我の深部に無慘に突き入る力であり、それは幅をいよいよ狭めて加速度を増して深淵へ落ち込むといふ底のものであつたから、前にも言つたやうに、あらぬよその領域への越境など夢想だにしなかつたが、とうとう飛躍したところは「死」でしかなかつた。

一體、多かれ少かれ、この透谷の生きた明治二十年代に「我邦未來の文學をいかにせばや」(歌念佛を讀みて)と、考へたことは、透谷や藤村や、そして二葉亭だけだつたのだらうか。

さうではなく、ただありきたりの古風な流れに停頓することを肯んじないものが、少くとも一般の文壇、或はジャーナリズムにもあつたことは確かであつた。そのひとつの例證として、自分はいま手元にあるその當時の古い雑誌「國文」(筆者註、神田仲猿樂町にあつた國語傳習所より明治二十三年五月發刊せるものにして、主として當時の國文學知名の士から新進の人々が執筆してゐる)の創刊號から十數冊を取り出してみると、「雜錄」といふ卷末の(今日の所謂、六號雜記の如き箇所)にも次のやうな記事がみえる。これは明治二十六年八月發行のものである。

「鷗外氏が明治の文豪たるは皆人の知るところ。學、東西に涉りて識見時流に超脱し、一たび落想の時は、いかなる長篇も立ろに成る。蓋し小説家中の第一流なり。……あはれ蕩々たる文學界、知らざることまで得たり顔にいひ立て、柄になきことども吐き出すが、すべての習ひなれば、氏の如きものありてこれ等を矯正することなくは、蛙鳴蟬噪それ何れの日にかやまむ。

今や早稲が谷には教へ子夏草の如し。千朶木山邊、豈に撫子の花なからんや。英の文華はかの谷にほへり。獨の彩雲はこの山にかかりたり。逍遙氏が英文學に於けるが如く、氏は實に獨逸文

學の代表者なり。くらげなすただよへる我文界の有様は、恰も獨逸文學が獨立せむとする以前の有様の如し。今の時に當りて日本文學を發揮して、世界にわが文あるを知らしめむこと、それ誰の任ぞや。獨逸文學が今世紀に於て俄に隆興したるは、一二の偉人の出でてこれが氣運を導きしによるのみ。君はそれわが日本文學に於けるクロップストックたれ。濟々たる後進の多士中、豈にゲーテ、シルレルなしとせむや。」

と、鷗外に關する記述を主として述べてゐる。筆者は誰か知らない。かうした日本文學の現状を鑑み、西歐文學から攝取すべきことの重要性を説いてゐるのは、必ずしも逍遙や鷗外の力のみを俟つてゐるのではなく、劇界に關する記述に於てもそのことはみられる。然もこの雜誌は、わが古典の直系ともいふべき國文雜誌であることに注意しなければならぬ。古典の傳統の重要性を強調しながら、海彼の文學を絶えず考へ、そこに榮養價を見出してゐるのである。結果に於てはどうあつたらうと、「日本文學を發揮して世界にわが文あるを知らしめ」ようとする意慾に燃えてゐたことは十分、明らかである。

だが、何としても、これは一雜誌の匿名の六號雜記の如きものである。そこにはやや放恣な壯語的口吻が絶えて無いとはいへないであらう。これと、透谷の言とをぢきぢきに結びつけて考へると

いふのではないが、尠くとも、透谷が考へ言つたところの舞臺の裏にも、かうした氣運がかもされてゐたといふことは言つて差支へないと思ふ。ただジャーナリストの無責任な高言だとひとは考へ去るかも知れない。傳統古典文學と西歐文學との連結接受の通俗性のみを見出して、併し、いま自分は、さうした一編輯子の論説の據點を小意地悪く追求せんさくする意圖を持つてゐるのではなく、ひとつの學界、乃至はジャーナリズムのうちに見出される傾向、雰圍氣を言つてゐるにすぎない。それとこれとはやや違ふ。これとは透谷のことである。透谷が近世文學を省察し、平民文化の宿命や性格を歎息し、その道統のうへに立つところの日本人間と文化の問題を、つひに自我の内面に求めて、むしろ自虐的にまで苦惱したこと、そして、それが彼らの相渉り、身を以て對處しなければならなかつた文學に於ては、「我邦未來の文學をいかにせばや」と叫ばざるを得なかつたこと、心情と考索の苦しさに思ひを致してみても、今日のものではないか、と言ふにすぎない。同じやうに古典の吟味や再認識といつても、今日のそれと青年透谷の時代とを混同することはむろんできはしない。併し、現代や今日に主體的なポイントを置いて、在つた古典文學への關聯と、在るべき未來の可能な文學へのはたらきを、切實な、しかし壯んな問題として考へねばならぬといふ事情を、ひとつの圖式としていふならば、類似性は無いとはいへまい。

貫き立つもの

—— 鷗外に關して ——

1

近代を抹殺したくない——「したくない」などといふのは勝手な恣意の言葉とは考へて貰ひたくない。「してはならぬ」と、いつてもよい。かういふ言葉の據り所を、先づ聞きたがる人といふのも、少しく縁が遠い。據り所を少しも言はないといふのではないが、先づそれから最つ先に聞かうとする精神といふものは、それこそ超克さるべきものと深い繋りを持つてゐると考へてよからう。近代といふ時代はありがたかつたと思ふ。われわれ如き人間をも生かしてくれたのは、この近代であつたのだ。明治維新がありがたい。だから近代はありがたい。近代を嫌厭ばかりしてゐることはつまらぬ。近代はつまらぬ、といふ以上に、つまらぬことである。

明治維新を抹殺するといふのであらうか。近代を抹殺するなら、明治維新は抹殺されねばならぬ。たとへ、近代の歴史がどのやうな方向をとらうとも、とにかく、それは維新と切り離して考へることはできない。いま近代を抹殺しようといふ言辭を弄するかにみえる人といふのは、おそらくは維新の志士の精神を畏敬する人であらう。だから、維新を抹殺したのでは、志士の精神といふものは浮ばれなくなる。

近代のわれわれの歩み方、生き方に、反省すべきものがあり、そこに臍を噛む思ひをしたからとて、それで以て近代を全的に抹殺し否定するといふことは、それこそつまらぬことであり、子供じみてゐる。また女々しすぎることである。私は、近代はありがたい、と言つたけれど、何もかもありがたく正しいと考へてゐるわけではない。

近代に於て、歐米諸國は——特に英米は、近代的狡猾性ともいふべきものを以て、われわれを世界歴史の新動向のうちに手を把つて引つ張り込んだのである。われわれの内にも、人間的歴史性・積極性は既に孕まれてゐたのであるが、これを更に強引に誘掖したのは英米の狡猾なる近代主義であつた。われわれはこの點に於て彼らに一應の感謝の意を表さなければならぬかも知れぬが、彼らもともと道義性に於て缺けるところあつたが故に、どこどこまでもわれわれは英米に謝意を表し

てはならず、われわれは今や、どこどこまでも東洋、乃至は日本本來の立場に還つて、英米中心の狡猾性を打破しなければならぬところにたち至つた。即ち、近代主義の假面を被つて、われわれに嘗て、世界的な歴史的眞理を教授した英米の歴史的限界は、遂にその極限にまで來つたのである。世界舊秩序の、現在の崩れ落ちる音響はそれを如實に告げてゐることである。

私が近代への感謝の念を持つが、それは無條件的なものではないことは、約言すれば以上の如きことになる。

英米中心の近代主義の波濤が、われわれ國土の岸邊をうち叩いたとき、日本の近代人たちはその物音に耳を驚かし眼を瞪つたことがあつたが、彼らは盡くさういふ英米近代主義の奴隸となり果てたであらうか。われわれの近代文化は、彼ら英米文化の植民地と化したのであらうか。——特にわれわれの文藝は根こそぎ彼らの意志のもとに操られたのであらうか。

そのことをわが近代文藝史に重要なシチュエーションを有する鷗外、——特にこのひとは自身ヨーロッパに渡り、彼の地の文藝界の新潮に直接觸れてきたものであるから、その點でも、われわれの検討のうへに適切な材料を興へて呉れるのではなからうか。

2

鷗外は文壇の圏外に立つてゐたといはれる。それは生涯を通じてさうあつたといふのであらうか。その論議は別として、さういふ風にはつきり見えるのは、彼が歐洲留學から歸つて「うたかたの記」や「舞姫」を書いてから「滔々たる文壇の流れに柵をかける」といふ心構へからはじめた「柵草紙」時代のやうでもある。殊に歐洲からその頃の日本の文壇を吹き靡かせてゐた自然主義文學に對して冷淡で傍觀的であつたやうである。これは彼が自然主義文學隆昌の史的意義を知らないためではないであらう。彼がそんなことを辨へなかつたとは考へられない。或は彼が「わたくしは初めより自己が文士である藝術家であると云ふ覺悟は無かつた」（なかじきり）といふやうに、初手からディレタントだつたからだ、といふところにのみ根據を求めるとも誤りではないだらうが、それでは少し單純すぎるやうに思ふ。少くとも鷗外の場合においては、その邊の事情はかなり複雑な諸事情が考へ併されるのではなからうか。

つまり彼は日本の文壇の内容を知つてゐたのだと思ふ。そしてヨーロッパに自身行かなくても、もちろんその位のことには識りえたらうが、留學してくれば、それは一層具體的にはつきり體感したのだと思ふのだが、近代歐洲の文學の光彩陸離としたもの、そのヴァラエティーなどを、識つてゐて、大方の文壇人のやうにただ偏へに、自然主義一色では肯んじられないものがあつたのではなからうか。

その頃からずつと後のことであるが、「文藝の主義」（明治四十四年）といふ文章では、多少、彼が自然主義に對して執つた態度が暗示されてゐるやうだ。

「藝術に主義と云ふものは本來無いと思ふ。藝術その物が一つの大きな主義である。それを傍から見て、個々別々の主義があるやうに思ふに過ぎない。Emile Zola なんぞは自家の藝術に自然主義と云ふ名を附けてゐた。さうして書いてゐるうちに、次第に其主義と云ふものに縛せられてしまつて、終に出した二三部の作は、頗る窮窟なものになつてゐた。（略）

自然主義と云ふことを、こつちでも云つてゐたが、あれは只勉めて自然に觸接するやうに書くこと云ふだけの意義と見て好い。それは藝術と云ふものがさう無くてはならないものである。

自然主義と云ふものに、恐ろしい、悪い意義があるやうに言ひ觸らしたのは、没分曉漢の言か、さうでなければ爲にするもの言である。云々と述べ、最後に、

貫き立つもの

「學問の自由研究と藝術の自由發展とを妨げる國は榮える筈が無い。」と、筆をとめてゐる。とにかく、この短文で見ても、彼が自然主義に他の文人のやうにひた向きにのぼせてはゐなかつたことは窺はれると思ふ。

尙、「學問の自由研究云々」といふ彼の言葉を特にここに示したのは、序でながら、鷗外といふ人間がやはり歴史の動力學的なものの支配を受けてゐること、これはその言葉の限りに於ては、われわれにも肯定できるものなのだ、といふことだ。但し、それは「その言葉の限りに於て」といふことで、この中から時と場合とに依つて、いろいろなヴァリアチオンが生ずることは勿論であらう。かういふ鷗外の思惟や意識と類項をなすものは數多いものがあるが、それは當然さうあらねばならぬことである。

「……西方の優美なる文學は、その深邃なる哲理と共に我疆に入り來れり。而してその文學の種屬を問へば叙情詩あり、叙事詩あり、また戯曲ありて、固より一體に局せずと雖、輒近西歐諸州に盛なる小説を以てこれが主となす。夫れ小説の盛んなること、固より喜ぶべしと雖、此詩體は一定したる風格あるに非ざるを以て、無能の徒、亦能く擧に倣ひ、遂に瓦釜雷鳴の有様となりたり。

我邦の文學界には、外より來れる分子、既に甚だ多し、古釋教の入るや、重譯を經たるを以て、

印度の文學はおほく俱に來らず。獨り支那の文學は、その政治風教に伴ひ來りて、大に國內の趣味を變動せり。宜なるかな、今の文學者には歌人あり、詩人あり、國文を善くするものあり、漢文を善くするものあり、眞片假名體に長ずるものあり、言文一致體を得意とするものありて、本國、支那、西歐の種族の審美學的分子は、此間に飛散せること。此混沌の狀は決して久しきに堪ふべきものにあらず。余等はその澄清の期の近きにあるを知る。而してそのこれを致すものは、批評の一道あるのみ。(略)

余等は固より小説神髓と美辭學との論ずる所を以て、一々醇なるものなりと云はず。而れども今の文學界に此等の書を出だせるは偶然に非るを知る。如何と云ふに、今の詩文を言はんと欲するものは、邦人の歌論と支那人の詩論文則とのみ據るべきにあらず。西歐文學者が審美學の基址の上に築き起したる詩學を以て準繩となすことの止むべからざるを知らばなり。」(柵草紙の本領を論ず) かういふ「西歐文學者が審美學の基址の上に築き起したる詩學を以て準繩となす」べきだとして文藝の本質をハルトマン美學で考へたり、神話や歴史への問題に、フアインゲルの「アルスオプ」哲學で觸れたりしてゐるところに、鷗外思想の歐洲近代主義は明確に形を持つてゐた。いま自分はさういふ點を、ここに逐一、擧げようとは思はない。彼の作品や論文をみれば、おの

づから明瞭である。そしてまた、彼がさういふ思想や藝術理論のうへで西歐近代主義が領してゐたばかりではなく、日常的な肉體的な趣味にすら、それは浸み込んでゐたとも考へられる。それをいま、直截に卑近な例でいへば、彼が自分の子女たちに附けた、その名前のうへの感覚にも、ありありと見られると思ふのである。

3

だが、鷗外はもちろん骨の髄まで、ヨーロッパの近代主義に領せられてしまつたのではない。むしろ或る點では、それと戦ひ、彼の内部に明確に形造られてゐるものでもつて、貫き通さうとしたことを見なければならぬ。少くとも單純に淺薄に近代文化の波間に漂つてゐたのではなかつたのだといふことを。

彼の自叙傳的作品として、しばしば人が取りあげる「妄想」の中に、「小さい時二親が、侍の家に生れたのだから、切腹といふことが出来なくてはならないと度々諭したことを思ひ出す」と云つてゐるやうに、謂はば「士魂」といふべきものが培はれてゐて、それが、彼の地位や職業柄、いよいよ生かされてゐたと思ふ。

もともと、日本の所謂、軍人といふものの内實的な精神は、どこまでも中世以來、擔ひ來つた武士精神そのままと言つてよいであらう。近代的裝備のすぐ内側にあるものは、かういふ秀拔な傳統精神であつて、それがわれわれの近代戦を完全に動かしてゐるのだ。

彼が「普通教育の軍人精神に及ぼす影響」といふ文章で、軍人の智と情と徳とに對して自分の抱く當爲的なものを示してゐるが、これは即ち、傳統的なわれわれの士魂に他ならぬのであるし、また彼みづからが、その日常性に於て、それを實踐的な倫理箇條としてゐたことは、彼の起居、勤務状態などからも察せられる。そして、このやうな在り方の彼が同時に藝術を論じ、また創造する者であつたのだ。

石見國の津和野といふ小藩の典醫の子として、肉體的に所謂、「古きもの」は、彼を規定してゐたが、また一方で「新しきもの」が、彼の生ひ立ちのうへに大きな波としてかぶさつて行つた。彼よりも既に彼の父が蘭醫であり、彼が幼くして父からオランダ語を習つてゐたことなども、それである。

彼のそれから後の文化的な生ひ立ちは、盡くさういふ「新しきもの」の世界で無いものはないといつてよいけれども、彼の聰明さと、そこから導き保たれ培はれた見識は、この「新しきもの」の力

に空しく埋没したり没はれたりしなかつたのであつた。

醫學に關してのことは知らないけれども、それすらさうであつた如く、われわれ門外漢にも感じられる。彼の文學的領域に於ては、近代人的性格を多分に示しながら、眼眩んでしまつたとは到底思へない。

技法の如きことは精細に見たり考へたりしてゐる餘裕もないので、むしろ肝要な根底となつてゐる、その文藝精神、文藝意識だけのことも、せめて僅かに觸れてみたい。

先づ彼がドイツ留學中に地質學者ナウマンの日本に關する謬見を默許せず堂々論駁したことはあまりにも有名である。(森潤三郎氏の「鷗外森林太郎」に、このことの経緯が略記されてゐる)單なる西洋心醉者に、またさうでなくても薄志の徒に、當時に於て遠く異邦に在り乍ら、あれだけの紛争のうちに敢然、祖國の名譽と自己の學的良好のために立ち上るなどといふことはできえないところであらう。

尙、今日では人種や民族の問題が非常に活潑になつてゐて、有名な十九世紀のフランスのゴピノー伯の「人種哲學」などは、アーリアンの一つの思ひあがりと考へられるのであるが、それに就いて既に鷗外は、明治三十六年十月、講演をまとめたものを春陽堂から「人種哲學梗概」として發表

してゐる。

續いて、翌三十七年五月に、再びサムソンヒンメルステルナーの“Die gelbe Gefahr als Moral-
problem”を「黄禍論梗概」と題して春陽堂から同じく上梓したのであつた。

これらち、決してヨーロッパ學者の涎をねぶつてゐず、立派に批判し、既にアーリアンの迷夢を
いちはやくみてとつてゐたことは、次の短歌に於て覗はれるであらう。

黄なる奴繭絲まゆいととなれわれ富まんいなまば汝なほきなるわざはひ

黄なれどもおなじ契の神の子をしいたぐる汝なほしろきわざはひ

これは短歌だけといふのでなく、これと共に「黄禍」といふ詩を作つてゐる。それは、

勝たば黄禍負けなば野蠻

白人ばらのえせ批判

貫き立つもの

古典のはなし

一〇六

褒むとも誰かよるこばん
誇るを誰かうれふべき

黄禍げにも野蠻げにも

すさまじきかなよべの夢

黄なる流の滔滔と

みなぎりわたる歐羅巴

見よや黄禍見よや野蠻

誰かささへんそのあらび

驕奢けふしやに酔へる白人は

蝗襲いなむしふたなつもの

黄禍あらず野蠻あらず

白人ばらよなおそれそ

砲火とだえし霖雨なみさめの

野營のゆめはあとぞなき

かるくはぐらかしてゐるものが、表現のうへにみられはするが、鷗外の憤怒は、この詩にしても、短歌にしても、たぎつてゐることは明らかである。

實は、かうしたものを、鷗外の諸作品の中かち拾つて考へたかつたのであるが、それだけの紙幅がないので、彼の韻文の中から、さうしたものを取つてみるのもおもしろいと思ふので、それを試みてみよう。

4

昭和十四年八月十三日の報知新聞に「日本外交に老女醫の警告鷗外悲憤の一篇『せめては草』を世に問ふ」といふ記事があつた。

これは濱松の愛國婦人會支部副會長内田光子刀自が、

貫き立つもの

一〇七

日英會議を契機に澎湃として捲起つた反英運動協力外交確立への叫び高き折三十五年前の同様な國民悲憤の輿論を想起せしめるこの歌詞の意義によつて再び國民に或は外交への警告ともなるならば故鷗外翁も許して呉れるであらうし、こよなき手向草ともならう。

といふ考へから、明治三十八年十月二十一日附で軍醫部長として刀自に送つた詩の「せめては草」を發表するといふ記事なのであるが、この詩は既に、「濱松婦人會の爲めに作る」といふ括弧つきで「うた日記」の中に載つてゐるものである。勿論、「鷗外全集刊行會」の全集にも收められてゐる。それを少しくここに掲げてみる。

(前略)

陸に奉天おとしいれ
海に艦皆沈めてし
捷にふさはぬ獲をば
忘れて今日を祝ひなん
いざや迎へん皇軍を

日ごろ御國のあるさすと

惜みし領土樺太も
この戦ひのおもひでに
せめては半還されぬ
いざや迎へん皇軍を

人の嫁の衣織りし
恨十とせの遼東も
この戦のおもひでに
せめては我手に落ちにけり
いざや迎へん皇軍を

望の夜過ぎて月は虧け
敵器も滿つれば覆る
貫き立つもの

古典のはなし

満ち足らはざる平和ぞ

なかなか裔の幸ならん

いざや迎へん皇軍を

白き薔薇にけおされし

口なし色の笹の菊

今は扶の杖繁く

耀く地の中黄色

いざや迎へん皇軍を

この詩に添へて、鷗外が當時、刀自に送つた書簡の一節に、

「さてここにお願申上度はこの無名氏とは何人といふこと暫くの間秘密になされ、就中新聞に名の出でざるやう御盡力下され度、ことにはこの稿の中にはやや無遠慮の文句あればいろいろ非難などありて御會にまで迷惑をかけてはすまぬことと存候 かやうのものは一時誰の作とも知らずして過

ぐるときは後になりて事新しく非難も出でず済むならんと存候」とある。

國家が胸に涙を押しかくしての表情なのに、たまたま堪りかねて鷗外がひとり走り出ようとし、はつと反省し、ためらふ可憐な姿が、鷗外といふ人間とは思へぬほど痛々しくみえてゐるではないか。鷗外はこのときの可憐な日本の國民のひとりであつた。そんな姿が、この刀自に與へた手紙の文句にもにじんで映つてゐる。

それから前に言つた、軍人精神を身に附けてゐた彼は、たまたま一軍醫といふより、軍人としてその面目を強くみせてくる。

聽け治作そのよし告げん

かねてより死を決したる

汝こそ撃たせて刺さめ

生くる道求むる敵の

刺されつついかでか撃たん

貫き立つもの

古典のはなし

一一二

一すちの髪だに容れぬ

勝敗の機はここにあり

おしなべて軍もしかなり

國もしかなり

かういふ「石田治作」といふのがある。これはロシヤの將校と戦闘して俘虜としてしまつた從卒の石田治作の、ふしぎな疑惑を解いてやり、われわれの民族とわれわれの國家との純粹な決意のうつくしさを、うたひ述べたものである。

かうしたものは、戦争中作つたものだけに「うた日記」のうちには、甚だ多い。

だが彼は、一方に偏して瘦せた精神で、ただ愛國者を單純に示してゐるのでは勿論ない。彼の「古きもの」と「新しきもの」とは、戦ひつつ反撥しつつ調和しつつ、みごとな豊かな諧調のうちに息づいてゐる。

さういふ彼の内部で相せめいだ後の、うつくしき諧調はどんな風に示されたか。

新 墓

そぞろありきのかへるさに

しばしいこへる山の上の

石にさす日は傾ぶきて

末枯るる野のいろ淡し

ふもとも繁しじに林なす

しるしの杭くわのまだ白き

かたばかりなるおくつきに

竝なみてぞ臥せる敵味方

そを眺めやる束のまは

なさけもあたま消えはてて

おなじ列なるにひはかに

貫き立つもの

一一三

古典のはなし

一一四

おなじ涙を灑ぎけり

こすもぼりいと悪むてふ

伶俐しき博士な咎めそ

わがかりそめのこと草は

衝に説かん道ならず

鷗外みづから、豫ねて「こすもぼりいと悪むてふ」と、防備してゐるが、實はこれは、「こすもぼりい」と「古きもの」の精華のひとつが均衡を執つたところに湧いた情感であるのだ。だから、われわれは鷗外が「おなじ涙を灑ぎけり」といつたところが、同時代にいまわれわれに迫り、涙を灑がせるのである。

戦ひは正義の審判臺のうへに置かれたものである。正邪は歴史が識つてゐる。従つて誰が好んで戦ひをするか。戦ひの惨禍を承知してゐるからである。併し、それでも歴史の軋り盛り上る極點に於ては既に不可避であり、人間業の能くするところではない。敵味方の新しき奥津城を前にして流

涕する姿は、むしろ甚だしく鷗外的なるものきびしい戦慄の美しくしさである。輕佻な錯誤に陥つた見解からの心情がさ迷ひ出たわけではない。

ひとつびとつの人間が、かくも新しき墓となり果てたことに、新たな感慨をその内部からたぎらせえない者に、どうして「聽け治作そのよし告げん」と、はつきり言ふことができるだらう。

「個」を深く愛し透るころが、また深く「全」に通じ、そして「個」を超えて昇華する。歐化主義者などといふ、あはれな呼稱は、鷗外の場合には慚死してしまふ。かういふ呼稱が慚死するところのかなしさを、現在のわれわれ文化人は今日の戦ひの場に於て、しばしば至醇高邁になし遂げたことを、いくたび聞き傳へられてゐることか。今やパスカルやリルケなどを讀む時か、といふ非難を受け乍らも、敢然壯烈な最後を以て青春を閉ぢてしまつた若きわれわれの友のころの前にも、勿論、かういふ呼稱は慚死する。パスカルやリルケが西歐人であつたから、彼らはそれを讀んだのではなかつた。日本の文化人であつても、國家や民族の意志に參じようとしていちど普遍人間としての生死の關頭に立つて考へざるをえないとき、それはリルケの苦惱でも親鸞の苦惱でも、そこに差別を喪つてくるのである。

鷗外はむしろそのことを夙に三十五年も前に、心にいちど噛みしめたことがあつたかも知れない。貫き立つもの

一一五

このことは漱石の場合でも考へられるものであるが、漱石はロンドン滞在中、かなり英國民に嫌厭の情を抱いてゐた。鷗外は、ナウマン事件の如きものがあつても、漱石ほどにはドイツに對して嫌厭しなかつた。併し、おのれを忘れ、祖國を捨てての耽溺など全くみえない。

次の如き誦賦あつて、われわれの同胞として、軍人として、文藝人として、この近代を生き通した彼の存在價值の高さをしみじみ思ふのである。

扣 鈕

南山のたたかひの日に

袖口のこがねのぼたん

ひとつおとしつ

その扣鈕ほたん惜し

べるりんの都大路の

ばつさあじゆ電燈あをき

店にて買ひぬ

はたとせまへに

えぼれつとかがやかきし友

こがね髪ゆらぎし少女

はや老いにけん

死にもやしけん

はたとせの身のうきしづみ

よろこびもかなしびも知る

袖のぼたんよ

かたはとなりぬ

ますらをの玉と碎けし

貫き立つもの

I

古典のはなし
もちたりそれも惜しけど
こも惜し扣鈕
身に添ふ扣鈕

一一八

神話と共に

1

わたしたちが、あまりにも古い神話と共に今でも生きてゐるのだ、と言つたら、少し奇妙な話だと思ふことでせうか。

須佐之男命すさのをのみことが出雲の國の肥の河の上流で、櫛名田比賣くしなだひめが恐ろしい八俣の大蛇やまたのおろちに食べられてしまふところであつたのを、何度も醸した非常に強い酒である、八鹽折やじはの酒を造り、八つの酒槽さかみねに盛つて、大蛇がそれを飲んで酔ひ倒れてしまつたところを、八拳劍やつかのつるぎを抜いてずたずたに斬り散らし、その尾の中から、とても鋭い大刀を獲られました、そのときさすがの肥の河の水は、全く紅に染まつたといふ話とはつくに御承知だらうと思ひます。

また、大國主神おほくにわしのかみ（大穴牟遲神おほあなむぢのみかみとも申しあげる）が、稻羽の氣多の崎で、鰐をだましたために毛皮を剥がれて苦しんでゐた素鬼しろつき（素肌の兎といふこと）を助けておやりになつたので、その後も大國

主神は、澤山の御兄弟の神様たちのためにいろいろ苦勞をされましたが、やはり稻羽の兔が豫言した通りに、とうとう美しい八上比賣を得られたといふ話も、われわれが幼い時から聞かされ、われわれ國民の心のうちに誰でも深くきざみつけられてゐることです。

かういつた話は、最もわれわれの胸のうちにはつきりした形と強い精神とを持つて、生きてゐるものですが、その他まだいろいろ面白い話が数多くあり、それらのいくつかは聞かれたこともあることと思ひます。

かういふ古い話が傳へられて残つてゐるといふと、そこには別にさう深い意味もないことのやうに思ふでせうが、それはただ話として形だけが、われわれの心のうちに記憶されてゐるといふのでなく、實はかういふ話を形造るところの根本の精神が生きてをり、今も尙、われらと共に在ると思ふのです。

それでは、それはどこに生きてゐるか。どんなふうになつて生きてゐるのか。

——ほかならぬ、われわれの心のうちにやはり生きてゐる。われわれの肉體のうちに存るのだ、といふのです。

かういふ古い神話の中に現はれる神様たちの、御姿は畫や何かで大體、御存知でせう。さうした

大昔の風俗と、われわれの今のそれとでは、ずるぶん違つたものであります。

わたしたちが洋服を着、洋食みたいなものを食べ、映畫をみたりして歩き、たまたま言葉を出したり、顔の筋肉を動かして、心のうちのいろいろな感情の起伏などを現はしてゐる様子を、ふと考へてみると、どこに一體、素兎の話や大蛇退治の話と繋りがあるか、と思ひますが、そんな西洋人とあまり變らないやうな恰好や表情をしてゐても、よく考へ、よく見てみれば、やはり血は争はれぬもので、そこにはやはり昔なつかしいこの國の神話の匂ひがすると思ふのです。髪を分けてゐても刈つてゐても、そこには大昔のみづらといふ髪の色が偲ばれるといふものです。表情に、ちよつとした物の考へ方に、やはり日本人だ、と思ふことがよくあるでせう。即ち、そこに神話が顔を覗かせてゐるといふのであります。

飛行機に乗つて、空中戦をやるときでも、親が子供を可愛がるとき可愛がり方にも、やつぱり神話のかかりがするといふのです。

われわれが汗を流して働いてゐるところに、われわれが飲食店で晝飯をたべてゐるときに、また遠い故郷の國民學校の校庭にも、もちろん鎮守の森にも、どこにだつて神話は生きてゐるといへます。

かういふわたくしの言ふことがおわかりでせうか。

2

神話々々といふけれど、一體それは何のことか。神話といふのは、その文字が現はしてゐるやうに、神様の話といふことです。

では次に、神といふものはどういふものであるか。これに就いてはいろいろ昔から説もあることですが、極く簡単に普通言はれてゐるところをいふと、本来、神といふのは「上」といふ言葉と通じてゐるのであります。「上」といふのは、やはり上に在るものことでありまして。音が同じ「かみ」で、どうして字だけが違つてゐるのか。即ち、神といふのは、ただ場所や空間のうへのことのみでなく、上に在るものの精神的な内容的な問題に屬するのであらうと思ひます。即ち、精神的な内容的な點からいふと、上に對する「下」の立場から考へることができるので、上にあるものは、そこにわれわれの測り知ることのできぬやうな、不思議なはたらきや力を持つてゐると考へられ、従つて當然、それは「上」から「神」となつて行くのだらうと考へられます。

そこで神の本質ともいふべきものが、大體、感じられるのではないですか。いま、神の本質を「測り知ることのできぬやうな、不思議なはたらきや力を持つてゐる」と言ひましたが、これはおそらく實に絶大なものであつて、それは神話を聞き、考へてみればすぐに感じられるところでありまして。今迄の説明でおわかりの通り、上は、それでは何に對しての上か、といひますと、それは下に對していふのであります。そしてその下なるものこそ、ほかでもないわれわれ人間のことではないかと思ひます。

外國の神話でもさうでせうが、この神は凡てのものの始めであり、本であります。だから人間はもちろんその下に在るところのものであり、下にあるからといつて、ただ壓へつけるなどといふこととはなく、むしろ恵みを垂れるのです。また恵みを受けた人間は、上に在るところの神を尊敬するのであります、そこに深い精神の結びつきが生じます。

さういふ神なるものは、亦、永遠なものである。神は凡てのものの始源として自己を在らせ、その自己のうちから人間の世界をまた永劫に展開させて行きます。そしてそのはたらきは絶えることがないのです。なぜならば、神のはたらきは絶大なものであるからです。神の姿は限りない偉大さに輝いてゐるからです。その人間の永遠の展開こそは、やがてわれわれの歴史となつて發展するのです。

日本の神話をみますと分ることですが、われわれの國土の神といふのは、單に抽象された觀念さ

れたものではなくして、ほんとに人格的であつて、歴史的な存在なのです。その證據には、神々から子孫が次ぎ次ぎに生じ、うつくしい血が永久に傳へられるのです。そこから神と人間との強く深い血縁的な關係が成り立つのです。つまり神と人間とは——神とわれわれ日本の國民とは、祖孫といふことになります。

神々が語られたかすかすの言葉、神々がなされた多くの行爲——それこそわれわれの祖先のなつかしい言葉であり、行爲であるといふことになります。依つて、血が神と人間との間に流れてゐるといつたが、それと共に心と心とがやはり一つにながつてゐる。

人間の心。それは何と奥深いふしぎなものであるか。心は血肉のうへに宿るけれど、やはり人間の本質的なものは、人間の心にある。その心が齎されたところを探れば、そこに神の姿が現はれる。心を基礎づけるものは神である。かやうに神と人間との關係は、深く内面的である。内面的に結びついてゐるといふことができる。

かくして人間は、いつもかうした絶大なはたらきを持ち、かすかに奥ぶかい神のはたらきのうちに包攝されて生きてゐるのです。

神話とは、かうした神の思ひ、神のはたらき、神の言葉が、さまざまなかたちで現はれる神聖な

尊さにみちてゐるものなのです。

3

かうしたわれわれの神話は、それではどういふ書物にかかれてゐるか、といふと、それは今から大體千五百年以上も昔に作られた「古事記」や「日本書紀」といふ書物のうちに記されてゐるのである。この日本書紀は全體で三十卷であります。その初めの二卷だけは「神代卷」といつて、非常に大切な部分であり、昔から多くの學者が研究してきたのです。また古事記は上中下三卷ですが、初めの上卷が書紀の神代卷に相當する部分で、神武天皇から後の時代とはつきり區別されてゐます。

かやうに神代と、それから人代とをばつきり分けて考へるといふことは非常に日本的な獨特なものであつて、ギリシヤやローマや印度や支那にもみられぬところなのです。ここに於て、古代日本民族が人間の本質といふものをどう觀てゐたか、また歴史といふものをどういふ風に考へたかといふことが察せられます。即ち人間世界、國家社會の悠久無限な發展を深く考へ詰めてみると、そこに神といふもの、神代といふものを見出すことができ、それはやがてこの日本の歴史を動かしてゐる

る根源的なものが在るといふことになります。

この神代といふ時代、つまり天孫降臨から 神武天皇に至る間は、一百七十九萬二千四百七十餘年といふことでありますが、これは神代の單純な時間の長さともみより、神代といふ、神聖な時代の永遠性を示してゐると思へます。

もしも神と人間との間に區劃がなく、神と人間との心の境界が朦朧として入り亂れてゐるのなら、人間みづからははつきりした使命の自覺がなく、強い、發展する力といふものが湧いて來ないでありませう。

神代のさまざまな面白い、そして意味深い話は、決してばらばらなものでなく、そこにおのづから全體がガッチリと有機的に統一されて働いてゐるのです。神は人間に使命を下されたのであるが、同様に神代なるものも、人間の歴史の根源的な型であり、スタンダードであります。

4

ところで、この日本の神話であります、そこにはまた日本独自の性格がみられるのです。

先づ西洋諸國で神話の源泉と考へてゐるギリシャ神話のことを考へてみますと、なるほどその話

はなかなか面白いのであります。イリアードとかオデッセイの物語をはじめとして、實に多くの變化と華やかさに富んでゐることは、すばらしいものがあります。併しそこに示された神話の根幹をなすものは、青空である父ユラナスを殺戮して支配者たりえたのはサタンであり、これは地上の人間の神である。これを征服したのが息子のジュピターで、これと對立して争ひ人間を支持したのがプロメシユースであつて、そこには天と地と、そして物と心とが互に對抗し、せめぎ合つてゐます。そしていつも強烈な女性の復讐とか、嫉妬とか、親子の間の痛ましい残忍な行爲などが行はれてゐます。一見その點は日本の神話にもあるやうにみえますが、よく考へると非常な本質的な違ひがあることに氣がつかます。

かういふ天上と地上との對立、精神と物質との抗争とは、支配することの力強さ、冒險することの逞しさがありますが、何か冷いぎりぎりしたものを感じます。それにかやうに精神が物質と争つてそれを支配してしまふといふことは、結局、その精神の豊かな發展を豫告してくれないやうに思へます。

日本の神話には支配と對立といふことは非常に薄く、むしろ一切をいきいきと生かせることにその本質があるやうです。そして日本神話はただ架空な理想の夢から生れたものでなく、非常に具體

的な精神に依つて貫かれてをり、そこには全體として對立抗争ならぬ、温かくゆるやかな和合のところが溢れ滴つてゐるのです。

日本精神といふことを近年、いろいろ問題にし、強調してきましたが、それはほかならぬかうした神々の時代にその源泉が清冽な水として吹き出してゐることを知らねばなりません。他の外國のそれと異なつて、われわれの神話には著しい國家的なそして民族的な性格が強く出てゐるのです。日本の國がどういふ風にして開けそめたか、そしてどういふ本質を持ち、どんな構造に於て在つたか、といふやうなことが皆この神話のうちに光明の如く照つてゐます。前にも言つたやうにそこに日本の歴史が始めから規定されてをり、藝術も經濟も法律もみなこの中に統一されてきてゐるのです。

もうひとつ、日本神話には他國と違つたものがあります。それは日本神話が民族的で國家的であるといひましたが、その中核をなすものがありまして、それこそ、即ち日本の皇室であります。だから皇室のそもその御成立御性質を拜祭することは、つまり國家の本質を識ることでありまして、ここにまた日本神話といふものが初めから持つてゐる尊嚴さといふものがあり、外國のそれとは全く類を異にしてゐるところであります。

ギリシヤやローマの神話といふものは、かなり世界的に知られてゐるものであるが、このやうな尊嚴さを始めとしていろいろな唯一絶對な特質といふものを包蔵してをらないのです。

5

ところがどうしたことでありませうか。今まで、われわれのこのやうに立派な神聖な美しい神話が、あまりその價値を認められずにきたことです。われわれ日本人で、神話といふものを研究した學者たちの中でさへ、とかくギリシヤやローマや、またはインドの神話などにばかり目をつけて、それらがほんとの神話らしい神話だと考へてゐたやうな傾きがあつたことは残念でした。

前にもたびたび言つたと思ひますが、われわれの近代文化といふものは、だいたひ西洋から學びつたものがあつたために、しばしば自己の文化や傳統を軽くみたり忘れてゐたといふ嫌ひもあつたので、近代日本の智識や教養あるひとびとが、西洋の古典は讀むけれども、日本の古典はあまり讀まないといふ、一寸、奇妙な現象もありました。さういふ一種の西洋崇拜のところが、やはり日本神話を軽くみたといふ弊を生じたのかも知れません。

さうした自國の神話を軽くみたり考へたりしたといふ意識がまた、とかく日本神話の中の話が多

く、日本に元からあつたものではなく、他の場所から流れ傳はつてきたと考へ勝ちになつたのかも知れません。

たとへば今、皇軍が赫々たる戦果を擧げてゐる南方の島々や民族の間には、日本神話の中の或る話と非常に似た形を持つたものがあります。それ故に、われわれの神話の故郷はたいして南方のものだと、考へてしまふ學者もあるのです。けれどもこの邊のことは人類學の智識を借りて考へなくてはならぬことが多く、且、さういふ民族の移住や混融などといふことは非常に古いことで、おそらく日本の歴史が始まつて記録されて以後の年月より、もつともつと遠い時代のことなので、さう簡単に定めてしまふことはできないでせう。

沖縄縣の島には、ドイツの有名なグリムといふ童話の中にある話と同じ話が、古くから傳へられてゐるさうですが、それも果してどちらが本になるものか遽かに決めることはできません。日本神話と南方の神話との關係も同様だらうと思ひます。日本の古代文化でも、もちろん外國からはいつてきたものもありますが、何でもかでもみな、他の國からの借り物だとしてしまふことがあれば——さういふ自己に對する信念の薄さは、やはり近代以來、われわれが陥つてしまつてゐた妙な自己卑小感であります。今、われわれの民族意識、民族文化にめざめてきた今日では、やはり學問の

研究に於てももつと自主的な考へをしつかり持たねばなりません。

自國の神話を軽くみて外國の神話を重く上位にあるものの如く、學者や神話愛好家の考へ勝ちであつたのを残念だといひましたが、さういふ傾きと共に、また神話全體（外國も日本も含めて）を輕視するといふ、少しく誤まつた考へが教育あるひとびとの間にあるかと思ひます。

それを解りやすく言ひますと、つまり神話などといふものは、古代人の幼稚な勝手な空想から生まれた取るに足らない話だといつて、一笑に附してしまふといふ心持であり、考へであります。それは如何にも、一應、教育を受けた人らしい考へ方のやうに聞えますが、却つて非常に淺薄な俗な考へ方があります。さういふ考へ方はまちがつたものであることを、よくよく反省してみなければなりません。どうしてこれがまちがつた考へ方かといふことは、神話——特に日本の神話といふものの性質について、前に述べたところを考へて頂けたら、大體わかることだらうと思ひます。

もつともかうした神話といふものを、子供だましの話として片附けてしまふといふ心は、あながち一般のひとびとばかりでなく、學者や研究家といはれるひとの中にも、それに近い心持や

考へ方があつたのです。これは外國の學者にも、日本の今までの神話學者の間にもかなり根強く付きまといつてゐました。

つまり神話といふものは、幼稚で單純で素樸な未開人や古代人の、頭や心に形づくられたひとつの觀念が、具體的な形を持つたものと考へ、結局、人類文化の原初的な形、或ひは科學文明の幼い段階に在るもの、といふふうになつて考へたのであります。だから神話といふものが、それ自身ひとつの獨立したはたらきを持つてをり、しかもそれがどこどこまでもわれわれに生き及んでゐるといふことを忘れてゐることになつて、今日からみるならば、そこに大きな過誤を犯してゐることになります。有名なフランスのコントなどといふ學者などは、おそらくかういふ考へをした代表的なひとつたと思ひます。

7

この近年、いろいろなことが私どもの周圍でも、めまぐるしく變りました。世界中が激しく動き變つてゐるからです。動き變つてゐるといふより、いまは全く土煙をあげて渦巻いてゐます。かうした中で、どうして神話なるものも舊態依然としてゐることができませう。否、特にそれは神話な

るがゆゑに、民族や國家の本質や構造と深い關係を持つてゐる神話なるがゆゑに、さういふ世界の情勢と切り離しがたいところから、最も敏感にひびいてゐるのだと言ふべきです。

そこで西洋の神話學者や文化批評家などの間に、今までとは違つた革新的な神話觀が、近年、非常な勢ひで擡頭してきたのです。日本でもさうであります。何と神話に對する研究が活潑になつたことでせう。手近かに言つても、そここに、神話といふ文字がずるぶんと眼につくやうになつたことも、それを物語つてゐると思ひます。

西洋の代表的な新しい神話を言ふひとは、先づソレルやベルトラムやローゼンベルグなどといふのがあります。これらのひとは、おのおの多少とも考への違ふところもありますが、いづれも昔風な、神話を古代人の夢物語としては考へず、やはり自律性を持つた、そして現在に至つても決して滅びない生命を持ちつづけてゐる、民族の精神の郷土だと考へてゐるところでは一致してゐるといふべきでせう。

さういふ考へと立場から、ヨーロッパの學者たちも今日、新しく自分の國の神話をはつきり考へなほして、そこに深は意義と烈しい情熱とを、みつけ出し感じ出したのです。

そして神話が滅びないでそこに在るにしても、ただ客觀的にそこに置かれてあるといふやうな考

へ方でなく、神話が在り、生きてゐるところから、ひとつの力が湧いてくる。その力こそ、われわれが今、かうして日々を生きねばならぬ現實を指導し批判するところのものだ——こんなふうに着てきてゐるのであつて、これは確かに今までの學者の及ばない卓見であるといへるでせう。

就中、いちばんかういふ革新的な考へで貫いてゐるのは、ドイツのローゼンベルグの「二十世紀の神話」といふ書物に示された意見であります。この本は決して、神話のことばかり書いてはありませんが、現在のドイツの神話論の中核をなしてゐるものとみられてをります。

ローゼンベルグはナチ・ドイツの文相であります。革新的な文化批評家であります。その「二十世紀の神話」に漲るところの精神は、古代ギリシヤ的な、そして中世キリスト教的な、今までこがれてきた神話を乗り超え、むしろ、北方アーリアンの古代ゲルマン民族の精神のうちにはぐくまれた、愛と美と名譽のために、その雄大な神話を再びこの現實のただ中に、力をこめて呼び戻さうとするものです。彼はどんなに、北方アーリアン民族がすばらしい優秀性に恵まれてゐるかを、人種の歴史のうへからも説き及んでをります。そしてゲルマン民族の理想や美や意志が、どんなにまた卓越したものであるかを、ギリシヤ藝術などと較べ、それと對立するものとしてゴシック藝術を讚美し（これは少しく脇道へそれるかも知れませんが、先日新聞でドイツのケルンの有名なゴシック

ク建築の寺院が英米軍に依つて爆撃され、無惨にもかなり破壊されたとありましたが、これはわれわれにもかなりの衝撃を受けた事柄ですから、ドイツ人にとつては、この民族の誇りを傷つけられたことはどんなに彼らを憤らせたらうと、深く思ひやつたことでした。ベートーヴェンのエロイカシンフォニーやワグネルの歌劇などに、その正統的なものがあることなどを力説してゐます。

そして彼は血と魂とに依つて古代ゲルマンの神々を敬ひ、その名譽とその自由とを保護し純粹なものとしてゆくことが、ドイツの民族が造つた國家や宗教や法律の與へられた任務である筈だといひます。これがドイツのなすべき偉大な思想であるとし、かういふもののためにドイツの英雄たちが殉じたあつたが、その場所、その時こそ、即ち神聖な場所であり神聖な日なのだとも言ひます。

かやうにゲルマン的なドイツの神話を呼び戻して、新しくこの世界に起ちあがつてゆくその文化的鯨波のひびきは、確かに雄渾な感じがするどわれわれも思ふのです。けれどもまた、どこかに彼らが血と魂を通じて、その主體的なはたらきに依つて、強引に神話を呼びかへさうとしてゐるところに、何か悲しげな痛ましい、とほく離れたふるさとへの思郷のくるほしさといったものが感じられます。それはなぜか。やはり彼らには、その神話と民族と國家と歴史とが全くゆるぎなきものとして、全的な統一體となつてゐないからではないでせうか。

それにひきかへ、われわれの独自の比類なき國家や民族は、あらためてかうしたドイツ的な考へ方を今更したり、また聲をかぎりには叫ばずともいいのです。われわれの國からは、現人神（アキヒトガミ）なる天皇が、天壤無窮といはれる御神勅に従つて、天照大神が「言依さし」給ひし如く御統治なさるところのものであります。神話の神々は、従つて今も祀られるところでもあります。われらが生きてゆくこの日本の現實を、尙も指導する精神も原理もその神話のうちにあるのです。

いまの日本はやはり資本主義の體制にあるではないか、いや全體主義的體制にあるではないか、神話の時代ではないではないか、といふありふれた考へは、まだ深く思ひを潜めたものとはいへません。くりかへして言ふやうに、神話はまだ死なないでからも残存してゐるのではない。今更とりたてて、二十世紀の神話といふやうな、表現形態を考へ出さなくてもすむやうに、それはほんといふこの國の津々浦々に生きてはたらいてゐる。昨日から今日へ、今日から明日へ、そして遠い未來へと、輝やきながら生きてはたらいてゐるのです。

日本の神話は、われわれの街中にも、職場にも、故郷にも生きてゐると言つた。更にそれは大陸の曠野にも、南方の波濤のうへにも、ジャングルの中にも、ただけしい姿となつて生きてゐます。やがてそれは次第に、なごやかなものとして豊かに生きてゆくことでありませう。

萬葉集について

1 萬葉集はいつできたか

御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば

こんな歌をよく聞かれたことがあるでせう。うつくしい風景と、神様の恩の厚い、そして、萬世一系の天皇を戴いてゐる國民の喜びと幸福とを、最も簡単に力強くうたつたこの歌は、すつと昔、海犬養岡麻呂といふ人が、聖武天皇の詔に應じて詠み奉つた、たいへん、名高いものであります。即ち、この天地の榮ゆる實に盛大の御代にわれわれ國民はめぐりあつて、まことに生き甲斐のあることを感ずることだ、といふ意味であります。

さて、それではこの歌は、一體、どういふ本に載つて残つてゐるのでありませうか。

それはほかでもない、實に「萬葉集」といふ本に載つてゐるのであります。これは、マンニョーシューとも以前は讀んだのですが、この頃では、大體、マンヨーシューといふ風に讀むのがよから

うといふことになつてゐるやうです。

この萬葉集といふ、むかしの歌を集めたこの歌集は、あまりにも名高いもので、おそらく誰も知らないひとといふのはないだらうと思ひます。われわれは、この歌集を讀まうと思へば、すぐ讀むことが出来るほど今では廣く行きわたつてをります。がしかし、世間では、この本は古代の歌集であるから、たいへんむづかしいものだといふ風にきめてゐるむきもあるかと思ひますが、實際はさうでもないやうで、ひとから教へられたり説明してある本などをみなくても、少し讀んでみると直接に面白くわかる歌もかなりあると思ひます。

ちよつと考へると、同じ古い昔の本のうちでも、われわれの現代に近いものほど解り易いといふことになりさうで、事實、さういふこともありますが、その原理でいつも通るとはかぎりません。たとへば、鎌倉時代は、萬葉集ができた時代より、現代にずつと近い時代なのですが、その鎌倉時代にできた、やはり有名な「新古今集」といふ歌集がありますが、これなどはおそらく、萬葉集を理解したり味はひたのしむより、もつとむづかしいのではないかと、私などは考へてをります。

それではどうして、そんなに古い昔にできた萬葉集が割に解り易かつたり、おもしろかつたりするのだらうか。全部とはいへなくても、さういふ點もあるのだらうか。

その理由を、假に解り易い例でたとへてみますなら、それは廣々とした海に向ふから立ち昇つてくる朝日のうつくしき、とでも言ひませうか、かういふ風景はどんなひとがみても、ああうつくしいと思ふだらうと考へます。或は土から掘り取つたばかりの芋の味、木からもぎ取つたばかりの柿の實の味——人工的にいろいろ調味などしないで、天然のままの味、さうしたものは誰でもうまいと思ふ筈だと思ひます。前の海の朝日の美などもさうで、これが夜の街中の人工的な照明を用ゐた美などは、必ずしも誰もがうつくしいと思ふとはかぎりません。

さうした巧まないうつくしさ、力強さ、眞實さが、萬葉の歌のうへには出てゐて、それがわれわれに深く感じられるのだ、といへるでありませう。それが實は、ながいこと日本の國民のこころを捉へてきて、今日でも十分、われわれの心を動かすのだと思ひます。

それではかういふ、われわれに親しみ深い、この名高い萬葉集が、一體いつ頃できたのだらうか、といひますと、それは先づ都が奈良にありました時代（つまり元明天皇の御代から 光仁天皇の御代までの七十餘年）のうちで其の中期以後にできたと思へられます。實はかう簡單にいひましても、このことに就いては、學者の間に昔からいろいろと説がありましてむづかしいのですが、そのうちでも聖武天皇の御代と、次の 孝謙天皇の御代にできたらうと、考へるのがかなり有力の説

となつてをります。そしてまた、この歌集が天皇のみことのりに依つて出来上つたものか、それとも誰かひとりの個人が撰び集めたものか、といふことにも、いろいろ説があります。

ただここで一括して申しますと、萬葉集は、全體で二十卷といふ風に分けて集められてありますが、それがいちどにすぐ全部できあがつたのでなく、二十卷のうち或る卷は、比較的早くでき、或る卷は比較的遅くできたといふこともあるのでせう。たとへば、卷一や卷二にある歌は、或は勅に依つて撰んだものであり、卷十六などは大作家持といふ人が、民間にあつた小さい歌集を基にして撰び集めたものらしく、そしてすつかり今日われわれが見る通りの萬葉集ができたのは、奈良時代のほんとの終り、つまり、もう 桓武天皇が都を奈良から京都へお遷しになつて、歴史でいふ平安時代といふ新しい時代が始まるすぐ前の頃かと思ひます。

つまり、今から數へてみますと、萬葉集は大體、千二百年ばかり前の昔にできた歌集だといふことになります。

2 いつ頃の時代の歌を集めてあるか

萬葉集に載つてをる歌は、時代のうへからみますと、 仁徳天皇の御代から 淳仁天皇の御代ま

で大體、四百年間ぐらゐの時期に作られたものを集めてあります。だから、萬葉集とひと口に言つても、こんなに永い間の歌を集めたものであることを先づ知らねばなりません。これだけの永い期間の歌を大體、四千五百首、そしてそのひとりびひとりの作者は、名前がはつきり分つてゐる者が四百五十人以上あるのです。

次にこの約四百年あまりこの時期はどんな時代であつたか。われわれの國家や民族が何をした時代であるか。

かういふことに觸れてみたいと思ひます。特にその時代の人間が精神的になした仕事といふもの、つまり文化といふことを主にして考へてみたいと思ひます。

簡単に言ひますと、われわれの古代の文化といふものは、歴史でいふところの 神功皇后のさかんな御事業であつた、新羅征伐に依つてうちたてられ、それが謂ふところの奈良朝に完成されたといへるでせう。中で儒教や佛教が三韓や支那から輸入されたこと、それにつれてわが國民精神が實にはなばなく高まり、あの有名な大化の改新といはれる非常に意味深い政治上經濟上の大改革が行はれたことなどは、特筆すべき事柄であります。

應仁天皇の朝に百濟から阿直岐、それから王仁などによつて論語や千字文などが齎されました

が、これは單に文字をわれわれの祖先が識つたといふことばかりでなく、その文字を識つて支那の重要な精神文化である儒教といふものの内容に立ち入り、實行のうへばかりでなく、人間の生活に於ける秩序だつた理念といふものを考へる力が作られたことであつて、そこに新しい文化の世界が開けたことを意味するのであります。そしてこの儒教はただ支那のそのままの姿として受取つたのではなく、これが日本固有の神道の思想などを、いよいよ立派なものにするうへに非常に役立つやうであります。その他、染織、養蠶の進んだ技術などが、雄略天皇の御代に這入つてきました。これらが、わが國の生活の内容をどんなに豊かにしたか知れませんが、

それから尙、欽明天皇の時に至りますと、百濟からお釋迦様の像やお經が渡つてきて、それから續いて、所謂、佛教といふものが、いろいろな形でどしどし傳へられてきたのです。これはひとつには、日本古來の、割に原始的であつた神道といふ宗教のうへに、もつと大きな規模を持つた外國の宗教が取り入れられたこと、そして單に宗教が取り入れられたといふことのみでなく、その佛教文化のうちに含まれてゐる、いろいろなかなり程度の高い藝術などが共に移し植ゑられたこととあります。ただ物が渡來したといふばかりでなく、さういふ物を造るところの働きを持つた人間も共にやつてきたのです。即ち、寺を造る職人、佛像を造る人、畫を描く人、音楽をやる人――

さういふひとびとが澤山やつてきました。

日本の美術の歴史のうへで、推古時代といはれるのは（あの聖德太子が政治をお執りになつた時代）非常にすぐれた美術品の作られたときですが、その頃のもののうちには、かういふあらからきた人の作品が實に澤山あるのですし、またその外國からきた音楽家の音楽といふものは、日本の昔の立派な音楽である雅樂といふものを造るのに、たいへん大きな働きをしてゐるのです。

かういふ風にしてだんだんと、國民は、すぐれた實用以上の世界のうつくしさ、この現實以上にもつと深い世界が存在するといふことを考へ覺えていくやうになつたのであります。

かういふだんだん深められ高められてきた立派な文化のうへに立つて、聖德太子といふ方は實に堂々とした政治を行はれたのであります。

そこには、わが國古來の國民精神と、外國の儒教や佛教や藝術などが、實にみごとに統一されて輝いてゐるのです。

そしてそれがやがて 孝德天皇の御代の大化の改新といふ大事業となり、立派な國家としての體制が整へられ、國民の自覺と、その精神のあまねき發揚とは、まことに輝やかしいものとなりました。前に神話のことをお話ししたときに言ひました古事記とか日本書紀、そして風土記などといふわ

れわれ國民にとつて最も尊い古典が作られたのも、その國家や民族のすばらしい高揚の時代の賜物なのであります。

そしてほかならぬこの萬葉集といふものも亦、實にかうした時代のうちから生れてきた世界的なわれわれの古典なのであります。

3 萬葉集の精神

萬葉集といふものは藝術であり、特に文學であります。即ち言葉といふものに依つて現はされてゐるものであります。特に日本の言葉、そしてこの歌集の作られた時代の言葉の性質を深く裏づけで示されてゐることは、勿論です。このことはまた、日本の精神が、それと切り離せない日本の言葉と結びついて現はれてゐると考へられるのです。前にも言ひましたやうに、わが國の文化がたいへんに高まり輝やいた時代の文學でありますから、その時代の國民の精神が實に生きて動いてゐるといへるでありませう。

つまり、日本人のほんとに深く心に感じたことが、ありのままのうつくしきで出てゐるものであります。その力強いもの、さかんなもの、やさしいものが、實にすなほにうたはれてゐるのです。

併し、萬葉集に載つてゐる歌のどれもこれも皆さうしたものである、といふわけではありませんが、後のいろいろな他の歌集の歌などに較べれば、全體としてさういふ傾向は、萬葉集がいちばん著しいことでもあります。

その證據には、男女の間の愛情などをうたつた歌といふものは、戦鬪の有様などをうたつたものより、力強く雄々しくないので普通でありませうが、萬葉にみえる女性のさういふ歌でさへ、實に力強い烈しいものであります。たとへば茅上娘ちのかみのむすめ子といふ女性の、

歸りける人來れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて

などといふ歌は、「罪を赦されて歸つた人が來た。と或る人が言ひましたので、私は貴方のお歸りかと思つて、あまりのうれしさに全く死にさうでした」といふので、かなり烈しい自分の感情を出してゐます。また、彼ら萬葉の歌人たちが、山や川や野や太陽や月や鳥や花をみてうたつた歌も、實に深いやさしい愛情を以て感動をこめてなされてゐるのを感じます。かうしたこれらの歌人の態度といふものは、永くこの國の詩人、歌人、俳人たちの間に傳はつていつたのであります。

われわれ日本人が自然を愛するところが深いといひますが、その事は既にこの頃の歌人の作品の

うへに強く現はれてゐるのです。

少しく、かうした優しい方面のことをいひましたが、概していふと、萬葉集には、強く勇しい、そしてさかんな心持をうたつたものが多いことは確かであります。所謂、肇國の精神や國家の精神をうたひ、天皇の仰せをかしこみて邊土に出かけて行く防人などといふ若人の雄々しいところをうたつたものが多いのです。つまり「ますらをぶり」と言はれるものであつて、これがやがては、古事記や日本書紀に現はれた國民的自覺、國家的理想などと深い關係を持つてゐると思ひます。また後世の吉野朝時代の天皇の御製や、江戸時代の勤皇の志士たちの歌に盛られたものとも、切り離しがたい命脈があるのでせう。

かういふものが、萬葉集に於ては、その獨特な性質となり、そこにまたわれわれ國民のうへにも今も強く訴へてくる力となつて生きてゐるのでありませう。それは亦、われわれ日本の國民の胸にひびき訴へるばかりでなく、外國のひとびとにまでも訴へて行く力を持つてゐると思ひます。外國のひとかこの日本の萬葉集を研究すればするほど、これが傑れた文學作品だといふことを深く覺つて行つてゐるのです。即ち、萬葉集は、あくまでも日本的であることに依つて、世界的となるのであります。歴史的に地理的に、ほかの言葉でいへば、時間的であると共に空間的にも永遠の生命と

價值とを持つてゐるのです。そのことは、丁度、われわれが日本人として生きることによつて、世界人として生きることになることと、同じやうな關係にあるのでありませう。

4 萬葉集の歌のうつりかはり

まへに萬葉集がどういふ時代にできたか、といふことを述べましたが、こんどは、萬葉集といつても、四百年あまりの夥しい歌を集めたものである以上、そこに時間のうへで、いろいろ變化があるので、それに就いて簡単に申します。

萬葉集時代といふものを考へるうへで、便宜上、學者たちは、いろいろ、いくつにか時代を分けて考へてをります。

いまここでは割に普通の分け方に従つて、假に四つに區分してみます。即ち、第一期といふのは舒明天皇から 天武天皇までの時期、第二期は大和の國の藤原といふところに都の在つたときで、持統、文武御兩帝の時代であり、第三期は奈良に都を遷された、所謂、元明天皇、元正天皇から 聖武天皇に至るときをいひ、第四期はそれから 孝謙天皇を経て奈良朝の終りに至るときであります。

かういふ風に四つの時期に分けて考へてみると、先づその最初の第一期といふのは、ただ普通の歌謡として歌がうたはれてゐたのが、だんだん書き記される歌と變つて行つて、普通われわれが、今日、歌といつてゐるやうなものが完全にできあがつた時代です。つまり、古事記や日本書紀の中に、やはり歌が載つてゐますが、それが口で歌はれたものらしいのですが、それから變化して行つた時期だといふことなのです。

この時期の歌に、貴方がたが歴史でよく知つてをられる藤原鎌足といふ人の有名な歌があります。それをごらん下さい。

われはもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり(卷二)

(大意) ああ私は安見兒を自分のものとしたのだ。誰でもがとても自分のものにできにくいといふこの安見兒といふ女を自分のものとしたのだ。

この歌には、全く子供のやうに喜んでゐる、あの政治家、鎌足の心が實に率直にうたはれてゐます。この歌でも分るやうに、この時期のうたは概して、こんなありのままの感動をそのままうた

つた歌が多いのです。

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ(卷十三)

(大意) 私がもし馬を買つて乗れば、妻は歩いて行かねばならない。ええまよ。たとへ石のうへを踏んでもかまはない。私は二人で仲よく歩いて行くことにしよう。

この歌も、かういふ愛情をいろいろ複雑にうたはらないで、自然のままにその感情を示してゐるの

で、形を整へたり、深い思想を現はすなどといふことはあまりしてゐないのが特色です。この時期を経て、歌は素朴な民謡風なものから、個性がややつきりしてくる藝術的なものへと進んで行くのです。即ち、第二期の歌ですが、たとへば 持統天皇の御製

春過ぎて夏來たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山(卷一)

(大意) もういつか春も過ぎ夏が來たやうだ。ここから眺めると民家にはしろじろとした夏の着物を天の香具山の麓のところに干し並べてゐることだ。

この時期には 天智天皇の皇子、志貴皇子や 天武天皇の皇子、大津皇子などの如く、すぐれた御歌を詠まれた方々がありますが、臣下として柿本人麻呂は、この時代を代表する大歌人として知られてゐるのであります。

人麻呂の歌人としての特徴はどういふ所にあるかといふと、彼は宮廷詩人といはれるほど、至尊のお側近く仕へて、或る時は天皇の崩御をかなしみ奉り、また或る時は、天皇の行幸にお供して皇室の御榮えをうたひました。

そしてそこに従來の歌人のうたはなかつた、日本的な神の思想や、民族的な國家思想などと結びつけて現はしてゐるのです。さういふものが實にたぎり落ちるやうな情熱を含んで雄大に表現されてゐます。つまり今までの歌人がうたはなかつたことを、ひとつの國民的思想のうへに立つてうたつてゐるといふことは新しさを示したことになります。

彼の作品は、さういふ風に題材が新しくなつたので、その用ゐた言葉や、歌の調子などにも亦、新しさが出てをります。特に、長歌といはれる歌(三十一文字の短歌に對していふ)に於て、うつくしい序詞(たとへば長いといふことをいふときに、足曳きの山鳥の尾のしだり尾のなどと附ける

語)とか、枕詞(奈良といふときに青丹よしなどと附ける語)を、まことに巧みに使ひこなしたり、音調の技巧や對になつてゐる言葉などをあざやかに用ひてゐて、さういふ點で、この長歌は人麻呂に依つて最も完成された所に達したといへるでせう。

かういふ人麻呂の特質は亦、實にこの時期の大體の歌の特質となつてゐるのです。そのひとつの例として、彼の長歌を一首あげておきませう。

過 近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

たまただすぎ 叡火の山の 榎原の 日和の御世ゆ あれましし 神のことごと 櫻の木の
いやつぎつぎに 天の下 知しめししを そらにみつ 大和をおきて 青丹よし 奈良山を
越え いかさまに 思ほしめせか 天さかる 鄙にはあれど いははしの 近江の國の さ
ざなみの 大津の宮に 天の下 知しめしけむ すめろぎの 神のみことの 大宮は ここ
と聞けども 大殿は ことといへども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる も
もしきの 大宮處 見れば悲しも

(大意) 叡火の山のほとりの榎原の宮で、この天下を治められた神武天皇以來、お生れになつた御
萬葉集について

歴代の次ぎ次ぎと大和の國に都をお置きになり、天下の政を御とりになつたのだが、どういふお考へがおありになつたことか、我々にははかりかねることであるが、その大和を後にして奈良山を越え、程遠い田舎ではあるが近江の大津を最もよい處として都をそこに定められ、そして天下を統治され給うた御所は、ここだと聞いてゐるが、またその御殿の在つたのはここだと人は言ふけれど、あたり一面に春の草が茂りわたつてゐて、その跡もなく、霞こめた春の日もただぼうとかすんでゐるだけで、人の影さへ見えぬこの御所のあとをみると、どうにも悲しさに堪へられないのである。

それから次の第三期は、山部赤人、大伴旅人、山上憶良などといふ歌人たちに依つて代表されるときです。赤人は先づ天地自然のうつくしさをうたつた歌人として名高いのであります。

春の野に堇採みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける（卷八）

（大意） 春の野に堇の花をつみにとやつてきた私なのだが、あまりの春の野のなつかしさに一夜をとうとうそこで明かし宿つたことだ。

昔者の舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり（卷三）

（大意） 昔の古い池の堤は年がたつたために、池のほとりには水草が生えて、すっかりと荒れてしまつたことだ。

などといふ、やさしい愛情が、野原に、花に、池に、水草にと注がれてゐるのが解るでせう。

大伴の旅人は、この人間の生活といふものを考へ味はひ、そこにあはれさ、悲しさ、はかなさを見出し、それを支那の老莊の思想の影響を受けて、かういふ人間の世をせめてたのしむうとしてゐる態度がみられます。だから、酒を飲むことに依つて、この世を楽しもうとする心を示した歌などが多くあります。

験なき物を思はずば一杯の濁れる酒を飲むべくあらし（卷三）

（大意） 何のたしにもならぬつまらぬ物思ひなどしないで、むしろ一杯の濁つた酒を飲んで憂さ晴らしをした方がいいでせう。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（卷五）

（大意） この世の中といふものは、はかないものだといふことをさつた時にこそほんとに妻の死
萬葉集について

は一層かなしい思ひのするものであつた。

併し、憶良は同じやうに人間の生活を考へましたが、貧乏や病苦や老衰などといふものが一杯満ちてゐる、この世界に眞面目な熱い愛情を示し乍ら、しつかりと地上の人間生活を寫實的にうたつてゐるところに特色があります。また、自分の子供や家族に對する愛をうたつた作品にも名高いものがあります。

感情を反さしむる歌

父母を見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中は 斯くぞ道理 藪島の 拘泥しも
よ 行方知らねば 穿沓を 脱ぎ棄る如く 踏み脱ぎぎて 行くちふ人は 石木より 成り
てし人か 汝が名告らさぬ 天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大王います この照ら
す 日月の下は 天雲の 向伏す極 谷蟻の さ渡る極 聞し食す 國のまほらぞ 彼に此
に 欲しきまにまに 然にはあらじか (卷五)

(大意) 父母を見ると尊く有難いと思ひ、妻子をみるといとしいと感じるが、世の中といふものが

これが普通のことである。それを振り棄てて行くべき方も知らないで、まるでちにかかつた鳥が飛んで行けなくて困つてゐるやうに、それにかかはつてゐるのだ。それだのに丸で破れた靴を棄てるみたいに、妻子を捨てて行くといふ人は、一體、岩や木から生れた人なのか。名を名乗つてみよ。もし天へでも昇つたら、君の思ふ通りにもなるだらうがいやくもこの地上には、大君がをられることだ。この照らしてゐる日月の下では、遠い空の雲がたれてゐる果てまで、またガマが這ひ廻る地の果てまで、すつかり、大君が治めてをられるすばらしい立派な國なのだ。とにもかくにも、さうさう君の思ふ通りにあつてはならぬことではないか。

また、これはよくラジオなどでこの頃うたはれてゐますので御存知でせうが、

士そのこやも空ひらしかるべき萬代よろづよに語り續つぐべき名は立てずして (卷六)

(大意) 男子たるものが、萬代までも語り傳へられるやうな名を立てないで空しく死んでしまつてなるものか。

といふのは、この憶良が病床に臥してゐるとき涙を流して作つた歌であります。

そして第四期に入りますが、この期には大伴家持といふひとがあります。併し、この頃になると、萬葉集の歌は、すつかり行くところまで行つた感じで、別に新しい傾向もみえず、今迄達したものがただ熟し切つてゐるといふ感じであります。この期を代表する家持といふ人は、有名な大伴家といふ名家の出で、さまざまな境遇を経た人ですが、自分の一族が衰運に傾いてゐるところから、いかにも貴公子らしい感傷を以て、ほそぼそとうたつてゐるところが目立ちます。新しく開ける未來を夢み望む心より、過ぎし日はなやかさを追慕するといふやうな寂しいものが多くあるのです。

今よりは秋風寒く吹きなむをいかでかひとり長き夜を寝む（卷三）

（大意） これからは秋風が寒く吹くことだらうが、一體どうしてその寒くさびしい秋の長夜をひとり寝られようか。

うづら鳴く古りにし里のおもへども何とと妹に逢ふよしもなき（卷四）

（大意） 私は舊都の奈良にゐるときから貴方のことを思つてゐたのだが、この新しい都にやつてきてもまだ、貴方に逢へないのだらうか。

の如き作品に、いかにさうした傾向がみえてゐることとせうか。

かうして萬葉集は、とうとうたいへんにその質朴さを失ひ、うつくしいけれど力が弱いものになつて、何とか新しい面を切り開かねばならなくなつて行つたのであります。

尙、最後に附け足してせひ述べなければならぬと思ひますのは、萬葉の中にある「防人の歌」であります。その歌は、「卷二十」に載つてゐるのですが、前に言つた大伴家持が兵部少輔といふ兵部省（今日でいへば陸軍省）の役人であつたときに、筑紫の防備兵として澤山の壯丁が派遣されました。それを防人といふのですが、これらの青年はその故郷を離れるときに、榮ある國民としての覺悟を、また人情を歌に現はしましたが、この心こそ、われわれ日本人の心として今も尙、持ちつづけてゐるものでありませう。聖戦完遂のため、勇躍、征途に赴くわが勇士の心でありませう。即ち、そのひとつふたつを拾つてみますと、

大君のみことかしこみ青雲の棚引く山を越えて來ぬかも（小長部笠麻呂）

（大意） わが大君の御命令をおそれかしこみ受け、青雲の棚引く山を越えて私は、はるばるときたことである。

古典のはなし

一六〇

父母が頭かきなでさくあれて言ひしことはぞ忘れかねつる（丈部稻麿）

（大意） 旅に出るときに父母が、自分の頭をかき撫でて、しあはせであるやうにと言つた言葉は忘
れられないことだ。

前の歌は、やはり非常に有名な歌ですから御承知でせう。後の歌は、故郷を立ち去るときのこと
を思ひ出して作つたもので、「さくあれて」といふのは、「しあはせであるやうにと」の意味です。
これら防人は、主として關東地方から派遣されたのですが、古來、武勇の譽が關東人は高かつたか
らだと思ひます。

前にも申しましたやうに、父母や妻子と別れを惜しむ心や、故郷の風景をなつかしむ氣持なども
歌に作られてゐますが、やはり、天皇の御召しに預つて非常な覺悟を持つて出立する日本人らしい
精神が、いちばん、全體に貫き流れてゐます。つまり、

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出で立つわれは（今奉部與會布）

（大意） 今日より後は、家をも身をもかへりみず、大君の物の數ならぬ御楯として防人となり、私

は出かけて行くのだ。

といふのが防人の歌の根本の精神です。

まだお話ししたいこともあります、ひと先づこのくらゐにして、あとは皆さんが自分で萬葉集を
読んでごらんになることをおすすめいたします。

源氏物語について

源氏物語は今から大體、千年もむかしに作られ、それからずっと續いて文學を識るひとびとの間に讀まれてきた、この日本の寶ともすべき立派な古典なのであります。日本の立派な古典であることは、つまり廣い世界のうへから考へても、同じやうに立派な古典であります。

この源氏物語といふ本の名前をいづれどこかで聞かれたことがあるでせう。中には、少しでもこの本を讀まれた方も或はあるかも知れませんが、これは現代の人には讀みにくい千年前の古い言葉でかかれてありますから、おそらくこれをすつと讀まれたといふ方は極く少いのだらうと思ひます。千年もむかしといひますと、西洋の古典として世界的に有名なダンテといふ人がかいた「神曲」などといふものより三百年も早く、またやはり、貴方がたがおそらく聞かれたことのある筈であるシェークスピアなどがかいた「ハムレット」とか「オセロ」などといふものより六百年餘も、この源氏物語は前にかかれてゐるのであります。西洋人は、「神曲」やシェークスピアの名を早くから知つては

ゐましたが、日本に源氏物語といふ大作があることなど、つひ近頃まで一般には知らなかつたといつていいのです。

源氏物語は、いまでいへば立派な小説といへるでありませう。全然この本のことを知らない人に申しますが、これはあの「源氏」とか「平家」とかいふ、その「源氏」ではないので「源氏の君」といふこの小説の主人公の名から取つた名前です。丁度いま申した「ハムレット」といふのが、やはり「ハムレット」といふ昔のデンマークといふ國の王子の名前から取つた話でありますやうに。そしてこのことも或は、御承知かとも思ひますが、源氏物語は「紫式部むらさきしきぶ」といふ一人のすぐれた女性の文學者がひとりで作つたものなのです。

このことはいづれ後にお話したいと思ひますが、これは立派な日本の古典でありまして、昔から讀まれたり、また多くの學者に依つて研究されたりしてききましたが、源氏物語の中にかいてある話の性質から、とかく問題になつたり誤つて讀まれたりしてきたといふことがあるのです。

それで前にお話したやうな「古事記」とか「萬葉集」などは、日本の國民精神をあらはした立派な古典と考へ認める人でも、源氏物語はどうもさうは言へないなどと考へる人があるやうです。併し、それは少しく間違つた考へ方ではないかと思ひます。

既に「萬葉集」のところで申しましたやうに、あの歌集の中には皇室の尊さ有難さをうたつた歌もありましたが、また夫を思ひ妻を愛し旅のさびしさをうたふといふやうな、やさしい弱々しいと思はれる歌もありました。またそれと反対に防人の歌のやうに勇躍して征途に着く勇しいところをうたつたものもありました。かういふ風に、いろいろなものをうたふところに、日本の國民精神の大きさ、深さ、といふものがみられるのですが、全體として、「古事記」や「萬葉集」が雄大で立派な日本精神の現はれたものなら、この源氏物語は、やさしくうつくしいあはれ深い、日本精神の現はれたものと考へることができるでせう。

さういふ、やさしいうつくしいあはれ深い一面があつて、雄大な勇しい他の面はいよいよ輝くのであり、また雄大な勇しいところがあるために、やさしくうつくしくあはれ深いところが餘計に意味を持つてくるのではないでせうか。

すべて物に對する寛い大きさといふものが日本精神のすぐれた特徴なのです。かう考へると、源氏物語などに現はれた日本の國民精神を、何か餘計なものなどと考へることは、まだほんとおのれの大きさ立派さに気がつかないでゐることとせう。かうした勇しい面と、やさしい面とがひとつになり、それがかずかずの立派な話を、今日でもわれわれ日本の勇士

が戦場で作つてゐることなどは、日本の國民精神のいろいろの面が現はれたものと考へることができません。

そこでこの源氏物語は、それほど立派な日本の古典でありますために、既に外國にまで聞えてをりまして、英語などに翻譯されてをりますし、イギリスのケンブリッジ大學などに、日本人が入學するときに、この源氏物語の中から試験問題が出たりすることがあるさうです。また近頃、比島で捕へた俘虜でアメリカに行つて勉強した者から、日本の將校が源氏物語の中のことについて、かなりこまかい質問などされたといふことも聞きましたが、彼ら外國人はやはり、日本や日本の文化を研究するのに、この源氏物語は大切なものだといふことを十分識つてゐるのでありませう。

さういふ外國にまで識れわたつてゐるこの國の立派な古典を、自國のわれわれが大切にしないでゐるといふことは、あつてはならぬことだと思ひます。

そこで今、その源氏物語について、ひと通りのことをここに述べたいと思ひます。

1 源氏物語のかかれた時代

桓武天皇が都を奈良から京都へお遷しになつてから、頼朝が鎌倉に幕府を開いて武家政治といふ

のを始めるまでの間を、普通に平安時代と言つてをります。

平安時代は、政治上の権力者から言ひますと、藤原氏の勢力が非常に大きかつた時代で、ひとつには「藤原時代」などとも言はれるくらゐです。つまり例の藤原鎌足の子孫が段々勢ひを得て、つひには皇室の外戚としてその權を専らにし、道長や頼通のときには、その極點に達したといはれてゐるのは、國民學校で日本の歴史を學ばれた通りであります。

それでこの源氏物語がかかれた時代は、實にこの平安時代の全體、中頃——つまり道長が生きて「この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」などと、歌を詠んだ頃であると思ひます。何年何月からかき出して何年何月にかき終へた、などといふ詳しいことはわかりませんが、全體、この頃に少くとも數年以上永い年月をかけてかいたものと考へられます。

この物語の作者は女性でありますが、この平安時代は他の時代と違つて、かゝいふ文學の方面に女性がすばらしく進出したときでして、全く女性文學の時代といつても差支へないのです。

なぜこの時代は、そんなに女性が文學方面へ進出し、すぐれた物をたくさんかくやうになつたかといひますと、そこには少からず政治のうへの事情が加はつてゐるのです。

藤原氏といふ貴族が、例の不比等以來、特におのれの女子を宮廷へ夫人や女御や中宮として入れ

奉つて、外戚としての地位を確保したといひましたが、さうするためには女子といふものはまことに大切なものとなりました。自分に女子が無いときは、他から養女として迎へて、それを奉らねばならなかつたほどであります。かういふ具合にして宮廷に奉つた女御や中宮様には、それに御仕へする多くの女房(侍女)が必要なのであります。それもできるだけうつくしく、才能や學問のある者でなければなりません。さういふ女性がお附きすることに依つて、女御や中宮様は一層、輝やかなしい存在となるわけがあります。だから、次第に宮廷には才能に秀で、學問の深い女性たちが集つて行くことになりました。

かういふ事情がありましたので、この時代の女性は宮廷を中心として文學をはなばなく作り出す機會に非常にめぐまれたのであります。

それともうひとつ、支那から文學が我が國にはいつてきましたが、それは元來、外國の文字で、われわれの心持や考へを書き現はすにとかく不便でありましたが、男性たちはその文字を使つてかいてゐました。然しこの漢字をできるだけ簡單な形にして、然も音を現はす文字といふ性質を持つた假名といふものを日本人は考へ出しました。これはたしかにすばらしい日本の新しい發明でありました。これはそして、日本の文化を推し進めるのに非常な力となつたものです。かういふものが

できたのに、男性はやはり漢字を使はないと威厳にかかはるやうに考へたらしく、假名を使ふことを進んでやらなかつたのですが、女性はさういふことを少しも頓着せず、これをどしどし用ゐはじめました。これは女性にとつては幸福でありましたし、賢明な方法でした。そして自由に自分の心持や考へ——つまりは日本人的なものをどしどしかき現はすことを習得し、やがては男性もかなはないやうな立派なみごとな文學を作るといふ歴史的事業までもなしとげたのであります。

かういふ事情でありました日本の文化の歴史のうへの輝やかしい時代の中に、いつまでも後世に光りを放つ日本古典の巨峰とされる源氏物語は、多くの才媛のうちでも特に選ばれたやうなひとりの女性に依つて作り出されたのであります。

2 作者のこと

源氏物語は、紫式部といふ平安時代の女流文學者がひとりでかいたものであると思ひます。ひとに依つては、紫式部ばかりでなく、他のひとが書き足してゐるだらう、と考へる者もありますが、これは前にも言ひましたやうに、數年、或は十數年ぐらゐるかかつて書いたものらしいので、終りの方は、始めの方と少し違つた文章のやうに感じられたりするところから、別の人がかいたのだらう

などと考へるのだと思ひますが、同じ人でも年月をへれば、違つた人の文章のやうにみえるところもありうると思ふのです。それで私はやはり同じひとりの作者がしまひまでかき通したものだと思へてゐるのであります。

それでこの作者のことではありますが、紫式部ともいふのは本名ではありません。藤式部ともいはれてゐましたが、これも本名ではなく、たださう宮廷の中で呼ばれてゐたのでして、本名はしかとはわからないのです。

大體、この頃の人といふのは、何しろ千年も前のことなので、どういふ素性の人かといふことはつきりとはわからないのが多いのです。この作者も亦そのひとりなのであります。詳しいことはわかりません。

ただあの藤原氏の、特に藤原冬嗣の子孫といふ名門の出だといふことはわかつてをります。そして、その父も母も、兄も伯父もみな文學的な才能を持つてゐたのであります。二十歳を過ぎた頃紫式部は藤原宣孝といふ人の妻になりました。そしてやがて大貳三位といふ娘を生みました。

併し、間もなくその夫と死に別れました。そして數年の後、一條天皇の中宮彰子（上東門院とも申しあげる）といふ方に奉仕して學問を御教へしたりしました。そして主上や中宮や、また時の

すばらしい権力者でありました道長などからも、その學才を認められて、かなり幸福な生活を送つたやうでありまして、この頃のことは彼女のかき残した「日記」のうちにかき記されてあります。そして、一條天皇がお崩れになつてからは、中宮様に従つてやはり暮しましたが、それから後、四十歳を越えるか越えないぐらゐの年輩でこの世を去つたらしいのであります。

こんな極くざつとしたことしか、この作者に就いてはわからないのですが、源氏物語は夫と死に別れてから永い年月をかけて、かきあげたものらしいので、それもたてつづけにかいたか、ときどきかきやめるやうにして又かいたかは、しかとはわかりません。併し、一條天皇がその御位に在られた頃、既に一部分がかかれてあつて、それを帝が人にお讀ませになつたなどといふことを、自分で日記に記してゐます。

それでこの紫式部といふ人の人柄はどうであつたかといひますと、自分では兄が父親から「史記」といふ本を習つてゐるのを側で聞いてゐて覚えてしまつたとか、すばらしい學才に富んでゐながら、全く何も知らないやうな顔をしてゐたなどと、かいてゐますが、事實さういふ點があつた人らしく、その點、何でも言ひたいことは言ひ、知つてゐることは言はずば言つた、あのやはり平安時代文學として名高い「枕の草子」といふものをかいた清少納言などといふ人とは、正反對の性質

のやうであります。とにかく深い考へのある、何でもさうすぐ外に出さないで奥にしまつておく一見慎しみ深い人でありましたから、このやうに非常に長い物語などを、丹念にかくことができたのでありませう。殊にただ長いといふばかりでなく、その中には、深く物を観るすばらしい心の働きがみえてゐるものでありまして、ちよつとぐらゐの小懶好などで、かういふものをかきあげるなどといふことは決してできないのであります。

3 どんなことが書いてあるか

議論をしばらく止めて、次の文章を先づ讀んでごらん下さい。少しむづかしいやうですが、何度も何度も讀み返してゆくとだんだん馴れていくと思ひます。これは源氏のいちばん始めの書き出しの文章です。

「いづれの御時おはんときにか、女御にまご、更衣かぎいあまた侍さむらひひ給ひける中に、いとやんごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初めより、我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに、貶おとししめそねみ給ふ。同じ程、それより下げ藤ふじの更衣かぎい達はまして安やすからず、朝夕の宮仕へにつけて

も、人の心を動かし恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にもかかる事の起りにこそ、世も亂れ悪しかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう、人の持て惱みぐきになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへのたくひなきを頼みにて交らひ給ふ。」

(現代語譯) いつの御代のことでありましたか、女御や更衣が澤山、帝に御仕へしてをりました中に、あまり貴い身分ではありませんが、特別に帝の御覚えのめでたい方がありました。何しろ始めから、もう自分こそ偉い者だとひとり考へてをられる御きさきばかりなので、斯様に思ひもよらぬ相手が現はれると面白くなく、何れも心外なことから、悪口を言つたり、ねたんだりなさらぬひとはあゆみませんでした。ましてこのお方と同じ位の身分の更衣や、もつと低い人たちの心は一層おだやかではありません。かうして朝夕の官仕をして行くにつけ、他の女たちの氣ばかりもませ、人の恨みを背負つたのがだんだんもつたためか、いつかたいへん病氣

がちになり、頼りない淋しい有様で、とかく療養のおひまを頂いては實家に歸つてゐるのを、帝はそれがかへつて、ひどく氣の毒な者だと一層御寵愛が増し、もう誰が何といつても關はず、ひたすらな御心で、やがては世間の噂ばなしにもなりさうなぐあひであります。大臣から殿上人までも、うとましく目をそむけ、まぶしくて見られぬといふほどの御寵愛のなさりやうです。しまひには、「支那でも、こんなことが原因で、世の動亂が起つたりしたものです。」などと、國の中の人までが心配の種になつてきまして、あの玄宗皇帝に愛された楊貴妃の例さへ、引き合ひに出しさうな有様なので、この更衣にとつては辛い目に逢ふのもたびたびであるが、ただ帝の有難い御なさけの、たとへやうもないのを、ただ頼みとして、他の女たちとのつきあひをどうかしつづけて官仕へをしてゐるのであります。

かうした更衣は、やがて玉のやうな皇子をお生みになりました。これがやがてこの物語の主人公の源氏の君となるのでありますが、更衣はその後、だんだん病氣が重くなつてお亡くなりになりました。その後の帝のお悲しみ、おさびしさはまことに深いものであります。更衣なき後に、更衣の母がひとり生き残つてゐる邸へ勅使をお出しになるところは、非常にうつくしい文章として名高

いものであります。それを少しく出しておみせします。

「野分^{のわき}だちて、俄に肌寒き夕暮のほど、常よりも思^{おも}し出づること多くて、靱負^{ひげひ}の命婦^{みづらふ}といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心殊なる物の音をかき鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も人よりは異なりしけはひ容貌^{かたち}の、面影につと添ひて思さるるも闇のうつつにはなほ劣りけり。命婦、彼處^{かた}にまかんで着きて、門^{かど}引き入るるよりけはひ哀れなり。寡婦^{かたが}住みなれど人ひとり御かしづきにとかくつくるひ立てて、めやすき程にとすぐし給ひつるを、闇に暮れて伏し沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎^{やえむら}にもさはらずさし入りたる。

南^{みなみ} 面^{おもて}におろして、母君とみにえ物も宣^{のたま}はす。「今まで留まり侍るがいとうきを、かかる御使の、蓬生^{よもぎ}の露分け入り給ふにつけても、恥かしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。」

(現代語譯) 秋のはじめの荒々しい野分の風が吹きそめて、急に肌に冷え冷えとする夕方のこ

とでありました。いつもより何かとしきりに亡き更衣(御息所)のことが思はれて、帝は靱負の命婦といふ女官をお使ひに立て更衣の實家へお遣しになりました。夕月が出てあたりの景色もおもむき深い宵の頃官中を出しておやりになつた後で、帝はただぼんやりとさびしげに空の様子などを眺めていらつしやいました。こんな夕月夜の頃には、よく音楽の催しなどなされたのであつたが、さういふ時にかの亡き更衣は誰よりも殊にすばらしい琴の音などお聞かせしたり、ふと口に出す言葉などもやはり他の人とは違つてをりました。さうしたなつかしい姿が今も尙、ありありと目先にちらつかれて離れないのです。はつきりと見る夢にいくらもまさりはせぬといふ「闇の中のはつきりしたこと」より何といつても頼りないものでした。

やがて更衣の邸へ着いた命婦は、門の中へ車を引き入れてはいるともう、あたりの様子が何となくあはれな感じがするのです。やもめ暮しではありますが、娘ひとり人を並に育てあげるとて、どうにか手を入れて、さう見苦しくもないやうにして暮してきましたのですが、娘に急に死なれてしまつて心の闇に泣きくられて沈んでばかりをられるうちに、いつか庭の草も茫々と高くのび、それが野分の風に荒れてしまつた形で、ただ月影ばかりが茂つた草にもかまはず流れ入るだけなのであります。

南向きの正面の座敷へ車から降りた命婦を通して、母君はしばらく言葉もなくだまつてをります。そして言ひますのには「今までひとり生きながらへてをりますのが、自分でもほんとに辛いことだと存じますのに、かうして有難い御使ひが、草深い露を分けてお訊ね下さると思ひますと、おめにかかれぬほど恥づかしうございます。」と言つては、ほんとに、どうにもしよ
うがないやうに泣きくづれるのであります。

こんなふうな文章でかいてあります。

これは最初の「桐壺」といふ巻のうちにあるのです。

大體、源氏物語は全部で五十四帖（五十四巻）といふ大部のものでありまして、その巻々にはみな、「帚木」とか、「空蟬」とか「夕顔」とか、ひとつひとつの優美な名が附いてゐるのであります。そしてこの物語にかかれてゐる年代は、八十餘年といふ永い間のことで、天皇も四代にわたつていらつしやいます。主人公は先づ源氏の君と薫の君との二代に及び、物語にあらはれる人物も老若男女およそ四百人以上に及び、それらがみな、親子兄妹、夫婦、主従など、その関係も非常に複雑であります。

源氏の君は桐壺の帝の第二皇子として生まれたのですが、非常な美貌と才能とにめぐまれ、五十

四帖のうち四十一帖までは、この源氏の君を中心として社會的にも個人的にも、はなやかな生活を描いてをります。大體、この源氏といふのは、皇族が臣下に降られるときに賜はる姓なのであります。そして源氏の君は正妻の葵の上といふ人の兄の頭中將とは親しい友人のやうな関係もあり、また、競争相手でもありまして、青年時代でも三十歳を越えるまでは何かと心の落ちつくところもなく空蟬、夕顔、末摘花、六條御息所、朧月夜、紫、上、藤壺、明石上などといふ女性たちと、悲しく哀れな、また不氣味なそして稀には可笑しな戀愛などもありました。

また四十一帖の次の三帖は、薫の君といふ第二の主人公の生立ちをかき、最後の十帖は、宇治十帖といはれる巻々でありまして、源氏の君の弟の、宇治八宮が住まはれたうつくしい宇治の山莊をおもな舞臺としてかかれてゐるのでかう呼ばれるのであります。

もともと源氏は幼い時に母を失いましたので、母を慕ふ心はひとしほ深かつたのでしたが、亡き母にそつくりだといはれる、繼母に當る藤壺に思ひをかけ、その方に皇子を生ませたことは、どんなに感情のうへで止むをえぬものがあつたにせよ、宥されぬ過失であつたのであります。その罪の報いとして、晩年におのれの妻として賜つた女三宮と、柏木とが關係することに依つて、この薫の君といふ人が生まれるのですが、従つて、この人は、表面は源氏の君の子であり乍ら、實はさう

ではないといふ暗い運命のもとに生をうけたひとであります。薫の暗い性格は、さういふところにも根ざしてゐるのであります。この話は、源氏物語がたいへん不倫なことをかいてあるやうで、昔から問題になるところですが、作者は決して、こんなことを良いことだなどと考へてゐたのではなく、その罪のいかに深いかといふことを、よくよく考へてゐたので、源氏の君の晩年にその報いを強く與へてゐることに依つてもわかるのでありませう。

源氏の君は、かくして病弱と、さういふおもしろからぬ事柄のために、ますます此の世の淋しさ頼りなさを深く感ずるやうになり、そのうち此の世をさびしく去つて行くのであります。

薫の君も、生まれ出たときのことからもあり、いかにも寂しい人で、佛道に専念して、この世の戀愛などといふことには心も動かないのであります。この時代の風潮のために、何かと戀愛事件なども起りましたが、それも悲しく暗いことばかりで、失意の生活を送るのであります。

こんな風で、源氏物語は、主として貴族時代の宮廷を中心にした物語であります。文化といふものが、宮廷中心で貴族中心であつた時代の産物ですから、かうなるのは自然であります。そして彼ら貴族の生活が、生産や労働から離れて、ただ都會の中に在つて、文化を作り、その文化を楽しむといふやうな生活をしてゐたのですから、どうしても精神的に、深くこまかく優美にだけなつて

行つたのであります。つまり、人情のこまやかさといふことが特に大切なものとして考へられたのであります。時代に依り文學などといふものは、強い心の力を特に現はしたり、實行的な英雄的なものを重んじたり、いろ／＼な形をとりますが、この平安時代といふのは、最も優美な深い人情の世界を文學に現はした時代なのであります。

ですから源氏物語は、さういふ點から人生といふものを深く考へ、人間の心のいろいろな動きを寫し、しばしば美しい自然界の有様などを加へて、日本的な人間の考へや感情、日本的な自然の姿といふものを丹念にかきあらはしてゐるのです。

さういふ點から考へても、この作品は、非常に日本的なものであります。日本の文化は大昔から宮廷を中心として傳へられてきましたから、さういふものの本流として、この作品は考へられていのであります。源氏の君の如き人物は決して妙なことばかりをしてゐるやうにはかいてありません。妙なやうなことと思はれるのはひとつにはわれわれ現代の道德でばかりすべてを観るからで、少しは、その時代の風習といふことも知つてみれば納得のいくこともあるのです。さういふことを知つたうへで見ますと、なかなかの誠實なやさしい心の大きい理想的な人間として描かれてあることに気がつきませう。

紫式部といふこの作品の作者は、立派なこと、をかしのこと、みな心得てゐてかいてゐるやうで、物語の中でをかしのことを身分高い人などがするときには「……し給ふ」などといふ敬ふ言葉をわざと使はないでかいたりしてゐるところなどありまして、實によく考へてゐると思ひます。

そして作者はまた、支那の學問がたいへん尊ばれた時代に生き乍ら、やはり根本は、大和魂（日本精神）といふものを、どこどこまでも主にしなければならぬといふしつかりした考へを持つてをりました。女性であり乍ら、實にしつかりしたものだと思ひます。

また、作者は女性なのでありますから、自然そこには、女性問題、特に女性の結婚問題などを大切なものとして、この物語の中で取扱つてをりますが、彼女の考へてゐた結婚観などといふものは、どこまでも正しい理想を以て貫かれてゐたやうであります。誤つた結婚はどこまでも退けられねばならないと思つてゐたのです。それをただ理窟でなく、ひとつの事柄として、はつきり誰にでも納得のいくやうにかいてゐるのです。前におみせしたやうなこまやかなうつくしい筆で。

さういふいろいろな、深いところがしつかりと美しくみごとに書いてあるために、千年たつても立派な古典として輝きを失はないでゐるのであります。

平家物語について

1 は し が き

壽永二年の春浅い頃、源平の兩軍が四國の讃岐の海で向ひ合つたとき、平家軍から美人を乗せ、赤地に金の日の丸の扇を竿の先に挟んで源氏の軍をさし招きましたが、そのとき、義經の家來であつた那須與一宗高が、その扇の的をみごとに射たといふことは、あまりに有名な話であります。

この話は、まことに古くからわれわれ國民の間に傳へられてをり、貴方がたばかりではなく、われわれの先祖も、お爺さんも、お婆さんも皆よく知つてゐることなのです。

では一體、これはどんな本にかいてある話かといひますと、それは「平家物語」といふ本にあるのであります。

いまこの那須與一の話の「平家物語」にあるまゝを例しに少しばかりおめにかけます。

「頃は二月十八日酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。

船は揺り上げ揺り据る漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には、平家、船を一面に並べて見物す。陸には、源氏、櫓を並べてこれを見る。何れも何れも、晴ならずと云ふ事なし。與一、目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現・宇都の宮・那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の眞中射させて賜はせ給へ。これを射損するものならば、弓切折り自害して、二度面を向ふべからず。今一度、本國へ歸さんと思し召さば、此の矢はづさせ給ふな」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一、鎧を取つてつがひ、よつ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏せ、弓は強し、鎧は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎧は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかがやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には、平家、舷を控いて感じたり。陸には、源氏、箆を控いてとよめきけり。」

この文章をくりかへして讀んでごらん下さい。實にうつくしくそしてきびきびした無駄のないうまい文章だと思ひます。この文章を今の文章に直してしまふことはできません。直したら、これだけのうまみといふものがすつかり消えてしまふのです。

しかし、このままでは或ひは解りにくいところがあるかも知れませんから、ただわけを知られる程度に今の言葉に言ひかへておきませう。

「その頃は、春の二月十八日の六時頃のことであつたし、丁度、北風が烈しく吹いたので磯を打つ浪も高かつた。扇をさした船は浪にゆられて上つたり下つたり漂ふので、扇も竿に定まらずヒラヒラと動いた。沖では平家軍が船を一杯ならべて見物してゐる。陸では源氏が馬のくつわをならべてこの有様を見てゐる。さういふわけで、すべてが晴れの見物である。そこで與一は、ちつと眼をふさいで「八幡大菩薩様に心からお願ひします。特に私の故郷の神様である、日光の權現様、宇都宮の權現様、那須の大明神様よ、願くはあの扇の眞中を私に射させて下さい。もしこれを射そこなふなら、私は弓の弦を切り折つて自害して、二度と人に逢ひません。どうぞ、もう一度私を生れ故郷に歸してやらうと、神様がお思ひになるなら、どうぞ此の私の射る矢をはづさせないで下さい。」と、心のうちでちつと祈り念じて、閉ぢた目を開いてみますと、さつきより風も少し弱つて、扇も射やすくなつたのである。そこで與一は鎧矢（かぶら）といふ木や角で造つた中がガラン洞になつてゐる穴があいてゐるものを附けた矢で、射ると空氣がはいつて音をたてるので敵をおどかすためなどに射る）を取つてつがへ、十分弓を引きしぼつてとヒョーと放つた。與一は背の小さい男とは

いふものの、その割りに十二束三伏（指五本をそろへた長さが十三と、指三本だけの長さを加へたもの）といふ長さの矢だし、弓は強い弓だし、鎧はあたりの海邊にひびきわたるほど、ビューと長く鳴つて、立派にその扇の要の^{すたの}ところから一寸ばかりのそこを、ひいふつといふ音をたてて射切つてしまつた。そして鎧矢は遠く海へ落ちてしまつたので、扇はパツと空に舞ひあがつた。春の風にひともみふたもみヒラヒラともまれて海の中へさつと散り落ちたのである。すつかり紅く塗つた扇が、夕日がキラキラと輝やいてゐる中を、海の白い波のうへに漂ひ、浮いたり沈んだりしてゆられてゐるのを、沖では平家が船の横を叩いて感心しさはいだ。また陸では、源氏が矢を入れて背中に背負ふ籠を叩いてやんやと言つた。」

2 平家物語とはどんな本か

この話のほかには、「鶴越^{つるごし}」の話、「弓流し」の話、「敦盛の笛」の話など、いろいろ知つてをられるであります。かうした話はみな、この「平家物語」の中にかいてある話なのであります。

それでは一體、「平家物語」といふのは、どういふ本でありますか。それはひと口に言へば「戦争文學」であり、「歴史小説」であります。平家といふ武門の一族が非常な勢ひで興つて、わづか二

十年あまりで、すぐ源氏と争ひ、そして滅びてゆくことをかき記したものであります。

即ち、貴方がたが既に國民學校の歴史で習つた、武士といふものが興つてきた頃の、歴史や戦ひのことがかいてあるのです。それでは、たださういふ勇ましいことばかりが書いてあるかといふと、さうではなく、中にはまことに優美な話、哀れな話などもかいてあるのです。

そして、さういふ武士が興り、勇ましい戦などが行はれた時代のこと、武士が政治上の権力を持つてきた時代の有様が書かれてありますので、それより前の藤原氏などといふ公卿などが政權を握つてゐた、平安朝時代の文學などは、だいぶ違つた性質や形を持つてゐるわけです。つまり、前にお話した「源氏物語」などといふ作品などは、およそ變つたものであることは、おわかりのことと思ひます。つまり、やさしいみやびやかなお公卿様が政治を執り、文化を作つてゐたときと、武張つた武士がそれに取つて代つてきた時代の文學とでは、このやうに違つたものになるだらうと、私たちは考へることができると思ふのです。

そして特に面白いことは、この「平家物語」のかかれた時代が、また書いてあることが、丁度、或る意味で、いま私たちの生きてゐるこの現代と性質が似てゐることであり、

私たちは、いま世界が非常な勢ひで動き變りつつあることを識つてをります。そして特に、この

日本も全く新しい日本へと進み變らうとしてゐます。そのことは、私たちの日常の生活が論より證據で、どんどんと變つていきつつあります。それは世界も、そして日本も、舊秩序から新秩序建設へと進みつつあると言はれてゐる所以であります。

ところで、「平家物語」に書かれてある時代も、やはり、舊秩序から新秩序へと烈しい轉換をしてゐた時代なのであります。この時代の舊秩序の時代といふのは、藤原氏の支配した時代であり、新秩序の時代といふのは、即ち武士——つまり平家とか源氏などといふものが勃興して新しい政治や經濟や文化を作らうとする時代なのであります。このことに就いては、尙、あとで述べませう。

3 平家物語をかいた人

この「平家物語」を誰が書いたか、といふことに就いては、やはり、學者たちの間に昔からいろいろ説がありますが、今では大體きまつたやうであります。

それは、やはり鎌倉時代の人で有名な兼好法師といふ人の書いた「つれづれ草」といふ隨筆の中に、「後鳥羽院の御代に信濃前のぶの司行長つかさといふ人があつて、出家して慈鎮じちん和尚おんかうといふ坊さんの世話になり、そこで平家物語を作つて生佛いふぼといふ盲人に教へて語らせた」

といふ意味のことが記されてゐるのです。つまり、この行長といふ人が「平家物語」の作者だといふことになつてゐます。慈鎮といふ坊さんは當時の廣い學問に通じた偉い人なので、また有名な歌人でもありました。行長も坊さんになつて、この人の世話になりながら、かういふ立派な物語りをかいたのです。

日本のかういふ昔の物語をかいたり、歌を詠んだりした人は、皆、武士であつたり、役人であつたりすることをやめて、坊さんのやうな自由な身分になつてゐる人がたいへん多いのですが、(たとへば歌詠みで名高い西行などといふ人もさうです)行長もそのひとりで、自分の生きてゐる時代のことを考へて、それに就いて意見をかいたりするには、かういふ世間から離れた身分が都合がよかつたので、たとへば世間から退いてゐても、精神ですつかり世間から遠ざかつてしまつてゐるのではないので、この點は注意すべきことだと思ひます。だから、或る意味で日本の昔から引き續いてきた學問や文學などといふものは、かういふ世間を捨てた人たちに依つて受け繼がれて進んできたといつても差し支へないと思ふのです。

それで、この行長がこの物語をかいたとしても、われわれが今、讀むところの「平家物語」は、おそらく永い間に、後の人が少しづつ書き足してしまつたものらしいのです。だから、その書き足

した人はいくたりあつたか、また誰であるかもわかりませんが、始めは行長ひとりであつても、結局、いく人かのわれわれの知らない作者がある筈だといふことを考へておいてよいと思ひます。實は、このことは何も「平家物語」にかぎらず、かういふ古い作品にはよくあることなのです。

それからもうひとつ、先に言つた「つれづれ草」といふ本に「生佛といふ盲人に教へて語らせた」とかいてあると言ひましたが、このことも注意しておくべきことと思ひます。それといふのは、私たちはいま、この「平家物語」をただ眼で見ただけですが、これは實は昔は盲人の作曲者が節を作つて、それを吟じては語つたものであるといふことです。つまりただ本として讀むものではなく、つまり、いま私たちが「常陸丸」や「石童丸」の話を薩摩琵琶でもつて聽くやうに、半分、音樂的に聽いたものであるといふことです。だから「平家物語」の作者といふときには、文章をかいいた人と、かういふ作曲家とを、含めたものとして解しなければならぬでありませう。たとへば、世間でうたつてゐる「謡」の文句をかいいた人も作者だが、あの節を作つた人もやはり作者なのだ、といふことと同じわけになるのです。

そこで再び話を前に戻すことになりましたが、この「平家物語」をかいいた作者は、どういふ考へや心持から作つたのでせうか。

先づ考へられることはこの物語の最初のかき出しの文句です。

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。驕れる者久しからず、只春の夢の如し。……」

(昔、印度にあつた祇園精舎といふ寺の鐘の音には、世の中の凡ての物は皆、變つて止まないといふ意味のひびきをこめてゐるし、常に變らぬ木である沙羅の木もお釋迦様がなくなられたときは枯れて花の色が變つたので、即ちどんな盛んなものでも、いつかは必ず衰へるといふ、ほんとのわけをあらはしてゐる。だからどんなに、えらさうに得意になつてゐる者でも永くそれがつづくことはない。全く春の夜にみる夢みたいにはかないものである。)

この有名な文句にあらはれてゐる考へは、どういふ思想であるかといひますと、これは佛教の考へなのであります。世界のあらゆるものは變つて止まないものだとか、盛んなものは必ず衰へるのだ、などといふのは、それでありませう。

つまりかういふのが、この作者の世界や歴史やあらゆる物を考へるときの、大體、根本の思想となつてゐるやうです。かういふ思想を持つてゐなければ、この時代の人間はおそらく生きて行けなかつたのでせう。さう考へることに依つて、その日その日を意義あるものとして生きてゐたのであ

りませう。作者もこの時代の人間であつてみれば、當然のことだと思ひます。

それだから「平家物語」のかき方でも、始めは平家一族が、一時は世間から忘れられてゐたやうな有様であつたのに、次第に勢ひをえて、清盛の時代からは非常な権力を持つてしまふのですが、それまでのことはあまり委しくは書かないで、清盛が榮華を極めてゐることをすぐに述べ、そしてそこに早くも平家が衰へて行く兆しをひそかに示すやうに描いて、それから源氏が興つて、實にもろくも平家は敗れ衰へて行くことを力をこめてかいたのです。

だからこの作品全體のうへにさういふ作者の思想といふものは貫かれて出てゐます。このことはまた、この作品に限らず、文學の作品（それは昔のものでも今のものでも同じです）にはいつも、作者の思想がひとりで出てくるのが普通です。

だからこの作者の考へは、すべてが亡びてしまひ變つてしまふが、亡びない變らない永遠なるものは、佛教に依つて救はれるあの世の生活であると考へてゐたのでした。そのことが人間を救つてくれる唯一つの道であるとしたのです。

ところで、ここで注意しなければならぬことは、さういふ風に、ただ亡び行くものを悲しんでゐ、いたんでゐるやうな思想を示してをり乍ら、「平家物語」は、ただかういふ悲哀の文學であると

のみいへない點があることです。それは、衰へ亡びて行くものに、取つて代る、新しく興り來たる力強いものにも、非常な興味を持つてゐることです。つまり、作者は平家にのみ同情してゐないで、源氏にも興味を持ち、十分の理解を示してゐます。古い京都的なものだけでなく、新しい關東的なものに注目してゐます。だから荒々しい勇ましい源氏の武士たちの行動や心を描くときにも、實に生き生きとした筆の力をみせてゐるのです。義經だの義仲だののことをかくのに、それがよく現はれてゐます。

一體、このことは何を現はしてゐるのでせうか。

それはほかでもありません。實にこの作者が、古い時代にも同情や愛情を持つたが、また新しい時代にも大いに意義を感じてゐたことである筈です。このことは考へると、ちぐはぐな、まともでないことのやうにも思へますが、かういふいろいろなものを含んでゐるのが、人間の生きてゐる時代といふものの眞の姿でして、それがあるがままに見てかいたといふところが、實は面白いことであり、また作者の偉いところですよ。どこの國の、またどの時代の偉い文學者のかいた作品にも、かういふまるで反對なやうにみえる二つの現象などがよく示されるのであることを知らねばなりません。

4 平家物語のかかれたのはどんな時代か

日本の古代社會の成り立ちは、もう日本の歴史上の躍進のうへには意味をうしなつてしまつたことから、あの大化の改新といふ有名な大改革が行はれましたが、その線に沿つて、藤原氏はその覇權を握つて中央に君臨したのでした。けれどもただ中央のみあつた官僚的な貴族でしかなかつた藤原氏の榮華の夢が華やかであつたひまに、地方にはその土地のうへに生ひ育つた新しい勢力が頭をもたげてゐたのでした。それに氣が付いた藤原氏は、あはてて、むしろ對立關係にあつた源平二氏をただ無闇に利用して、これを抑へたのであります。ここに中央にも、地方にもそれぞれ勢力争ひのやうな現象が引き起されたのでして、この時代を歴史では普通に「院政時代」と呼んでをります。

ところがこの間に、例の保元・平治の亂が起り、そのときの平氏の活躍に依つて、遂に源氏の力を打ちひしいで、尙、藤原氏がたいへんな「莊園」といはれる私有の土地を持つてゐたのを大部分自分のものとしてしまひました。そしてそれらをすつかり自分のものとなしえないときは、さういふ舊勢力の地盤と握手するといふ方法を取つたのであります。

けれども、平家がどこまでも武家らしい方法と性質で歴史上に於て貫き通すことができなかつたために、いつか彼らは従來の藤原氏と同じやうなものになつてしまつたのです。即ち、ただ形だけは新興の武士であつても、心は古い貴族と同じであつたのです。早い話が、平家の公達などといはれる人々が、どんなにうつくしい鎧甲に身をかためてゐても、戦には弱いし、心はやさしくて、まゐるでお公卿さんと變らないといふことを考へてみて下さい。

かうして折角、新興勢力として歴史のうへに現はれたやうな平氏の徹底しないものを、もつと徹底したものとして次に現はれてきたのが、實に源氏でありました。即ち、賴朝が鎌倉に幕府を開いて、その政治上のやり方のうへで舊制度とは違つたものをみせてきたのです。

そしてここに至つて始めて武家政治といふものが行はれはじめたと言つていいのであります。このことはどうしても日本の歴史が進んでゆくためには、避けられないことであつたのですが、實際問題として、このやうに武家が新しく覇權を握るといふことは、朝廷にとつては甚だ不都合なことでありますので、とうとう承久の亂といふ大事件が起りました。これは勢力を伸ばしてきた武家に對して、朝廷が戦ひを挑まれたことでもあります。かやうにして日本の歴史は進んでゆきました。つまり、平安朝から鎌倉時代へ——貴族の時代から武家の時代へ。かういふ政治上、經濟上、文